空港整備地区南側貨物取扱施設
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

— 芝山町井森戸遺跡・成田市東三里塚岩之台（井森戸）2遺跡 —

平成18年3月

成田国際空港株式会社
財団法人　千葉県教育振興財団

空港整備地区南側貨物取扱施設
埋蔵文化財調査報告書II

— 芝山町井森戸遺跡・成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡 —

序　文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年９月１日付で名称変更）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告書第534集として，成田国際空港株式会社の整備地区南側貨物取扱施設造成工事に伴って実施した芝山町井森戸遺跡及び成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代の石器類，縄文時代の住居跡や土抗，古墳時代の住居跡などが検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また郷土の歴史を理解するための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年３月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長　佐　藤　　健太郎

凡　例

1　本書は，成田国際空港株式会社による空港整備地区南側貨物取扱施設建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，山武郡芝山町岩山字井森戸所在の井森戸遺跡（遺跡コード409－014）及び成田市東三里塚字岩之台所在の岩之台（井森戸）２遺跡（遺跡コード212－064）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，旧新東京国際空港公団から委託を受け，財団法人千葉県文化財センター（平成17年９月１日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。

4　発掘調査と整理作業の実施期間及び担当者は本文中に記述した。

5　本書の執筆・編集は，第２章の一部を芝山調査室上席研究員今泉潔が，その他を芝山調査室主席研究員兼室長石倉亮治がそれぞれ担当し，全体の編集は石倉亮治が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育委員会教育振興部文化財課，成田国際空港株式会社，成田市教育委員会，芝山町教育委員会のご指導・ご協力を得た。

7　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１図　国土地理院　1/25,000地形図「新東京国際空港」(N1－54－19－10－1)

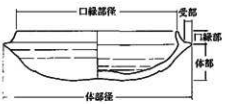
「多古」・(N1－54－19－10－2)

8　航空写真は，京葉測量株式会社による平成14年撮影（1/10,000）のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位はすべて座標北であり，日本測地系に基づく基本測量を実施した。

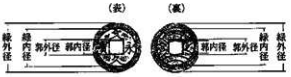
10　図版中のキャプションで（井）は井森戸遺跡を、（岩）は岩之台（井森戸）２遺跡をそれぞれ表している。

11　本書で掲載した土器・石器類及び銭貨の計測部位は以下による。



土器計測部位

石器類計測部位



銭貨計測部位

本文目次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 1
第２章　芝山町井森戸遺跡の調査 …… 6
　第１節　調査区及び発掘区の設定 …… 6
　第２節　調査の経緯 …… 6
　第３節　調査の概要 …… 6
　　1　旧石器時代 …… 11
　　2　縄文時代 …… 11
　　3　古墳時代 …… 31
　　4　その他の時代の遺構と遺物 …… 57
第３章　成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡の調査 …… 59
　第１節　調査区及び発掘区の設定 …… 59
　第２節　調査の経緯 …… 59
　第３節　調査の概要 …… 59
　　1　旧石器時代 …… 60
　　2　縄文時代 …… 65
　　3　古墳時代 …… 74
　　4　その他の時代の遺構と遺物 …… 96
第４章　まとめ …… 103
　第１節　井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡の旧石器時代 …… 103
　第２節　井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡の縄文時代 …… 103
　第３節　井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡の古墳時代 …… 105

挿図目次

第１図　主な周辺遺跡 (1/25,000) …… 1
第２図　遺跡位置図 (1/2,000) …… 7
第３図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡
　上層確認トレンチ配置図及び遺構
　分布図 (1/2,000) …… 8
第４図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡
　縄文時代土器包含層 (1/2,000) …… 9
第５図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２
　下層確認グリッド配置図及び
　拡張調査範囲 (1/2,000) …… 10
第６図　井森戸遺跡旧石器時代
　石器出土状況 (1/200) …… 12
第７図　井森戸遺跡旧石器時代石器 (1/2) …… 12
第８図　SI008住居跡 (1/80) …… 13

第９図　SI008住居跡出土遺物 (1/3) …… 13
第10図　井森戸遺跡陥穴 (1/80) …… 15
第11図　井森戸遺跡包含層出土土器(1) (1/3) …… 17
第12図　井森戸遺跡包含層出土土器(2) (1/3) …… 18
第13図　井森戸遺跡包含層出土土器(3) (1/3) …… 19
第14図　井森戸遺跡包含層出土土器(4) (1/3) …… 20
第15図　井森戸遺跡包含層出土土器(5) (1/3) …… 21
第16図　井森戸遺跡縄文時代石器出土状況 (1/400) …… 24
第17図　井森戸遺跡縄文時代石器(1) (1/2) …… 25
第18図　井森戸遺跡縄文時代石器(2) (1/2) …… 26
第19図　井森戸遺跡縄文時代石器(3) (1/2) …… 27
第20図　井森戸遺跡縄文時代石器(4) (1/2) …… 28
第21図　井森戸遺跡縄文時代石器(5) (1/2) …… 29
第22図　井森戸遺跡SI006住居跡 (1/80) …… 32
第23図　井森戸遺跡SI006住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 33
第24図　井森戸遺跡SI006住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 34
第25図　井森戸遺跡SI006住居跡出土遺物(3) (1/3) …… 35
第26図　井森戸遺跡SI007住居跡 (1/80) …… 38
第27図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 38
第28図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 39
第29図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(3) (1/3) …… 40
第30図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(4) (1/3) …… 41
第31図　井森戸遺跡SI009住居跡 (1/80) …… 45
第32図　井森戸遺跡SI009住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 45
第33図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 46
第34図　井森戸遺跡SI010住居跡 (1/80) …… 48
第35図　井森戸遺跡SI010住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 48
第36図　井森戸遺跡SI010住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 49
第37図　井森戸遺跡SI010住居跡出土遺物(3) (1/3) …… 50
第38図　井森戸遺跡SI011住居跡 (1/80) …… 52
第39図　井森戸遺跡SI011住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 53
第40図　井森戸遺跡SI011住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 54
第41図　井森戸遺跡SB001掘立柱遺構 (1/80) …… 57
第42図　井森戸遺跡その他の遺物(4) (1/3) …… 58
第43図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第１地点石器出土状況 (1/80) …… 61
第44図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第１地点出土石器(1) (1/2) …… 62
第45図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第１地点出土石器(2) (1/2) …… 63
第46図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第２地点石器出土状況 (1/80) …… 64
第47図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第２地点出土石器 (1/2) …… 64
第48図　岩之台（井森戸）２遺跡陥穴(1) (1/80) …… 66
第49図　岩之台（井森戸）２遺跡陥穴(2) (1/80) …… 68
第50図　岩之台（井森戸）２遺跡包含層出土土器(1) (1/3) …… 69
第51図　岩之台（井森戸）２遺跡包含層出土土器(2) (1/3) …… 70
第52図　岩之台（井森戸）２遺跡縄文時代石器出土状況 (1/400) …… 72
第53図　岩之台（井森戸）２遺跡縄文時代石器 (1/2) …… 73

第54図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI001住居跡 (1/80) …… 75
第55図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI001住居跡出土遺物 (1/3) …… 76
第56図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI101住居跡 (1/80) …… 80
第57図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI101住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 80
第58図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI101住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 81
第59図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI102住居跡 (1/80) …… 83
第60図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI102住居跡出土遺物 (1/3) …… 83
第61図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI103住居跡 (1/80) …… 85
第62図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI103住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 85
第63図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI103住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 86
第64図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI104住居跡 (1/80) …… 88
第65図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI104住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 88
第66図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI104住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 89
第67図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI104住居跡出土遺物(3) (1/3) …… 90
第68図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI105住居跡 (1/80) …… 93
第69図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI105住居跡出土遺物(1) (1/3) …… 93
第70図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI105住居跡出土遺物(2) (1/3) …… 94
第71図　岩之台（井森戸）２遺跡
SI106住居跡 (1/80) …… 95
第72図　岩之台（井森戸）２遺跡SI106住居跡
出土遺物 (1/3) …… 95
第73図　岩之台（井森戸）２遺跡
方形周溝状遺構 (1/80) …… 97
第74図　岩之台（井森戸）２遺跡
方形周溝状遺構出土遺物 (1/3) …… 97
第75図　岩之台（井森戸）２遺跡
SB002掘立柱状遺構 (1/80) …… 98
第76図　岩之台（井森戸）２遺跡
D001・SD101溝状遺構 (1/160) …… 99
第77図　岩之台（井森戸）２遺跡
SD001・SD101溝状遺構出土遺物 (1/3)
……100
第78図　岩之台（井森戸）２遺跡
SD102溝状遺構 (1/160) ……101
第79図　岩之台（井森戸）２遺跡
SD102溝状遺構出土遺物 (1/3) ……101
第80図　岩之台（井森戸）２遺跡
その他の遺物(1) (1/3) ……102
第81図　岩之台（井森戸）２遺跡
その他の遺物(2) (1/2) ……102
第82図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡の
古墳時代の集落 (1/2,000) ……104

表目次

第１表　主な周辺遺跡 …… 1
第２表　石器観察表（井森戸・旧石器）…… 11
第３表　石器観察表（井森戸・縄文）…… 30
第４表　石器観察表（岩之台・旧石器）…… 65
第５表　石器観察表（岩之台・縄文）…… 74

図版目次

図版１　航空写真（1/10,000）
図版２　岩之台（井森戸）２遺跡調査前風景
井森戸遺跡調査前風景
（岩）1C-00グリッド下層セクション
（井）2C-52グリッド下層セクション
（井）縄文土器包含層
（井）3D-07グリッド旧石器時代遺物出土状況
図版３　（岩）石器集中第１地点出土状況
（岩）石器集中第２地点出土状況
（岩）縄文時代包含層遺物出土状況
図版４　（井）SK006・SK007・SK008全景
（岩）SK001・SK002・SK003全景
図版５　（岩）SK004・SK005全景
（井）SI008遺物出土状況・全景
（井）SI006遺物出土状況・全景
図版６　（井）SI007カマド脇遺物出土状況・全景
（井）SI009遺物出土状況・全景
（井）SI010遺物出土状況・全景
図版７　（井）SI011遺物出土状況・全景
（岩）SI001遺物出土状況・全景
（岩）SI101遺物出土状況・全景
図版８　（岩）SI102遺物出土状況・全景
（岩）SI103遺物出土状況・全景
（岩）SI104遺物出土状況
図版９　（岩）SI004全景
（岩）SI005遺物出土状況・全景
（井）SB001・（岩）SB002全景
（岩）SB002全景
（岩）SM001遺物出土状況
図版10　（岩）SM001埋葬施設遺物出土状況
（岩）SM001埋葬施設土層断面
（岩）SM001全景
（岩）SM001埋葬施設全景
（岩）SD001・SD101全景
図版11　（井）旧石器時代石器
（井）SI008住居跡出土遺物
図版12　（井）縄文時代包含層出土土器(1)
図版13　（井）縄文時代包含層出土土器(2)
図版14　（井）縄文時代包含層出土土器(3)
図版15　（井）縄文時代石器
図版16　（井）SI006住居跡出土遺物(1)
図版17　（井）SI006住居跡出土遺物(2)
（井）SI007住居跡出土遺物(1)
図版18　（井）SI007住居跡出土遺物(2)
図版19　（井）SI007住居跡出土遺物(3)
（井）SI009住居跡出土遺物
図版20　（井）SI010住居跡出土遺物
図版21　（井）SI011住居跡出土遺物
図版22　（井）その他の遺物
（岩）旧石器時代第１地点出土石器(1)
（岩）旧石器時代第１地点出土石器(2)
図版23　（岩）旧石器時代第２地点出土石器
図版24　（岩）縄文時代包含層出土土器
図版25　（岩）縄文時代石器
図版26　（岩）SI001住居跡出土遺物
図版27　（岩）SI101住居跡出土遺物
（岩）SI102住居跡出土遺物
図版28　（岩）SI103住居跡出土遺物
（岩）SI104住居跡出土遺物(1)
図版29　（岩）SI104住居跡出土遺物(2)
（岩）SI105住居跡出土遺物
図版30　（岩）SI106住居跡出土遺物
（岩）SM001方形周溝状遺構出土遺物
（岩）SD001・SD101溝状遺構出土遺物
（岩）SD102溝状遺構出土遺物
（岩）その他の遺物

第1章　はじめに

第1節　調査の経緯

成田国際空港株式会社（旧新東京国際空港公団）は，山武郡芝山町岩山字井森戸及び成田市東三里塚字岩之台地先において整備地区南側貨物取扱施設用地の造成工事事業を計画し，千葉県教育委員会に遺跡の有無を照会したところ当該地先が芝山町井森戸遺跡及び成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡の一部に含まれることが確認されたため，千葉県教育委員会と協議の結果，事業地区内の埋蔵文化財の取扱いについて記録保存の処置を講ずることとなり，財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

井森戸遺跡は成田国際空港の南端に位置しており，整備貨物地区南側貨物取扱施設の用地造成のため，平成14年度と平成15年度の両年度にわたり埋蔵文化財調査が実施された。井森戸遺跡は市町界を挟み北の成田市東三里塚側に岩之台（井森戸）２遺跡（211－064），南の芝山町側に井森戸遺跡（409－014）となっているが，調査の便宜上両事業地に共通する調査区を設定し，発掘調査を実施した。

現地の調査は平成14年度に成田市東三里塚側の岩之台（井森戸）２遺跡9,250㎡/25,000㎡と芝山町側の井森戸遺跡6,750㎡/8,000㎡が実施され，平成15年度に成田市側の岩之台（井森戸）２遺跡15,750㎡/25,000㎡と芝山町側の井森戸遺跡1,200㎡/8,000㎡が実施された。

それぞれの調査は，次の組織と担当者により実施された。

平成14年６月17日～平成15年３月31日（成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡）

東部調査事務所長　折原　繁，調査室長　横山　仁

平成14年６月17日～平成15年３月31日（芝山町井森戸遺跡）

東部調査事務所長　折原　繁，調査室長　横山　仁

平成15年７月15日～平成15年12月25日（成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡）

東部調査事務所長　折原　繁，副所長兼主席研究員　池田大助

平成15年７月15日～平成15年12月25日（芝山町井森戸遺跡）

東部調査事務所長　折原　繁，副所長兼主席研究員　池田大助

また，整理作業は以下の期間及び組織と担当者により実施された。

平成15年１月５日～平成15年３月31日

東部調査事務所長　折原　繁，副所長兼主席研究員　池田大助，上席研究員　今泉　潔

平成16年９月１日～平成17年３月31日

東部調査事務所長　鈴木定明，主席研究員兼室長　石倉亮治

平成17年４月１日～平成17年６月30日

東部調査事務所長　鈴木定明，主席研究員兼室長　石倉亮治

第1図　主な周辺遺跡 (1/25,000)

第２節　遺跡の位置と周辺遺跡

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡は，成田国際空港の南側の標高41m前後の下総台地北部に位置する。これらの遺跡のある台地周辺は，太平洋に南下する木戸川及び高谷川，印旛沼に北上する桜木名川の各水系の分水界となっている。また，両遺跡は市町界及び調査年次により複雑に調査工程が設定されたが，基本的には同じ台地上の一連の遺跡（井森戸遺跡）として扱うことができる（2）。

第１表　主な周辺遺跡

No.	遺　跡　名	所　在　地	時代（時期）	水　系	立地・現状	文献
1	井森戸遺跡	山武郡芝山町岩山字井森戸120番－２他	旧石器，縄文（早），古墳	高谷川	台地上	1
2	井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡	成田市東三里塚字岩之台129－１他	旧石器，縄文（早・前・中・後），古墳	高谷川	台地上	2
3	香山新田中折山遺跡（No.10）	成田市香山新田字中折山	縄文	高谷川	台地上	3
4	香山新田中横堀遺跡（No.7）	成田市香山新田字横堀101－２他	縄文	高谷川	台地上	4
5	香山新田金沢台遺跡（No.15）	成田市香山新田字金沢台	縄文（早・前・中）	高谷川	台地上	5
6	香山新田念仏堀遺跡（No.8）	成田市香山新田字念仏前	縄文	高谷川	台地上	6
7	木の根拓美遺跡（No.6）	成田市木の根字拓美192他	旧石器，縄文（早）	高谷川	台地上	7
8	木の根東台遺跡（No.5）	成田市木の根字東台217他	旧石器，縄文（早）	高谷川	台地上	8
9	三里塚国料牧場遺跡	成田市三里塚字御料牧場１－２他	旧石器，縄文（早・前）	高谷川	台地上	9
10	東三里塚吉野台遺跡（No.3，No.51，No.52）	成田市東三里塚字吉野台	旧石器，縄文（早・中）	高谷川	台地上	10
11	谷山中袋遺跡（No.2）	山武郡芝山町岩山字中袋他	旧石器，縄文（早・前・中）	高谷川	台地上	11
12	岩山中袋遺跡（No.2）	山武郡芝山町岩山字中袋他	縄文	高谷川	台地上	12
13	大黒馬土手・狐谷遺跡	山武郡芝山町大黒字狐谷32－１他	縄文，古墳，近世	高谷川	台地上	13
14	吉込遺跡（No.14，No.55，No.56）	成田市吉込字吉込	旧石器，縄文（早），奈良・平安	尾羽根川	台地上	14
15	坂志岡・尼ヶ谷遺跡	山武郡芝山町大里字坂志岡・尼ヶ谷162他	縄文（早）	高谷川	台地上	15
16	上宿遺跡	山武郡芝山町吉地字上宿1570他	縄文	高谷川	台地上	16
17	吉宿遺跡	山武郡芝山町吉地字吉宿1432他	縄文（後），奈良・平安	高谷川	台地上	17
18	東三里塚祖神遺跡	成田市東三里塚字祖神256他	縄文（早・中），古墳	高谷川	台地上	18
19	神ノ台遺跡（１）	山武郡芝山町朝倉字神ノ台	縄文（早），古墳，奈良・平安	高谷川	台地上	19
20	神ノ台遺跡（２）	山武郡芝山町朝倉字神ノ台	縄文（早），古墳，奈良・平安	高谷川	台地上	20

文献

1　1995主要地方道成田松尾線Ⅳ・2003旧296号線代替用地内埋蔵文化財調査報告書
　　2004空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書３
2　2006空港整備地区南側貨物取扱施設埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（本年度刊行）
3　1984新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ・1993新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅶ
4　1984新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ・1993新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅶ
5　2004建設センター・保全事務所用地内埋蔵文化財調査報告書
6　（未調査）
7　1981木の根
8　1981木の根
9　1988御料牧場遺跡　麻薬犬訓練所予定地内埋蔵文化財調査報告書
10　1981木の根
11　1986新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ・1997土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書
12　1986新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅴ・2003旧296号線代替用地内埋蔵文化財調査報告書
13　2003主要地方道成田松尾線Ⅻ・2005空港整備地区南側貨物取扱施設埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
14　1971三里塚・1983新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅲ
15　1992芝山町内遺跡発掘調査報告書
16　1985主要地方道成田松尾線Ⅳ・2004空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書３
17　1985千葉県埋蔵文化財抄報（昭和60年度）　古宿・上谷遺跡
18　1981千葉県埋蔵文化財抄報（昭和56年度）　南三里塚祖神遺跡
19　2003主要地方道成田松尾線Ⅻ
20　2003主要地方道成田松尾線Ⅻ

井森戸遺跡の埋蔵文化財調査は，昭和60年の県道成田松尾線通称『はにわ道』の埋蔵文化財調査からはじまり，平成14年度には今回報告された井森戸遺跡の南に隣接する旧296号線代替用地内の埋蔵文化財調査及びさらに南に隣接した空港南部工業団地の埋蔵文化財調査が旧財団法人千葉県文化財センターにより調査され報告されている（1）。

成田国際空港周辺では，昭和50年代から空港建設に関わる埋蔵文化財調査が実施されてきており，これまでに多くの遺跡が調査されてきた。第１図及び第１表は，これまで成田国際空港関連の埋蔵文化財調査として調査された遺跡の位置と分布の状況を示している。

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡のある台地の北東側には，調査時には既に削平されグランド跡地となっていた窯地を挟み，平成15年に調査された大里馬土手・柳谷遺跡がある（13）。岩之台（井森戸）２遺跡と井森戸遺跡の境界付近には成田市と芝山町の行政区界が複雑に重なり，発掘調査と調査報告書の作成にあたり遺構・遺物の関連性には特に配慮を要した。平成14年には空港南部工業団地造成と旧296号線代替用地の道路建設に際し，岩之台（井森戸）２遺跡及び井森戸遺跡のそれぞれ一部が発掘調査された。

空港南部工業団地造成用地内では井森戸遺跡の一部が発掘調査され，旧石器時代の石器集中が２か所で見られ，縄文時代早期の包含層及び陥穴・土坑，弥生時代の土坑，古墳時代の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡，中近世の溝状遺構が確認された。

旧296号線代替用地内では井森戸遺跡と岩之台（井森戸）２遺跡が発掘調査され，古墳時代の竪穴住居跡や中近世の溝状遺構が確認された。

また，平成15年には整備貨物地区南側貨物取扱施設用地の造成に伴い，再び岩之台（井森戸）２遺跡及び井森戸遺跡のそれぞれ一部が発掘調査された。

高谷川水系の最も奥まった台地には香山新田新山（№10）遺跡（3），香山新田中横堀（№７）遺跡（4），金沢台（№15）遺跡（5），香山新田念仏面（№８）遺跡（6），木の根拓美（№６）遺跡（7），木の根東台（№５）遺跡（8）がある。

昭和53年に調査された香山新田中横堀（№７）遺跡は，旧石器時代のナイフ形石器・槍先形尖頭器，縄文時代撚糸文期の住居跡や陥穴状土坑群を検出された。また，昭和54年・平成元年に調査された香山新田新山（№10）遺跡では，旧石器時代では礫群・ナイフ形石器・槍先形尖頭器，縄文時代では条痕文系土器群・陥穴状土坑群を検出している。

金沢台（№15）遺跡は平成12年から平成13年にかけて調査され，旧石器から中近世に至る時代の遺構が確認された。旧石器時代では７か所の石器集中地点が確認され，安山岩・珪質頁岩・流紋岩を加工したナイフ形石器，珪質頁岩製の角錐状石器，チャート製の彫刻刀形石器，黒曜石製の掻器などが検出されている。縄文時代では２か所の縄文時代早期（撚糸文系土器・沈線文系土器）の包含層や３か所の縄文時代前期（羽状縄文系土器・貝殻腹縁文系土器）の包含層が確認されたほか，谷津を取り囲む様に７か所の陥穴状遺構が検出された。金沢台遺跡の縄文時代の特徴は，台地中央部に西側から入り込んだ谷津を取り囲むように遺構と遺物の包含層が展開していることである（5）。

香山新田念仏面（№８）遺跡は，香山新田新山遺跡の南の谷津を挟んだ台地に所在しするが未調査である。

木の根東台（№５）遺跡は昭和51年に調査され，旧石器時代のナイフ形石器や槍先形尖頭器が出土した。この遺跡と隣接する台地上にある木の根拓美（№６）遺跡は昭和52年に調査が行われ，旧石器時代のナイ

フ形石器や縄文時代の撚糸文土器群と陥穴状土坑群が検出されている。

成田国際空港は房総半島北東部の分水界付近に位置するため，隣接する遺跡でも水系を異にする状況にある。古込（№14・№55・№56）遺跡（14）は比較的近い距離にありながら，北西に流れる尾羽根川水系に面する台地上に立地する。古込遺跡は昭和46年・53年に調査され，縄文時代早期の条痕文系土器群や黒曜石製石器群が検出された（2）。

空港A滑走路南端付近には，三里塚御料牧場遺跡（9），東三里塚吉野台（№3，№51，№52）遺跡（10），岩山中袋（№2）遺跡（11）・（12）がある。

三里塚御料牧場遺跡と東三里塚吉野台遺跡はともに旧石器時代から縄文時代早期から前期の遺跡である。また，岩山中袋遺跡の（11）地点は土木保守管理センター建設に伴って発掘調査され，旧石器時代から縄文時代早期から中期の遺跡であることが判明した。岩山中袋遺跡の（12）地点は旧296号代替用地内の道路建設工事に伴って発掘調査され，縄文時代の陥穴1基が検出された。

その他の周辺遺跡では，本遺跡の東方0.75kmには縄文早期の坂志岡・尼ヶ谷遺跡（15）があり，本遺跡の西方2.5kmには縄文時代早期及び中期と古墳時代の遺跡である南三里塚遺跡（18）がある。

本遺跡東側に沿って走る通称はにわ道沿いには，上宿遺跡（16），古宿遺跡（17），沖ノ台Ⅰ遺跡（19），沖ノ台Ⅱ遺跡（20）がある。

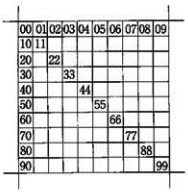
上宿遺跡は縄文時代の陥穴や土坑が検出されており，古宿遺跡は縄文時代後期及び奈良・平安時代の遺跡である。また，沖ノ台Ⅰ遺跡は縄文時代早期及び中期の遺物と古墳時代の鍛冶工房跡・竪穴住居跡・土坑が検出されている。沖ノ台Ⅱ遺跡は縄文時代中期の遺物と古墳時代の粘土採掘坑・炭窯・土坑・排滓場が検出された。このことから沖ノ台Ⅰ遺跡と沖ノ台Ⅱ遺跡は相互に関連する遺跡であり，東日本の古墳時代の製鉄技術を考える上で貴重な資料を提供する遺跡であることが判明している。

第２章　芝山町井森戸遺跡の調査

第１節　調査区及び発掘区の設定

芝山町井森戸遺跡は芝山町岩山字井森戸120－２他に所在する。

井森戸遺跡は成田国際空港の南端に位置しており，整備貨物地区南側貨物取扱施設の用地造成のため，平成14年度と平成15年度の両年度にわたり埋蔵文化財調査が実施された。



井森戸遺跡の調査区の設定は，公共座標を基準として50m×50mの方眼グリッドを設定し，北から０，１，２，…，西からB，C，D，…とし，0B，1C，2D，…と呼称した。また，各方眼グリッド内を北西端から南東端にかけて先頭の00グリッドを第１段第１列とし10列ごとに次段の西端に移り，00～99の10段10列100分割小グリッドを設定し，遺構の検出や遺物の取り上げの際の基準とした。

第２節　調査の経緯

井森戸遺跡は，空港南端を東西方向に直線状に走る旧296号線の南に広がる標高43m前後の台地上に位置する。

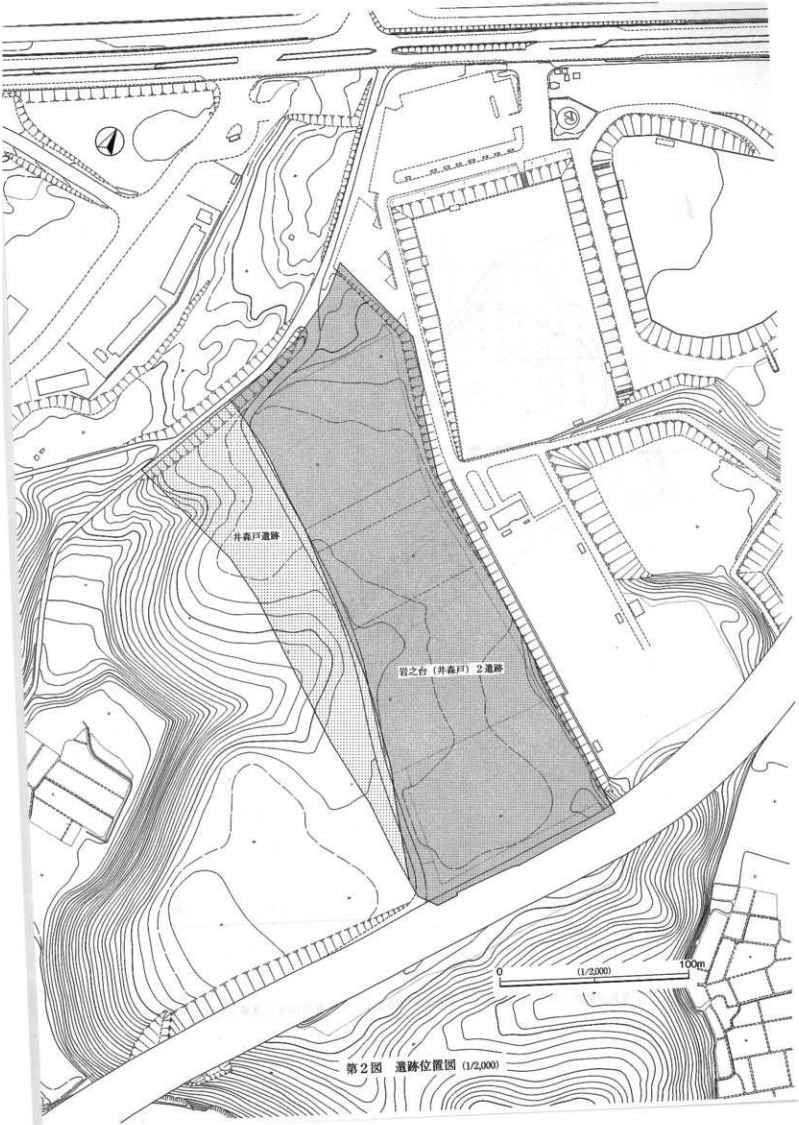
井森戸遺跡の調査は，２年度にわたり実施され，平成14年７月17日～平成14年８月30日まで対象面積6,750㎡のうち675㎡について上層確認調査，平成14年９月２日～平成14年11月29日まで対象面積6,750㎡のうち270㎡の下層確認調査をそれぞれ実施した。その結果，平成14年９月２日～平成15年３月30日まで2,140㎡の上層本調査と64㎡の下層本調査が実施された。また，平成15年７月18日～平成15年10月30日まで対象面積1,250㎡のうち125㎡の上層確認調査を実施しその結果，平成15年11月１日～平成15年11月30日まで221㎡の上層本調査が実施された。なお，本調査終了後に平成15年12月１日～平成15年12月25日まで対象面積1,250㎡のうち50㎡の下層確認調査のみを実施した。

第３節　調査の概要

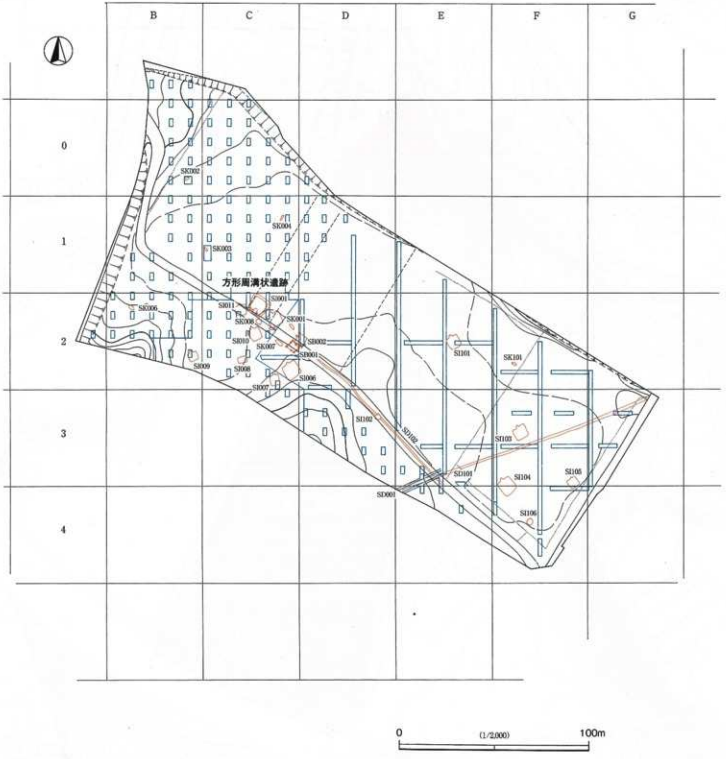
井森戸遺跡は，成田国際空港の南に隣接した同じ台地上にあり，成田市と芝山町の市町界によって分断されているものの岩之台（井森戸２）遺跡とは本来は同一の遺跡である。

両遺跡を含む井森戸遺跡については，主要地方道成田松尾線（通称はにわ道）建設工事に伴う埋蔵文化財調査（１），旧296号線代替用地造成にともなう埋蔵文化財調査（２），県企業庁関連の空港南部工業団地造成にともなう埋蔵文化財調査（３）がそれぞれ実施されている。

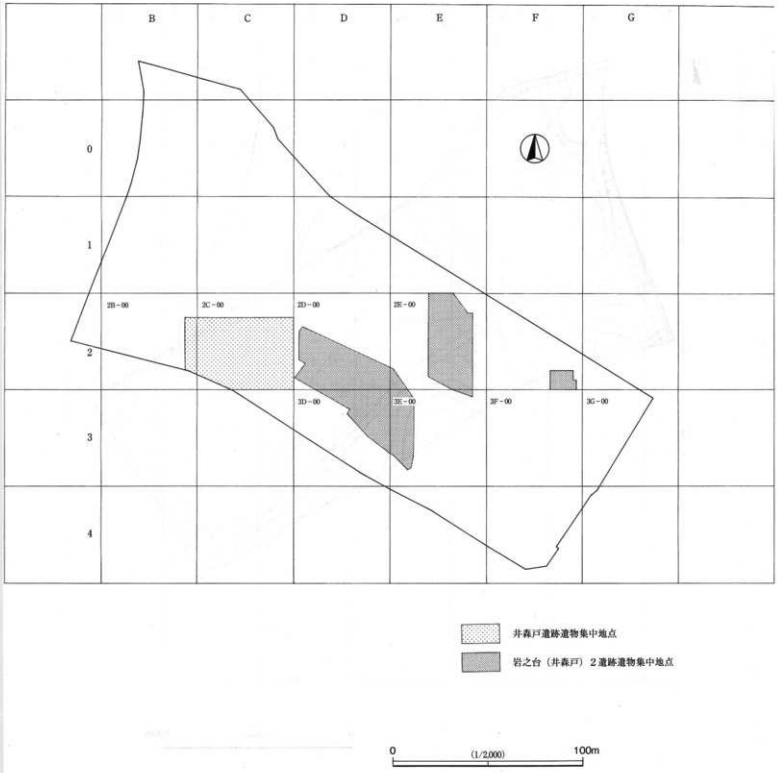
井森戸遺跡は，市町境の道路を挟んで台地の南半部を占めており，旧石器時代の石器出土地点１か所，縄文時代の遺物包含層１か所，縄文時代の住居跡１軒，陥穴３基，古墳時代の住居跡５軒，掘立柱状遺構１棟が検出されている。なお，井森戸遺跡に一部延びている溝状遺構（SD001）については岩之台（井森戸２）遺跡の溝状遺構のうちSD101の一部として扱うものとする。



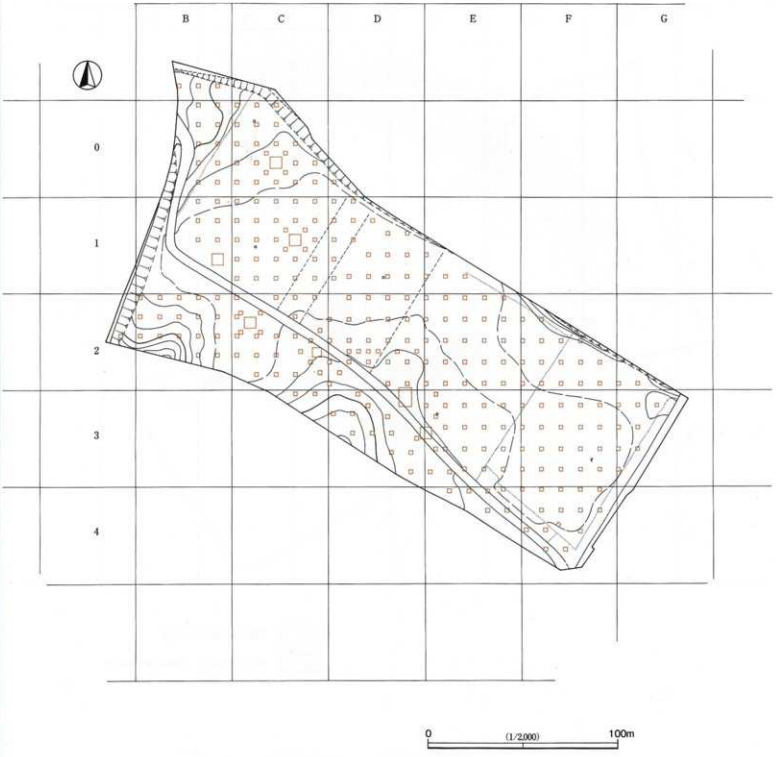
第２図　遺跡位置図（1/2,000）



第３図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡上層確認トレンチ配置図及び遺構分布図 (1/2,000)



第４図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡縄文時代土器包含層 (1/2,000)



第５図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２下層確認グリッド配置図及び拡張調査範囲 (1/2,000)

井森戸遺跡の調査は上層の確認調査，下層の確認調査の成果に基づき上層・下層の本調査を実施したが，基本となる層序は次のようである。

Ⅰ層は黒褐色土の現地表土である耕作土。調査前は耕作のためトラクター等により一部が削平されている。

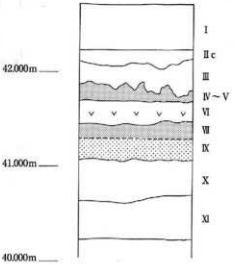
Ⅱc層は暗赤褐色土で軟質の縄文時代遺物包含層である。

Ⅲ層は黄褐色のソフトローム層である。立川ローム最上部にあたり，軟質化したローム層である。

Ⅳ層～Ⅴ層は黄褐色の硬質ローム層である。Ⅳ層とⅤ層（第1黒色帯）の区分は明確でない。上部はクラック状になり，下部はやや暗褐色に色調が変化する。

Ⅵ層は明褐色の硬質ローム層でAT（姶良丹沢）パミスを多量に包含する。

Ⅶ層～Ⅸ層は暗赤褐色の硬質ローム層で，第2黒色帯にあたる。赤色スコリアを多量に含み，粘性が強い。



Ⅹ層は暗黄褐色の硬質ローム層で，立川ローム最下層にあたる。赤色スコリアを含み下部では色調がやや青みが強くなる。

Ⅺ層は灰褐色の硬質ローム層で，武蔵野ローム最上部にあたる。粘性があり，しまりは弱い。

1　旧石器時代

石器類集中地点（第6図）

概要

井森戸遺跡の旧石器時代の調査は，確認調査の結果を基に設定された2Cグリッドから5点の剥片類が検出された。出土地点は調査区中央からやや西側に位置し，西側の谷津に突き出た舌状の台地上にある。

出土遺物（第7図，図版11）

井森戸遺跡出土の旧石器時代の石器類は，5点検出されている。1は安山岩の三角錐状の剥片である。2は表裏両面に同じ方向からの剥離痕を有する珪質頁岩の剥片で，風化面が乳白色化している。3は微細剥離痕のある黒曜石の砕片。4は2と同様に風化面が乳白色化した珪質頁岩の砕片。5は確認調査時に検出された安山岩の砕片である。

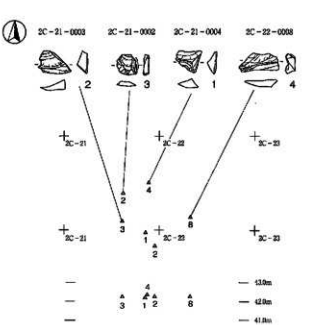
第2表　石器観察表（井森戸・旧石器）

石器集中	挿図No.	遺物番号	石材	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	打角(度)	標高(m)	器種
2C	1	2C-21-4	安山岩	Ⅲ	14.3	16.6	6.1	0.93		42.337	剥片
2C	2	2C-21-3	珪質頁岩	Ⅲ	15.2	21.3	7.1	1.13	125	42.260	剥片
2C	3	2C-21-2	黒曜石	Ⅲ	12.7	12.6	3.5	0.74	117	42.283	砕片
2C	4	2C-22-8	珪質頁岩	Ⅲ	12.9	26.4	6.3	1.36	122	42.262	砕片
2C	5	2C-21-1	安山岩	Ⅲ	11.5	12.3	3.4	0.44	150	一括	砕片

2　縄文時代

概要

遺構は調査地の西半分に，早期の竪穴住居1軒・陥穴3基，そして調査地中央部に包含層が住居を取り



第６図　井森戸遺跡旧石器時代石器出土状況 (1/200)

第７図　井森戸遺跡旧石器時代石器 (1/2)

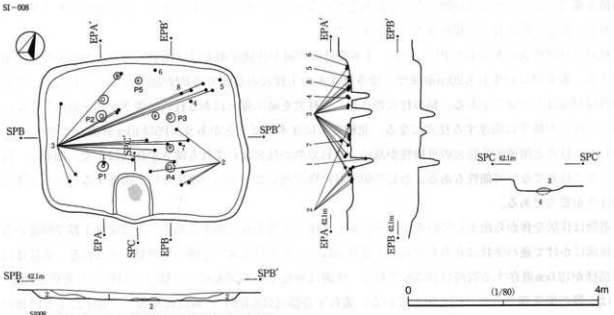
開むように広範囲に存在する。

竪穴住居

SI008（第８～９図，図版５・11）

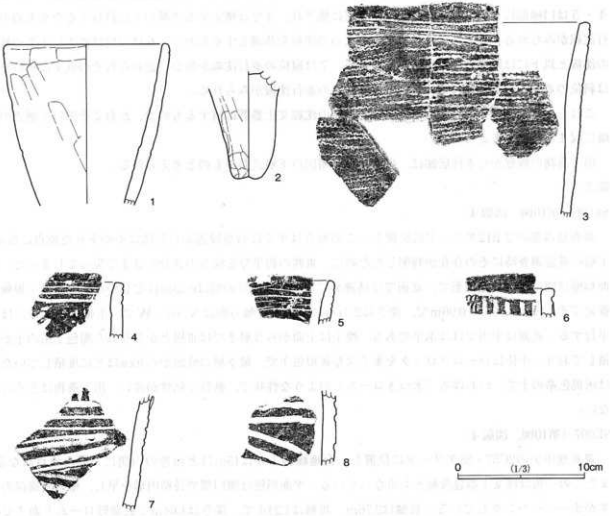
調査地の中央よりやや西北の2C74を中心に位置する。住居主軸をN-22°-Wにとり，主軸長は3.4m，副軸長が4.3mで，住居床面積は12.4㎡になる。平面形態は副軸長方向に長い長方形を基調としている。各隅はかなり丸み帯びており，とくに南東隅は東壁の中央部から外側へ大きく膨らみながら，大きな弧を描く。住居の深さは10～20cmあり，壁の掘込みは外側にやや傾斜している。壁直下には壁溝等の施設はない。また南壁中央には，壁から住居中央に向かって炉が敷設されており，その部分だけ壁が外側に膨らむ。床面は平坦だが，とくに硬化した範囲は確認できなかった。住居埋土はほとんどをⅡｃ層的な暗褐色土が堆積しており，壁際を中心に褐色土の堆積を確認できた。

炉は長軸1.1m，短軸0.8mで，10cmほどの掘込みがある。炉の掘込みの中央よりに，直径30cmの焼土の



SI008
1 暗褐色土　しまりの良いテフラ様の暗褐色土で、浅い覆土の主要な部分を成す。
2 褐色土　しまりのよい褐色土でローム粒を多量に含む。
3 赤褐色土　2層と同様であるが、焼土粒を含む。
4 褐色土　ソフトロームを多量に含む褐色土。

第８図　SI008住居跡 (1/80)



第９図　SI008住居跡出土遺物 (1/3)

堆積を確認したが，焼土は周囲にさほど散乱していなかった。炉床部は地山のロームが焼けてサクサクしており，使用期間の長さを窺わせる状態であった。

柱穴は住居中央に配されたP1～P4が，４本を結んだ線が住居平面とほぼ相似形になるので主柱穴に相当する。掘形径はいずれも20cm前後で，深さは４本の主柱穴のなかではP2が32cmともっとも浅く，それ以外は44cmほどの深さがある。他の柱穴のうち，主柱穴を結ぶ線上にある柱穴は深さが10cm前後しかないが，主柱穴の構造に関連する柱穴になる。北壁近くに３本のピットがあり，P5は40cm前後の深さがあり，これも主柱穴と関連する柱穴の可能性が高い。それ以外の柱穴はいずれも深さが10cmほどで，掘形も一回り小さく柱穴でない可能性もある。むしろ炉の対向壁に近いことから，出入り口に関連するピットと考えたほうが妥当である。

遺物は住居全体から出土しているが，その多くが床面付近からの出土である。１は深鉢土器で胴部から口縁部にかけて逆ハ字状に立ち上がり，土器外面はヘラ状工具であらく削った調整がみられる。法量は口縁部径が12.0cm遺存する器高は12.5cmである。色調は褐色ないし黒褐色で，胎土に白色の石英粒を含む。２は土器の尖底部で全体に細く尖っている。遺存する器高は8.4cm。色調は黄褐色で，胎土に１と同様の石英粒がみられることから，１と２は同一個体である可能性もある。３は口縁部が直線状に立ち上がる深鉢状の土器で，土器外面は横位の細い並行沈線とやはり並行に横走する貝殻復縁文が特徴となっている。４・５は口縁部に３条の細い並行沈線が黄位に施され，３では横走する沈線の下に斜行するやや太めの並行沈線がみられる。６・７・８はいずれも太めの沈線を基調とするもので，６は口唇部直下に１条の横位の沈線と以下には縦位の並行沈線がみられる。７は縦位の並行沈線が僅かに認められその直下に横位または斜位の並行沈線がみられる。８は横位と斜位の並行沈線がみられる。

これらの土器は，その特徴から縄文時代早期の沈線文土器群に属するもので，おおよそ田戸下層式の範疇に収まるものと考えられる。

出土遺物の観察から本住居跡は，縄文時代早期田戸下層式期のものと考えられる。

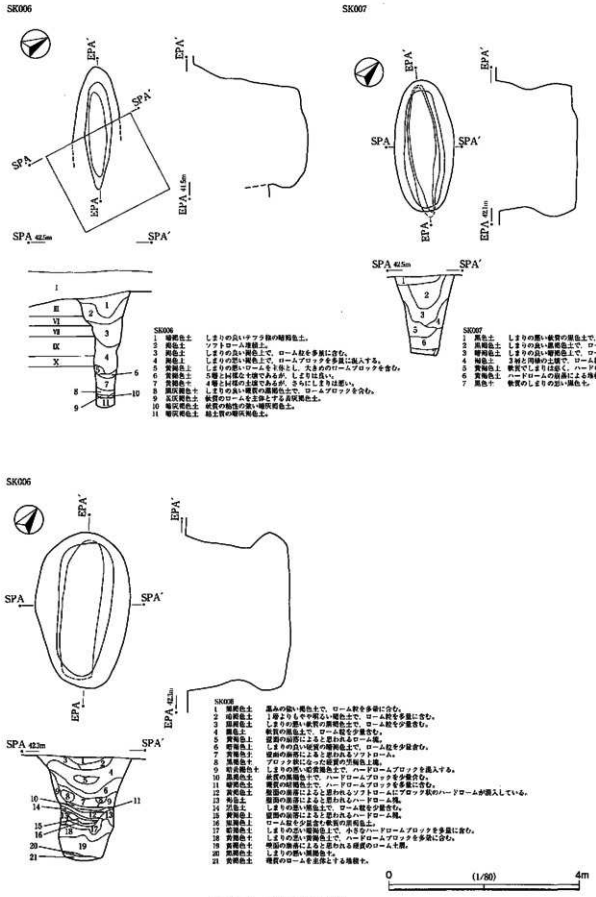
陥穴

SK006（第10図，図版４）

調査地西部の２B12グリッドに位置し，この地点はすでに台地縁辺から谷側にやや下りた地点になる。下層の確認調査時にその存在が判明したために，東側の約半分を深さの３分の２まで失ってしまった。平面形態は開口部で長楕円形で，底面では紡錘形になり，底面での幅は0.38mほどしかない。長軸・短軸は推定でそれぞれ2.90m・0.96mで，深さは2.34mになる。主軸方向はN-64°-Wで，主軸は等高線にほぼ平行する。底面は平坦でほぼ水平である。埋土は上面から３層まではⅢ層とかなり似た褐色土系の土が堆積しており，中位はロームブロックを多く含む黄褐色土で，最下層の底面から40cmほどに堆積していたのは灰褐色系の土で，いわゆる「水つきローム」のような性状で，軟質で粘性が強い。出土遺物はとくにはない。

SK007（第10図，図版４）

調査地中央の2C57・58グリッドに位置し，台地縁辺よりは15mほど台地の内側に入った地点になる。またこの一角は縄文土器包含層とも重なっている。平面形態は開口部で長楕円形を呈し，壁の両端部の下半がオーバーハングしている。長軸は2.76m，短軸は1.24mで，深さは1.64mで武蔵野ローム上面まで掘り込んでいる。主軸方向はN-49°-Wで，直近の台地層部の変換線とは直交する方向になる。底面はほぼ



第10図　井森戸遺跡陥穴 (1/80)

水平に整えられ，底面に凹凸はあるもののピット等の工作はない。底面の平面形状は紡錘形で，最大幅で0.54mある。埋土は上層は黒色土を主体とし，中層は褐色系の土が堆積しており，最下層には10cmほどの厚さで黒色土が堆積していた。出土遺物はとくになかった。

SK008（第10図，図版4）

調査地中央の2C25・35グリッドに位置し，SK007よりもさらに台地の内側に位置する。やはりこの一角も縄文土器包含層と重なっている。平面形態は開口部が楕円形で，壁両端部の下半がSK005同様にオーバーハングしている。長軸は3.24m，短軸は2.00mで，深さは2.30mで，武蔵野ローム上面まで掘り込んでいる。今回報告するなかではもっとも法量が大きい陥穴である。主軸方向はN-32°-Wである。底面はほぼ水平に整えられ，底面に凹凸はあるが何らかの工作をした形跡はない。底面は両側面が直線的で両端に丸みを帯びている。幅は最大で0.80mある。埋土は，観察するかぎり度々壁が崩壊したようで，ハードロームを主体とする黄褐色上層とロームブロックの混じる黒色土とが，縞状に互層になって堆積している。とくに下半には壁崩壊土が厚く堆積しているのが確認できた。出土遺物はとくになかった。

縄文時代の遺物包含層

概要

井森戸遺跡の縄文時代の遺物包含層は，2Cグリッドを中心に土器片及び石器・フレーク類が検出された。縄文時代早期を主とするが，前期から中期の時期の土器片も僅かに混在する。土器片に混じって多くの石器類も出土している。（第16図）土器片と石器類が集中する2Cグリッドには2C74付近に縄文時代早期田戸下層式の時期の竪穴住居跡が検出されており，遺物集中地点と重複していることが特徴的である。

土器（第11～15図，図版12～14）

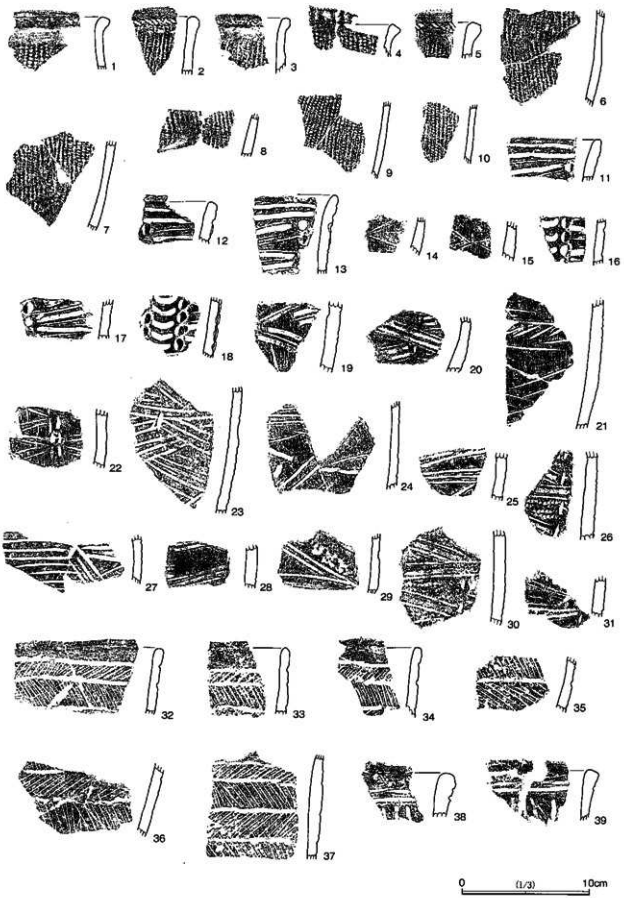
Ⅰ群土器

1～10は縄文時代早期撚糸文系の井草式土器で，2Cグリッドからの出土である。1は口縁部直下に無文帯を有し口唇部外側には斜行縄文をが見られ胴部には縦位のRL縄文を配しており，口縁部は胴部からやや外反する。2は口縁部直下に横位の押圧縄文を有し口唇部外側には斜行縄文を有し胴部は縦位のRL縄文となるが，縄文の間隔がやや密である。3は口縁部直下に無文帯を有し口唇部外側には斜行縄文が見られ胴部は縦位のRL縄文である。4は口唇部は無文で胴部は縦位のRL縄文であるが，口唇部上端が平坦面となっている。5は口縁部直下に横位の押圧縄文を有し口唇部外側に斜行縄文を有し口縁部直下には縦位のRL縄文で，2と似ているが口縁部のつくりがやや丸味を帯びて太めである。6～10はいずれも縦位のRL縄文を施した胴部破片である。

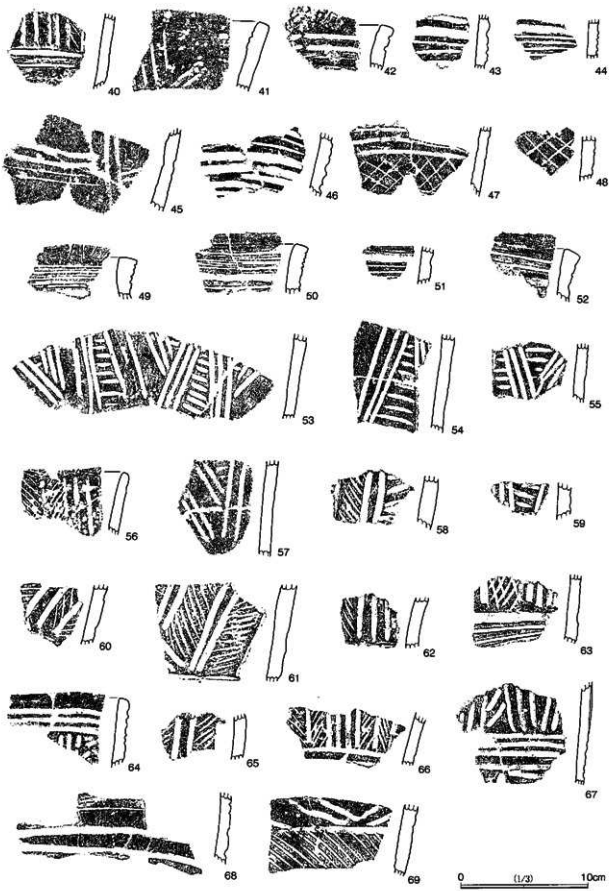
Ⅱ群土器

11～116は縄文時代早期沈線文系土器である。11～13・16～18は竹管断面による縦位の連続施文で縦区画をつくり出しその間を太めの並行沈線を横方向に施文している。14・15は細めの沈線で線取りされた横方向の山形区画内を細かい連続刺突文で充填している。19・20は太い沈線と細い沈線を組み合わせたて相互に交差させている。21は細めの2本の並行沈線を単位として横方向あるいは斜め方向の施文が見られる。

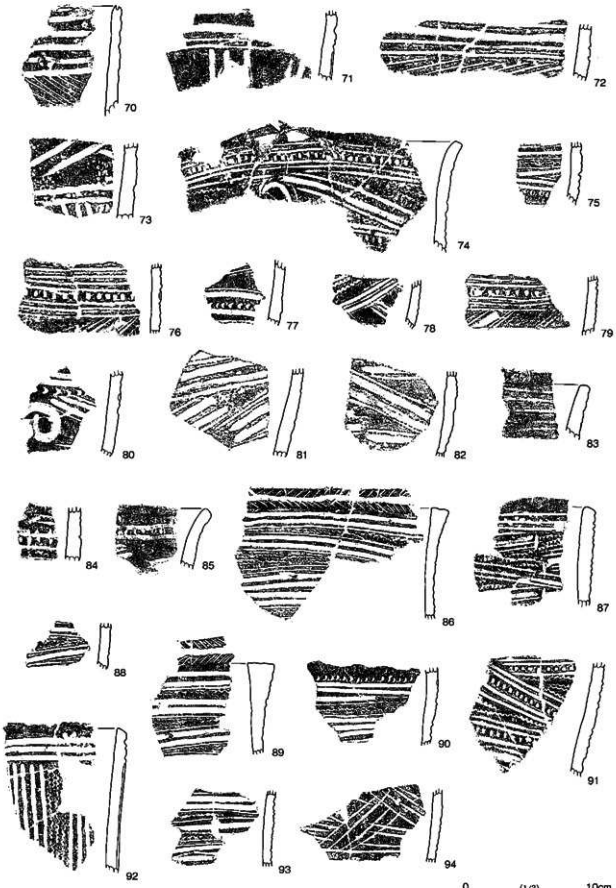
22～31は横方向ないし斜め方向の並行沈線を基調として，縦列の刺突文を付加する。22は2本の並行沈線が斜方向に交差する交点に，一対の刺突文を縦方向に連続施文している。23は3本の並行沈線を単位として横方向あるいは斜め方向の並行沈線が交差する交点に，単独の刺突文が見られる。24も2本の並行沈



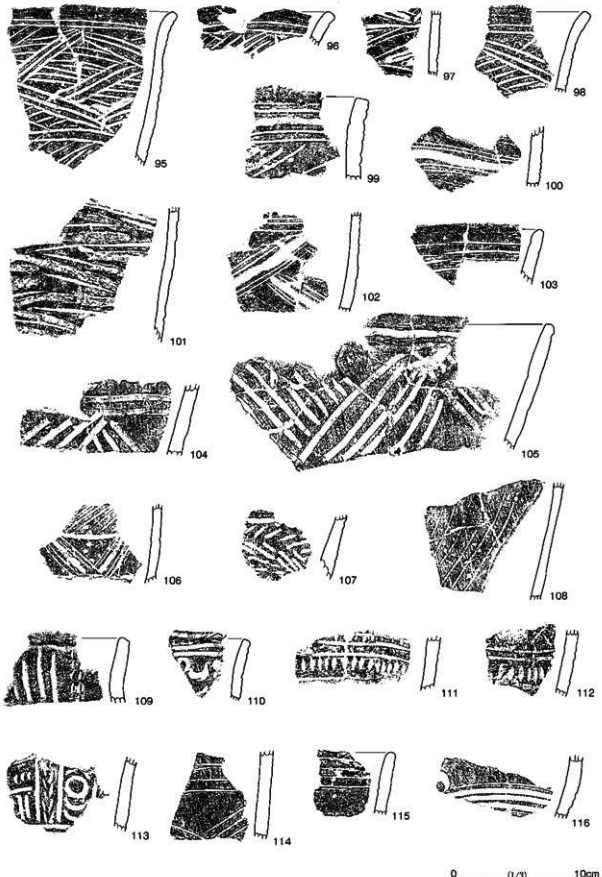
第11図　井森戸遺跡包含層出土土器(1) (1/3)



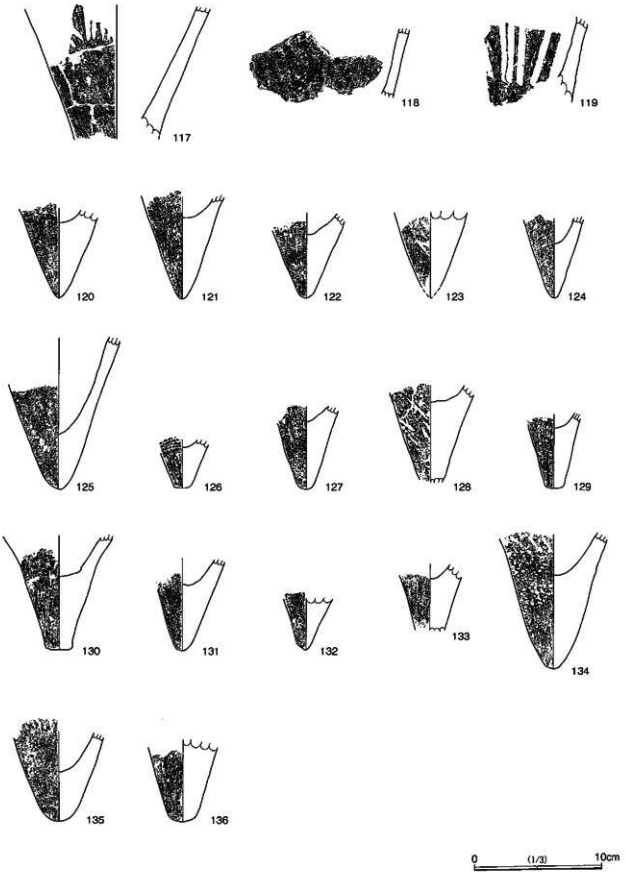
第12図　井森戸遺跡包含層出土土器(2) (1/3)



第13図　井森戸遺跡包含層出土土器(3) (1/3)



第14図　井森戸遺跡包含層出土土器(4) (1/3)



第15図　井森戸遺跡包含層出土土器(5) (1/3)

線が横方向あるいは斜め方向に見られる。25は２本ないし３本の並行沈線がやや斜め方向に見られる。刺突文は見られないが，胎土や色調から刺突文を持つグループの土器である。26は太い沈線を細い沈線で挟んだ並行沈線を単位として，空いた空間に連続刺突文を充填している。27は複数の沈線を横方向及び斜め方向に配し，交差する交点付近にやや斜めに振られた刺突文が見られる。28は３本の並行沈線がやや斜め右上がりに見られる。29は２本の並行沈線が横方向及び斜め方向に配されている。30は比較的幅広の２本の並行沈線を横方向及び斜め方向に配し，斜めの沈線を先行施文の後横方向の沈線を施文している。並行沈線の交差する交点付近には単体の刺突文が縦列に施文されている。31は30と同様に単体の刺突文が見られるが，並行沈線は間隔が狭くなっている。32～37は三戸式土器で，胎土にはいずれも小粒の石英粒を多く含むことから同一個体と思われる。口縁部直下から太めの沈線で横区画された空間を一段ごとに右斜めあるいは左斜め方向の条線で充填している。36の胴部中位では斜め方向の条線はかなり雑然としてくる様子が窺える。38・39は口縁部直下に２本の横位の並行沈線と以下のの胴部には縦位の並行沈線が見られる。40は38・39と似ているが，縦位の並行沈線の下部に横位の並行沈線が見られる。41は左または右上がりのやや繊細な並行沈線が見られる。42～46は太い沈線と細い沈線が不規則に組み合わされており，このうち43・46はSI009住居跡覆土から出土しており同一個体と思われる。47・48は同一個体で，横位の並行沈線と斜格子沈線の組み合わせが見られる。49～51は口縁部に３本の細い並行沈線と１本の太い沈線が横走するが，49と50では口唇部のつくりがやや異なっている。52は口唇部は平坦で，口縁部に２本の並行沈線が見られる。

53～72は沈線文を主体とする三戸式土器。53～67は斜め方向の並行沈線の間を太めの沈線または細めの斜行沈線で充填している。53～55・57・59・64・67では太めの沈線が主体となり，56・60・61・63・65・66は細めの沈線が主体となっているが，58のように太めの沈線と細めの沈線の混在も確認できることか，これらの土器片が同一個体である可能性も考えられる。68～73は土器の文様構成を上下で区分しており，69・70・72は上部に横位の太めの沈線と下部に細めの斜行沈線といった組み合わせになっている。69は71と同様に横位の沈線を境に下部では文様構成が変化するものと思われる。73は横位の沈線を境に上部は斜行する太めの沈線，下部は縦位に施文された太めの並行沈線となっている。

74～93は刺突文及び貝殻復縁文を並行沈線間に施文した一群の土器である。74は横位の並行沈線に挟まれた連続刺突文と渦巻き状の沈線及びそこから幅広の横区画を斜行する３条の沈線が特徴的である。75は並行沈線と併走する貝殻腹縁文及び沈線に平行する横位の連続刺突文が見られる。76は横位の並行沈線とその間に挟まれた連続刺突文からなる横方向の施文帯と，その直下に続く斜方向の並行沈線を主体とする施文帯が見られる。77は横方向の連続刺突文がやや太めの並行沈線に囲まれている。78は斜方向の並行沈線を基調として，並行沈線に沿って２条の貝殻復縁文が見られる。79は色調や焼成では78とやや異なるものの，78と同様な文様構成をとっており同一個体の可能性がある。80は横位の並行沈線に挟まれた連続刺突文と渦巻き状の沈線及びそこから幅広の横区画を斜行する４条の沈線が特徴的で，幅広の横区画の中に横位の連続刺突が新たに加わっている。74と似ているが連続刺突文の上部の並行沈線がやや太めであり，胎土には74に見られない石英粒を含むことから74とは別個体である可能性が高い。81・82は太めの並行沈線と伴走する繊細な並行沈線がセットとなり，横位あるいは斜位の施文が組み合わされている。83は口縁部付近で口唇部に続き横位の並行沈線が４条見られる。84は横位の並行沈線と連続刺突文が交互に見られ，85は口縁部付近で横走する一組の並行沈線の間に連続刺突が見られる。86は扁平な口唇部に沈線を

挟んで矢羽根状に斜行沈線が配置され，口唇部直下から並行沈線と貝殻復縁文を数条づつ交互に配している。87は文様構成上は86と似ているが，並行沈線は横位のほか斜位のものも認められる。88は太めの沈線とその両側を繊細な２条の沈線が挟むように組み合わされ，横位または斜位に施文されている。89は86と同様な文様構成が見られるが，口縁部の厚みや焼成の状態から別個体である可能性が高い。90は86・89と文様構成が似ているが，並行沈線には貝殻復縁文のほか半裁竹管による連続刺突文が新たに加わっている。91は連続刺突文を２条の並行沈線で挟んだ文様帯を横位または斜位に配置し，余剰空間には貝殻復縁文を充填している。92は口縁部直下に３条の並行沈線を配し，以下には並行沈線と貝殻復縁文による縦位の文様構成が組み合わされている。93は文様構成上は86・89と同様であるが，90のように連続刺突をもつ可能性もあり，この小破片から他の類似する土器片との文様構成の同一性を判断することはできない。94～98は２条または３条の沈線を１単位として横位または斜位に重ね合わせて施文している。99は２条の並行沈線を１単位として口縁部直下には横方向に，それ以下では斜方向に施文している。100は太めの沈線の上下に沿って２条の細い並行沈線が併走する。101は間隔の広い並行沈線が雑然と配置されており，沈線の太さも不安定である。102は101と同様に広い沈線の両側を細い２条の沈線が併走しているが，斜方向に交差させて施文している。103は口縁部と並行に２条１単位の沈線が見られる。104・105は横位の沈線を段の区切りとして，その間を斜方向の並行沈線を折り返す様に充填している。沈線はいずれも太めのものである。106はやや太めの沈線を境に上部は細い並行沈線を斜方向に充填し，下部は太めの沈線を２条の細い沈線で挟んだ文様単位を斜方向に折り返して施文している。107は横位の沈線の下部にランダムな短い沈線をさまざまな角度に展開して空間を充填しており，沈線の配置に規則性は見られない。108は斜方向に等間隔で流れる並行沈線がとなっている。109は口縁部の横位の沈線以下に数条からなる縦位の並行沈線と２列の爪形刺突文を縦位に配置している。110は口縁部の２条の沈線の下に上向き縦２連の半円形刺突文が見られる。111・112は横位の２条の並行沈線と下方の沈線の間を連続刺突文で充填している。

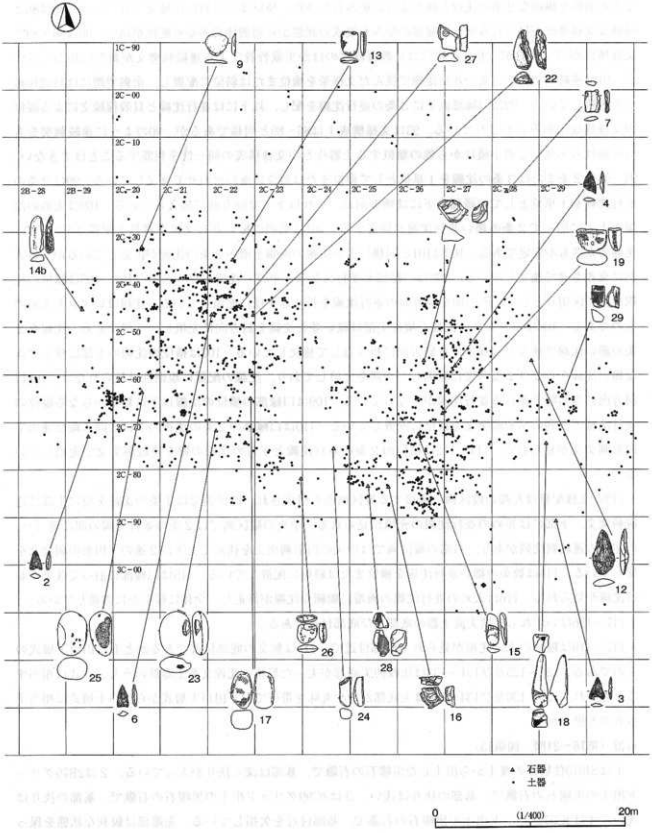
113の文様配置は左端の段区画と隣接する縦区画から構成され，段区画では１条の沈線を境に上部に連続刺突文，下部には短めの並行沈線の充填が見られる。中央の縦区画では２条の並行沈線の間に逆『ハ』の字形の連続刺突列があり，右端の縦区画では中央の円形刺突文を挟んで上下に２連の半円形の刺突文を配している。114は数条の細い並行沈線を横位または斜位に配置している。115は口縁部に沿って３条の並行沈線が見られる。116は太めの並行沈線の両端に繊細な沈線が併走し，全体に緩やかに湾曲している。

117～136はいずれも早期尖底土器の底部及び底部付近である。

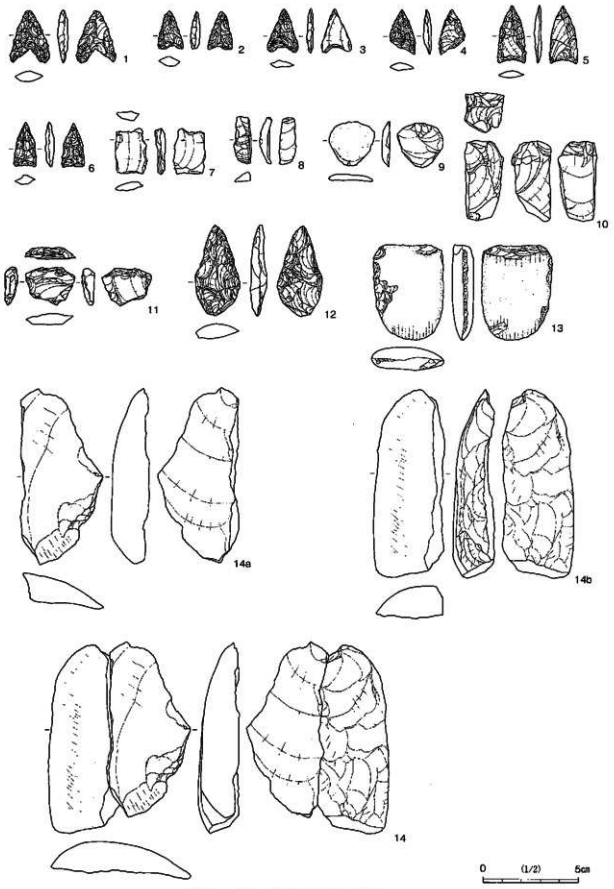
117・119は縦位の太い沈線が見られる底部付近で，118は無文の底部付近であるがともに田戸下層式のものである。120～125及び131～133は比較的尖底部が尖った形状で沈線文系土器群のうち三戸式に相当すると思われ，126～130及び134～136は尖底部がやや丸味を帯びており田戸下層式から田戸上層式に相当するものと思われる。

石器（第16～21図，図版15）

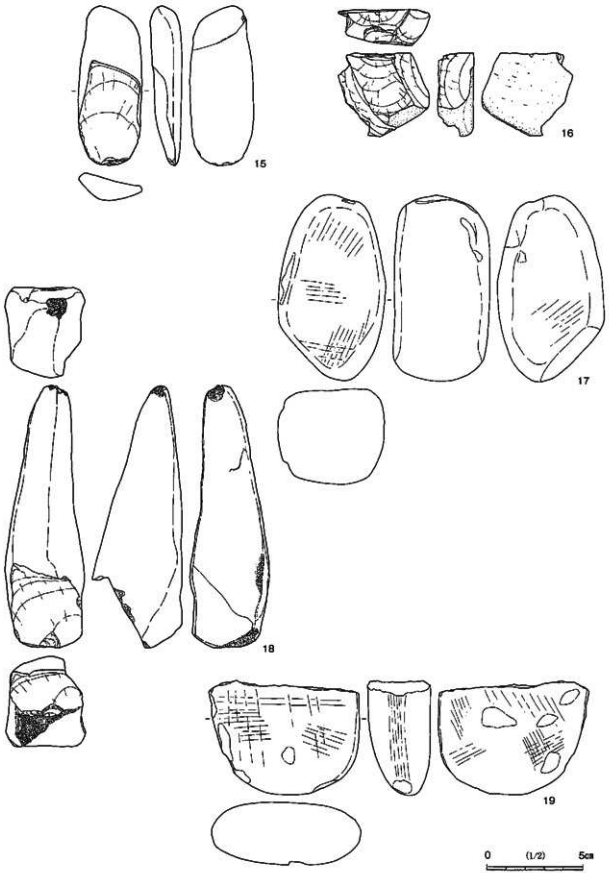
１はSI010住居跡の覆土から出土した黒曜石の石鏃で，基部は深く抉りが入っている。２は2B79グリッド出土の黒曜石の石鏃で，基部の抉りは浅い。３は2C99グリッド出土の黒曜石の石鏃で，基部の抉りは浅い。４は2C57グリッド出土の黒曜石の石鏃で，基部付近を欠損している。先端部は鋭利な状態を保っている。５はSI011住居跡の覆土から出土した安山岩の石鏃で，基部の抉りは浅い。先端部は鋭利な状態



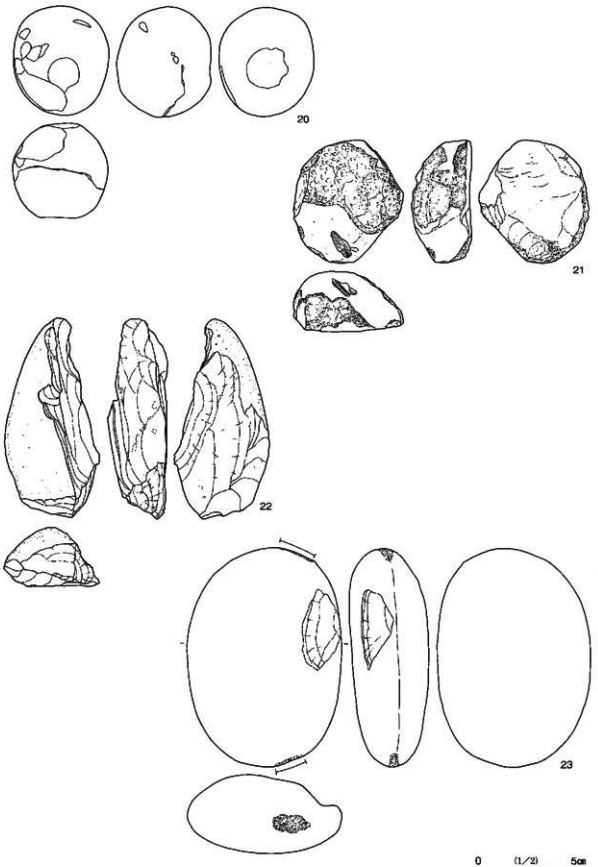
第16図　井森戸遺跡縄文時代石器出土状況 (1/400)



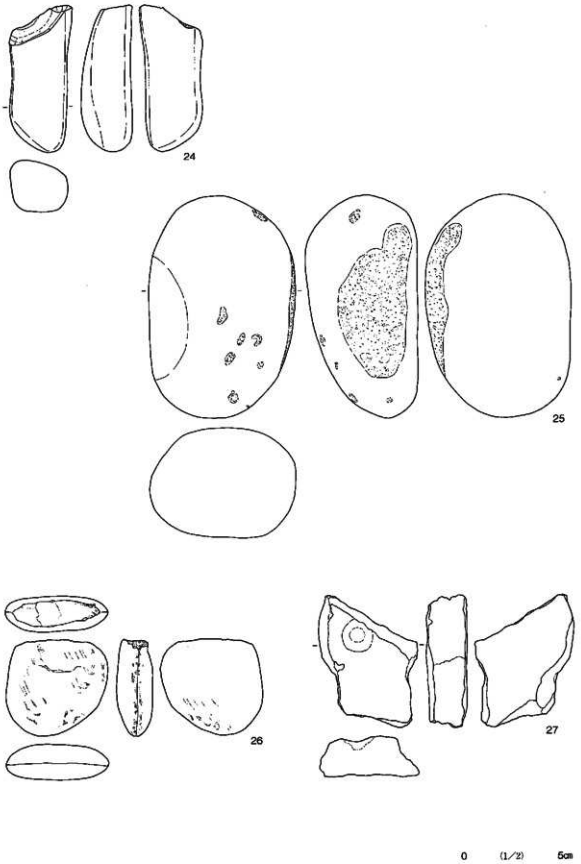
第17図　井森戸遺跡縄文時代石器(1) (1/2)



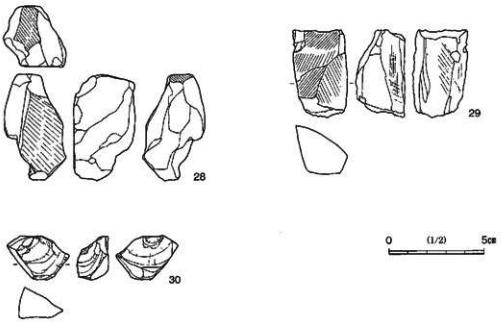
第18図　井森戸遺跡縄文時代石器(2) (1/2)



第19図　井森戸遺跡縄文時代石器(3) (1/2)



第20図　井森戸遺跡縄文時代石器(4) (1/2)



第21図　井森戸遺跡縄文時代石器(5) (1/2)

を保っている。扁平なつくりで，縦割りした剥片を利用して周囲から剥離調整を行っている。6は2C42グリッド出土の安山岩の石鏃で，基部の抉りはきわめて浅い。表裏とも全面に細かい剥離調整が見られる。7は2C28グリッド出土の粘板岩の剥片。特に加工を意識した痕跡は見られない。8はSI009住居跡の覆土から出土の剥片で，石材はチャート。9は2C30グリッド出土の円形の剥片で，石材はチャート。表面に自然面を残したままである。10は2C43グリッド出土の柱状の石核で，石材は頁岩。11は2C43グリッド出土の剥片で，石材はチャート。調整は表裏面とも上方向及び左右方向に剥離痕が見られる。12は2C58グリッド出土の尖頭器で，石材は黒曜石。長さ47.5mm，幅23.1mm，重さ7.63gで，出土の層位はⅡ～Ⅲ層上面である。縄文時代早期の尖頭器と比べると両サイドの調整は粗く厚みもあり，あるいは未製品である可能性もある。また，周辺にはほぼ同じ層位から縄文時代早期の土器の集中が見られることから，旧石器時代末～縄文時代早期の尖頭器である可能性が高い。13は2C32グリッド出土の石斧で，石材は安山岩。調整は側面に連続打痕が見られる。表裏両面とも自然面を残すが，刃部先端付近は鋭角に削り込まれている。14は片面に軽微な磨きのある剥片で，2B49グリッドⅡ層出土のものと2C50グリッド一括取り上げ遺物の接合資料である。石材はホルンフェルスで，いずれの剥片も縦長に剥離されたものである。15は2C76グリッドⅡ層出土の縦長の石核で，縦方向に剥片を剥がした痕跡が見られる。石材は頁岩である。16は2C85グリッドⅡ層出土の石核で，一部自然面を残している。石材は安山岩である。17は2C62グリッド出土の磨石で，表面に多くの擦痕をとどめている。石材は423.40gと比較的重量のある花崗岩である。18は2C77グリッドⅡ層出土の敲石で，細くすぼまった先端付近に使用による痕跡が見られる。石材は硬質砂岩である。19は2C66グリッドⅡ層出土の磨石で，表裏両面に多くの擦痕を残す。石材は安山岩である。20は2C43グリッド一括取り上げの敲石で，全体に丸味を帯びた形状であるが裏面中央に扁平な面をつくり出している。21は2C17グリッド一括取り上げの敲石で，表面の一部の石器の刃部を研いだような痕跡が見られる。全体に焼成を受けており，廃棄後に火中に投じられた可能性もある。22は2C42グリッドⅡ

層出土の石斧未製品で，礫を半裁して石斧にしようとした形跡がうかがわれる。一部に自然面を残しており，石材は頁岩である。23は2C72グリッドⅡ層出土の敲石で，全体に丸味を帯びた楕円形である。上部と下部の縁部に使用痕が見られる。石材は砂岩である。24は2C74グリッドⅡ層出土の石核で，形状は角の丸い柱状で一方の端部から切断・剥離を行っている。石材は珪質頁岩である。25は2C60グリッドⅡ層出土の敲石で，全体に丸味を帯びた楕円形の形状である。側面に使用痕が見られ，石材は砂岩である。26は2C83グリッドⅡ層出土の敲石で，全体に丸味を帯びている。石材は砂岩である。27は2C42グリッドⅡ層出土の石皿で，扁平な形状の表面の一部に同心円状の抉り込み痕が見られる。石材は砂岩である。28は2C85グリッドⅡ層出土の砥石で，一部に明瞭な擦痕が残されている。石材は砂岩である。29は2C69グリッドⅡ層出土の砥石で，不整形な柱状の平坦面に使用による擦痕が著しい。石材は凝灰岩である。30は2C56グリッドⅡ層出土の石核で，表裏面とも扇状の大きく剥離された痕跡が見られる。石材はチャートである。

3　古墳時代

第3表　石器観察表（井森戸・縄文）

石器集中	挿図No.	遺物番号	石　材	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備　考
SI010	1	SI-010-151	黒曜石	覆土	27.5	20.9	5.7	1.97	(42.091)	石鏃
2B	2	2B-79-4	黒曜石	Ⅱ	20.2	12.8	5.1	0.93	42.629	石鏃
2C	3	2C-99-5	黒曜石	Ⅱ	22.8	16.1	3.2	0.80	40.699	石鏃
2C	4	2C-57-39	黒曜石	Ⅱ	22.6	13.7	4.5	1.06	41.778	石鏃
SI011	5	SI-011-1	黒曜石	覆土	30.5	15.0	3.9	1.63		石鏃
2C	6	2C-42-46	黒曜石	Ⅱ	22.9	11.6	5.5	1.10	42.485	石鏃
2C	7	2C-28-4	粘板岩	Ⅱ	23.9	17.2	4.8	2.40	42.035	剥片
SI009	8	SI-009-6	チャート	覆土	24.7	8.9	6.6	0.92	(42.288)	剥片
2C	9	2C-30-16	チャート	Ⅱ	23.2	23.5	4.1	2.78		剥片
2C	10	2C-43-1	頁岩	グリッド	42.2	20.5	21.3	22.25		石核
2C	11	2C-43-1	チャート	グリッド	19.9	25.2	6.4	3.67		剥片
2C	12	2C-58-1	黒曜石	Ⅱ～Ⅲ	47.5	23.1	8.7	7.63		尖頭器
2C	13	2C-32-5	安山岩	Ⅱ	48.6	36.8	11.6	36.50	42.545	石斧
	14		ホルンフェルス		100.5	74.8	21.8	157.54		接合資料
2C	14a	2C-50-1		グリッド	91.8	43.8	20.3	59.00		剥片
2B	14b	2B-49-2		Ⅱ	98.7	36.7	22.2	98.50	42.539	剥片
2C	15	2C-76-11	頁岩	Ⅱ	84.1	33.5	16.0	48.53	41.650	石核
2C	16	2C-85-21	安山岩	Ⅱ	44.0	47.9	17.8	38.90	41.612	石核
2C	17	2C-62-14	花崗岩	Ⅱ	97.4	56.0	50.6	423.40	42.099	磨石
2C	18	2C-77-8	硬質砂岩	Ⅱ	138.0	40.6	45.1	263.31	41.590	敲石
2C	19	2C-66-25	安山岩	Ⅱ	58.4	79.6	32.9	267.17	41.677	磨石
2C	20	2C-43-1	安山岩	グリッド	57.3	50.9	49.5	211.17		敲石
2C	21	2C-17-1	砂岩	グリッド	66.3	56.0	31.5	132.02		敲石
2C	22	2C-42-37	頁岩	Ⅱ	104.8	49.7	31.2	159.94	42.389	石斧（未成品）
2C	23	2C-72-3	砂岩	Ⅱ	115.0	80.7	41.1	536.50	42.288	敲石
2C	24	2C-74-11	珪質頁岩	Ⅱ	77.1	33.1	27.1	98.67	41.805	石核
2C	25	2C-60-5	砂岩	Ⅱ	117.1	76.6	59.3	760.78	42.621	敲石
2C	26	2C-83-15	砂岩	Ⅱ	51.4	52.5	18.2	72.65	41.838	敲石
2C	27	2C-42-33	雲母片岩	Ⅱ	74.4	51.29	21.6	94.51	42.405	石皿
2C	28	2C-85-15	砂岩	Ⅱ	55.1	32.7	34.0	58.57	41.649	砥石
2C	29	2C-69-16	凝灰岩	Ⅱ	46.3	28.2	26.0	36.90	41.537	砥石
2C	30	2C-56-14	チャート	Ⅱ	23.0	32.7	16.2	9.59	41.880	石核

概要

調査地の中央から西にかけて，５軒の竪穴住居が集中している。この一帯は東西から浅い谷が迫って台地が谷部へ迫り出し，緩やかな斜面を形成している。５軒の竪穴住居は方形を基本とする平面形態で，カマドを北側に敷設し，４本の主柱穴を住居の四隅近くに配る点などで共通し，主軸方位もほぼ同じ方向となっている。いずれも重複関係にはないが，SI006だけに住居の拡張痕跡があった。

竪穴住居

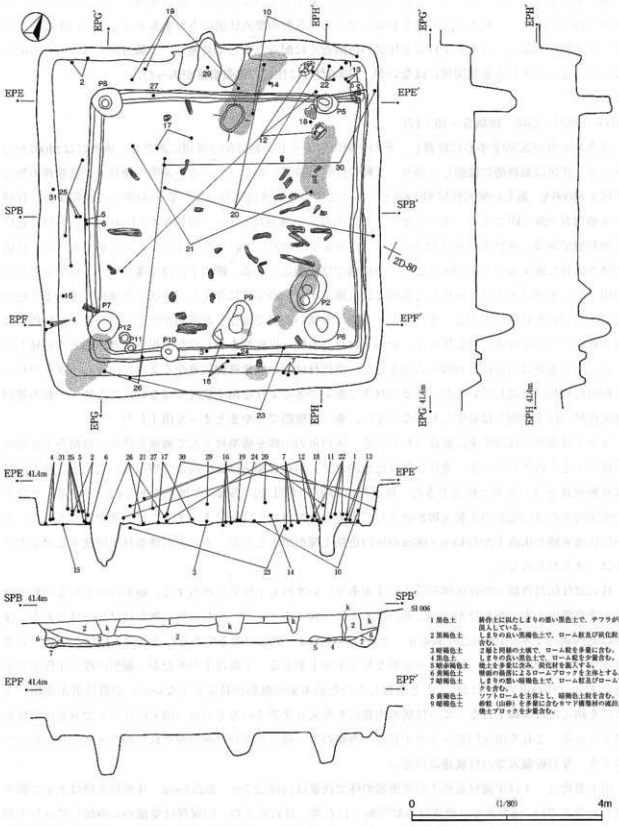
SI006（第22～25図，図版５・16・17）

調査地中央の2C89を中心に位置し，その一帯はちょうど台地周部の縁辺にあたる。南西にはSI007が近接する。住居は最終的に拡張しており，２軒の住居の輪郭が重なっている。説明の便宜上，拡張前の竪穴住居をSI006A，新しい竪穴住居SI006Bとし，ここでは住居構造を残しているSI006Bから説明する。住居の主軸はN-26°-Wにとり，Bの主軸も同じである。主軸長は7.35m，副軸長が7.16mで，正方形に近い平面形態である，住居床面積は43.3㎡で，今回調査した竪穴住居のなかではもっとも法量が大きい。住居の深さは谷に面するほうが30cmほどで，台地側では80cm近くある。壁直下には壁溝がカマド部分を除いて全周する。床面は水平で，硬化した範囲は北に開く「コ」の字状に存在し，住居中央部付近であまり硬化していないのが特徴的である。またカマド右側にも狭い範囲で硬化した範囲が広がっていた。住居埋土は最上層がテフラを斑状に含む黒色土，その下にローム粒・炭化粒を少し含む黒褐色土が床面まで堆積していた。出土遺物はおもにこの層から出土した。炭化材は床の硬化範囲に重なるように出土し，個々の材は比較的放射状に散乱しているが，建築部材まで推定できるような出土状況ではない。また焼土の散布範囲は炭化材の出土範囲とは必ずしも重ならずに，東・南壁際でややまとまって出土した。

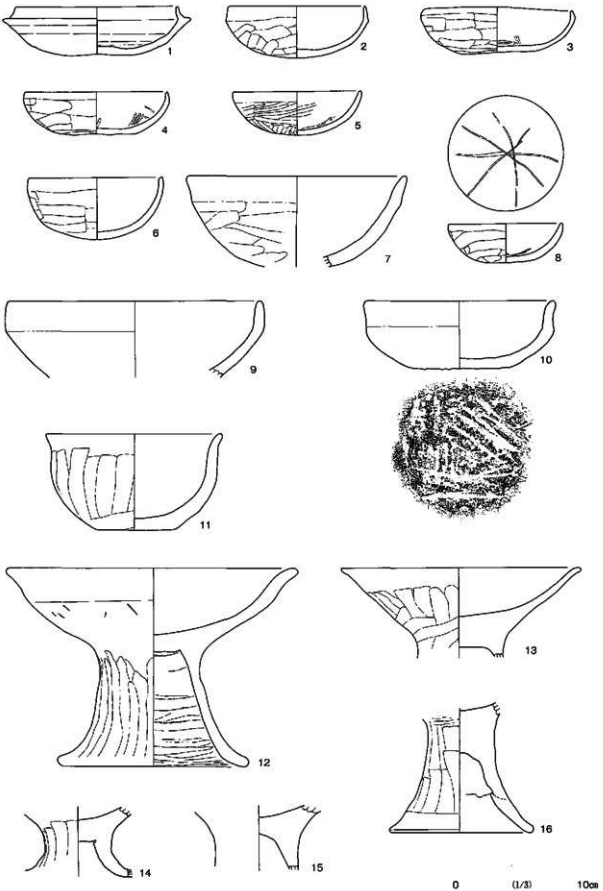
カマドは北壁のほぼ中央に敷設されている。灰白色の山砂を構築材として両袖を作り，暗褐色土と山砂の混合土を土台としている。遺存状態は比較的よく，両袖は30cmほどの高さで残っていた。また袖の内側は被熱痕跡をはっきりと確認できた。煙道部は約60°の角度で，25cmほど地山を掘り抜いている。カマドの火床部からほぼ完形の土製支脚が直立して出土しただけで，ほかにまとまった出土遺物はなかった。なお住居南東隅の床直上から45cm×60cmの灰白色粘土塊が出土したが，カマドの構築材と関連するのかどうかはっきりわからない。

柱穴は住居対角線上の住居隅の近くに４本あり，いずれも主柱穴に相当する。掘形はいずれも円形に近く，北東隅の１本の掘形径が50cmと他の３本より一回り小さいが，それ以外の掘形径は70cmほどある。深さは北西隅の１本が100cm近くあるが，それ以外は70cm～80cmの深さである。また出入口ピットについてはカマドの対向壁近くに，掘形が不定形なピットが１本ある。下端は１か所だが，掘形中段の工作が２か所にあり，SI006Bの出入口ピットと重複したたため本来の掘形が特定できないが，設置位置が南側の主柱穴を結んだほぼ線上になって，住居の内側にやや入りすぎているものの，出入口ピットである可能性も考えられる。これを出入口ピットとすれば，西側の出っ張った部分の掘形がそれに相当することになるであろう。なお貯蔵穴等の付属施設はない。

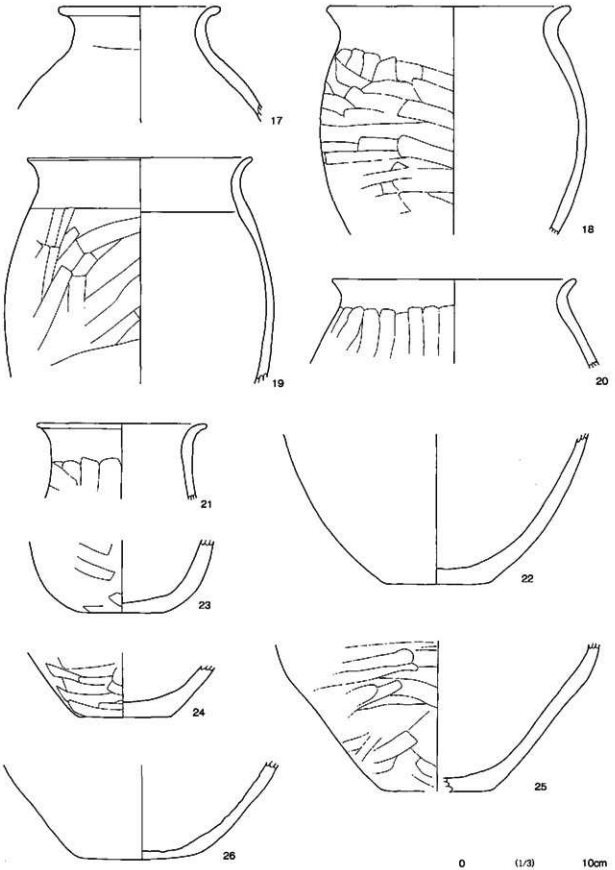
出土遺物は，１は床面付近出土の須恵器の坏で法量は口径12.7cm，器高3.8cm，体部最大径は水平に張り出した受部で14.7cmである。焼成は良好で胎土に石英・長石を含む。口縁部は受部から内傾して立ち上がる。２は覆土中から出土の土師器坏で法量は口縁部径10.6cm，器高4.1cm，体部最大径11.1cmである。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部は横位または斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好



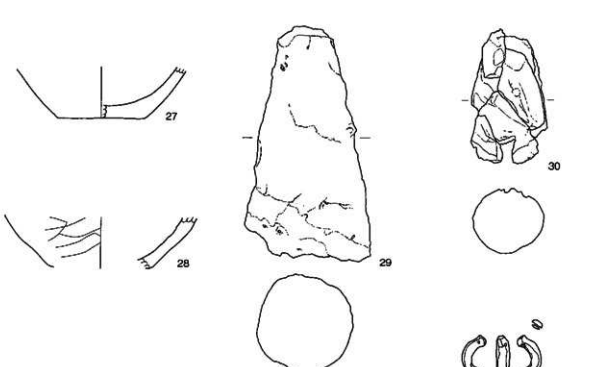
第22図　井森戸遺跡SI006住居跡 (1/80)



第23図　井森戸遺跡SI006住居跡出土遺物(1) (1/3)



第24図　井森戸遺跡SI006住居跡出土遺物(2) (1/3)



第25図　井森戸遺跡SI006住居跡出土遺物(3) (1/3)

である。3は床面直上出土の土師器坏で法量は口縁部径11.5cm，器高3.7cm，体部最大径12.1cmである。調整は外面では口縁部がヨコナ，体部は横位のヘラ削り，内面は一部にミガキがみられ，内外面とも黒色処理されている。焼成は良好で，胎土にスコリア・石英を含む。4は床面直上出土の土師器坏で法量は口縁部径11.1cm，器高3.4cm，体部最大径11.4cmである。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部は横位のヘラ削り，内面には一部にミガキがみられる。焼成は良好で，胎土に雲母・砂粒を含む。

5は床面直上出土の土師器坏で法量は口縁部径9.8cm，器高3.5cmである。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部はヘラ削り後のミガキ，内面は丁寧なナデとなっている。焼成は良好で，胎土には石英を含む。6は床面直上出土の土師器坏で法量は口縁部径10.3cm，器高4.9cmである。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部はヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好である。7は床面直上出土の土師器坏で法量は口縁部径18.0cmで他の坏に比べて大きいが底部を欠損する。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部は横位のヘラ削り，内面がナデとなっている。焼成は良好である。8は覆土中の出土の土師器坏で法量は口縁部径8.8cm，器高3.1cmと比較的小型の坏である。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部が横位のヘラ削り，内面はナデとなっており暗文がみられる。内外面とも赤彩がみられる。9も覆土中の出土の土師器坏で法量は口縁部径19.9cm，体部最大径20.3cmと大型の坏であるが底部を欠損する。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部は粗いヘラ削り，内面はナデとなっている。10も覆土中の出土の土師器坏で法量は口縁部径14.9cm，器高5.3cmでやや大きいつくりであるが底部が平坦になっている。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。底部には砥石の代用痕が残されている。

11は床面直上出土の土師器椀で法量は口縁部径3.5cm，底部径6.2cm，器高7.5cmである。調整は外面では口縁部がヨコナデ，体部は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好である。12は床面直上出土の土師器高坏で法量は坏部口縁部径22.4cm，脚部開口部径14.6cm，器高15.6cmである。調整は脚部外面に縦位のヘラ削りがみられ，内面には輪積みの痕跡がみられる。焼成は良好である。13は床面直上出土の土師器高坏で坏部のみ遺存している。法量は坏部口縁部径18.4cmである。調整は外面では坏部口縁部がヨコナデ，口縁部より下部は縦位のヘラ削りとなっている。14は床面直上出土の土師器高坏で坏部と脚部の接合部分のみ遺存している。15は覆土中の出土の土師器高坏で，坏部と脚部の接合部分のみの遺存である。16は床面直上出土の土師器高坏で脚部のみ遺存する。法量は脚部開口部径11.0cm，脚部高9.6cmである。調整は外面は縦位のヘラ削りがみられ，脚部内面には粗い輪積みの痕跡が残る。17は床面直上出土の土師器甕で法量は口縁部径12.8cmである。口縁部は頸部から大きく外反し，胴部上半部以下を欠損する。調整は外面では口縁部がヨコナデ，胴部はヘラ削り，内面はナデとなっている。18は床面直上出土の土師器甕で法量は口縁部径18.7cm，胴部最大径21.0cmである。口縁部に比べて胴部の張りの小さい形状で，底部付近を欠損する。調整は外面では口縁部がヨコナデ，胴部は縦位のヘラ削り後の横位のヘラ削り，内面はやや剥離がみられる。焼成は良好である。19は床面直上出土の土師器甕で法量は口縁部径17.6cm，胴部最大径21.1cmで，口縁部は緩やかに外反する。調整は外面では口縁部がヨコナデ，胴部は縦位及び斜位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。胎土には砂粒・石英・スコリアを含む。20は覆土中の出土の土師器甕で法量は口縁部径19.2cmで胴部の半分以上を欠損するため形状は定かでないが，依存する部分からは口縁部に比べて胴部の張るものと考えられる。調整は外面では口縁部がヨコナデ，胴部が縦位のヘラ削りとなっている。焼成は良好である。21は覆土中の出土の土師器甕で法量は口縁部径13.2cmで胴部に張りのない小型の形状である。調整は外面では口縁部がヨコナデ，胴部は縦位のヘラ削り後に一部に斜位のヘラ削りの痕跡がみられ，内面はナデとなっている。焼成は良好である。

22は覆土中出土の土師器甕で胴下半部のみ遺存する。法量は底部径8.0cm。調整は外面はヘラ削り後の丁寧なナデとなっており，内面は剥離が著しい。23は床面直上出土の土師器甕で胴下半部のみの遺存で，法量は底部径6.4cmである。調整は外面は斜位のヘラ削り，底部は多方向のヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好で，胎土に長石・スコリア・砂粒を含む。24は床面直上出土の土師器甕で底部付近のみの遺存である。法量は底部径7.2cm。調整は外面は横位のヘラ削り，内面は剥離が著しい。胎土には石英・長石・スコリア・砂粒を含む。25は覆土中の出土の土師器甕で胴下半部のみの遺存である。法量は底部径8.8cmである。調整は外面は横位のヘラ削り，内面は剥離している。焼成は良好である。26は床面直上出土の土師器甕で胴下半部のみの遺存である。内外面とも剥離が著しく調整の痕跡は確認できない。法量は底部径9.0cmで，胎土に砂粒・石英を含む。27は覆土中の出土の土師器甕で底部付近のみの遺存である。法量は底部径6.6cmである。調整は外面はヘラ削り後の丁寧なナデとなっており，内面も丁寧なナデとなっている。28は覆土中の出土の土師器甕で底部付近のみの遺存である。法量は底部径推定　8.1cmで，調整は外面はヘラ削りである。29はSI006Bのカマド内出土の土製支脚で，法量は高さ12.6cm，最大径9.9cmでほぼ完形である。30は壁際及び覆土中から出土した土製支脚である。欠損が大きく

出土位置も不自然なため，SI006Aのカマド内で使用されたものである可能性もある。31は土製勾玉でSI006Bの壁近くの覆土中の出土で，完形である。表面はヘラ状工具で面取りした痕跡がみられる。

SI006Aは，中軸線がSI006Bより東に68cmずれる。主軸長5.64m，副軸長5.84mでほぼ正方形の平面形

態である。住居面積は28.0㎡で，SI006Bの65％の大きさになる。床面はSI006Bの床面と高低差がないので，SI006BはSI006Aの床面をそのまま使用したのであろう。壁溝は全周しており，カマド部分にも壁溝が存在する。東壁の壁溝はSI006Bの壁溝とほとんど接している。

カマドは北壁の中央に敷設されたようで，火床部分と思われる63cm×40cmの長円形で，深さ7cm掘込みに焼土と山砂を含む暗褐色土が堆積しているのを確認した。ただその掘込みの中軸線は北壁にたいして58°の振れがあり，壁にたいして斜めになっている。主柱穴はやはり住居の対角線上の4隅に配られている。掘形はSI006Bの柱穴よりもやや小さく，45cm～48cmほどだが，南東隅の1本だけ下端が2か所あり，柱の据え換えか添え柱を抱かせたものと思われる。そのために長径は他の2本分あり，88cmほどある。出入口ピットは前述のとおり南壁中央の壁際にある。なおSI006B同様，貯蔵穴等の付属施設はない。出土遺物については，柱穴等の掘込みから住居に伴うような状態では出土していない。

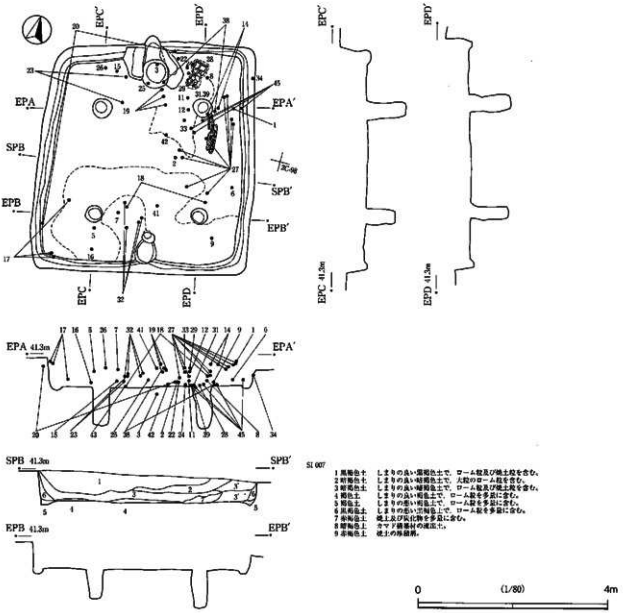
SI007（第26～30図，図版6・17～19）

調査地中央の台地屑部の縁辺にあたる，2C97を中心に位置する。北東にSI006が近接する。住居の主軸はN－13°－Wにとる。主軸長は4.86m，副軸長が4.57mで，北西隅が鈍角になって北壁長は4.2mになり，主軸方向に長い台形の平面形態である，住居床面積は17.0㎡になる。住居の深さは谷に面する東壁で42cm，台地側では65cmほどになる。壁溝はカマド部分にも巡り，全周する。床面はほぼ水平で，硬化した範囲はカマド右側前面と住居南半分に偏在する。北東主柱穴南の貼床には，部分的に山砂と焼土が充填されていた。住居埋土は最上層にローム粒と焼土粒を含む黒褐色土が最大厚で40cmの厚みで堆積しており，それ以下は谷側部分に数層のローム粒と焼土粒を含む細かい暗褐色土の堆積が確認できるものの，同質の暗褐色土が住居床面まで堆積していた。焼土はおもに住居東側半分に堆積し，長さ86cm，幅17cm，厚さ10数cmの比較的大きい炭化材が北東柱穴の近くから出土した。断面の形状が不明だが，大きさは主柱穴の炭化材としても妥当な大きさがある。

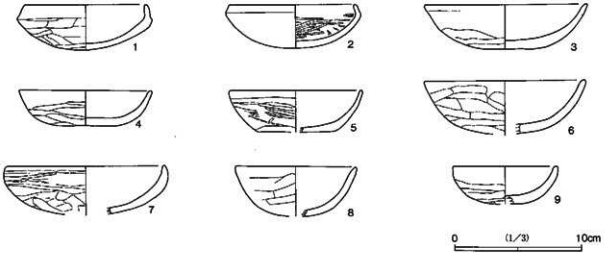
カマドは北壁のほぼ中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，砂質の灰褐色土を袖の基部としている。両袖の遺存状態はやや悪く，15cm～20cmほどの高さでしか残っていなかった。両袖の内側は被熱で赤変していた。煙道部は約65°の角度で，18cmほど地山を掘り抜いている。出土遺物としては火床部から（3）の土師器坏や（25）の土師器高坏・（38）の土師器甕底部が出土した。

主柱穴は住居対角線上の住居隅の近くに4本ある。掘形はいずれも円形で，掘形径もほぼ40cm前後にそろっている。深さは南西隅の1本が62cmと浅いが，それ以外は81cm～90cmの深さがある。また4本の主柱穴には20cm前後の柱痕跡を確認できた。出入口ピットについてはカマドの対向壁の南壁近くに掘形が外側に斜めになるピットが1本あり，さらに南側にもそれより浅い掘形が連続している。貯蔵穴等の付属施設はない。

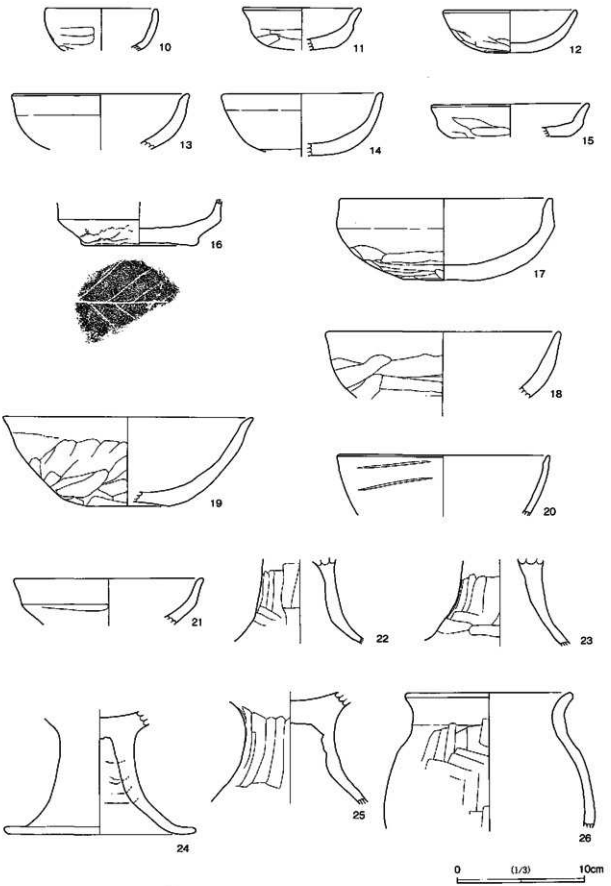
出土遺物は1～20は土師器坏である。1は覆土中の出土の土師器坏でほぼ完形である。口縁部は僅かに内傾する。法量は口縁部径9.4cm，器高3.6cmで底部は丸底である。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。2は床面付近出土の土師器坏でほぼ完形である。法量は口縁部9.8cm，器高3.4cmで底部は丸底である。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は摩滅が著しく，内面はミガキがみられる。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。3は床面直上出土の土師器坏である。法量は口縁部推定12.6cm，器高3.5cm，底部径5.4cmである。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は底部付近にヘラ削りの痕跡がみられ，内面はナデとなっ



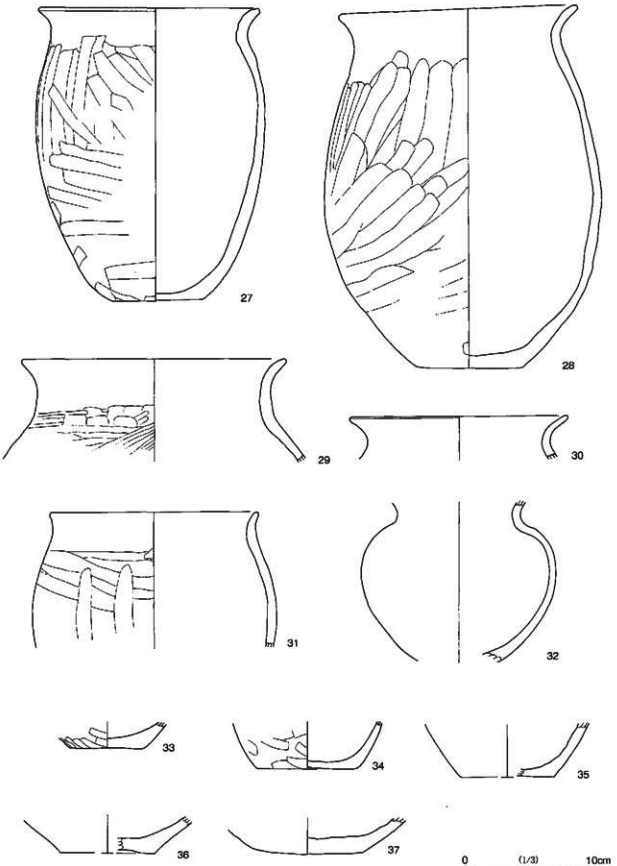
第26図　井森戸遺跡SI007住居跡 (1/80)



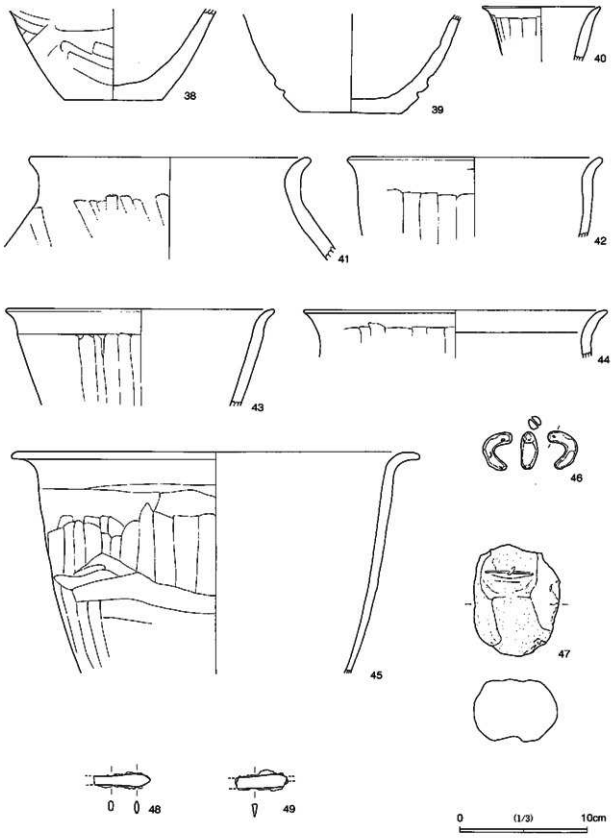
第27図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(1) (1/3)



第28図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(2) (1/3)



第29図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(3) (1/3)



第30図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(4) (1/3)

ている。焼成は良好で，胎土に長石・スコリアを含む。4は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部10.2cm，器高2.8cm，底部径5.2cmである。調整は体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好で，石英・長石・スコリアを含む。5は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部10.2cm，器高3.3cm，底部径6cmの平底の坏である。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は細かい横位のヘラ削り，内面は黒色処理となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。6は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部推定12.4cm，器高4.2cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に長石・スコリアを含む。調整は体部外面は横位のヘラ削り，内面は剥離が著しい。7は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定12.2cm，器高推定3.8cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位の細かいヘラ削り，内面はナデとなっている。8は床面付近の出土の土師器坏で，法量は口縁部径9.5cm，器高3.9cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土にスコリア・粘土粒をを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。9は床面直上出土の土師器坏で，法量は口縁部8.0cm，器高2.9cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。10は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径8.9cmである。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。11は床面付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径9.3cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面も横位のヘラ状工具による削りとなっている。12は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径6.8cm，器高3.1cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・調整・スコリアを含む。調整は体部外面は横位のヘラ削り，内面は黒色処理されている。13は覆土中の出土の土師器坏で，法量は推定13.9cmである。焼成は良好で，胎土に石英・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面は丁寧なナデとなっている。14は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定12.4cm，器高5.0cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は体部外面はヘラ削りで一部に剥離がみられ，内面はナデとなっている。15は床面付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定12.4cm，器高2.6cm，底部径推定8.4cmで底部は平底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。16は床面付近出土の土師器坏で，法量は底部径8.8cmで口唇部を欠損している。体部は真っ直ぐに立ち上がり，底部はやや高台を意識したつくりとなっている。また，底部には木葉痕がみられる。焼成は良好で，胎土に長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は指頭によるナデ，内面はナデとなっている。17は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定16.4cm，器高6.4cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部はヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。18は床面直上出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定18.2cm，器高推定5.2cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。19は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定19.4cm，器高推定6.6cmで底部はやや上げ底ぎみである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は体部外面は斜位のヘラ削り，内面は剥離が著しい。20は覆土中の出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定16.7cmである。調整は口縁部はヨコナデ，体部外面はヘラ削りとヘラ状工具による刻み痕がみられ，内面は丁寧なナデと

なっている。

21～25は土師器の高坏である。21は覆土中出土の土師器高坏の坏部で，法量は口縁部径14.8cmである。焼成は良好で，胎土に石英・粘土粒を含む。調整は口縁部はヨコナデ，坏部外面はヘラ削り後の丁寧なナデ，内面は剥離が著しい。22は床面付近出土の土師器高坏の脚部である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は外面が縦位のヘラ削り，内面には輪積み痕がみられる。23は覆土中出土の土師器高坏の脚部である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は外面が縦位のヘラ削りと裾部付近には横位のヘラ削りがみられ，内面はナデとなっている。24は床面直上出土の土師器高坏の脚部である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。法量は裾開口部径14.4cmである。調整は外面がヘラ削り後のナデで一部に剥離がみられ，内面には輪積みの痕跡を明瞭に残している。25は床面付近出土の土師器高坏の脚部である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は外面が縦位のヘラ削り，内面には輪積みの痕跡がみられる。

26～41は土師器の甕である。26は覆土中の出土の土師器甕で，法量は口縁部径13.2cmで胴下半部を欠損し，比較的小型の甕である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後の斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。27は床面付近及び覆土中出土の土師器甕で，完形である。法量は口縁部径17.4cm，器高23.0cm，底部径7.2cmである。調整は口縁部がヨコナデで内面に剥離がみられ，胴部外面は縦位のヘラ削り後に底部付近を中心に斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。底部もヘラ削りによる面取りが行われている。焼成は良好で，胎土に長石・スコリア・砂粒を含む。28は床面直上出土の土師器甕で，ほぼ完形である。法量は口縁部径18.4cm，器高28.2cm，底部径7.2cmで比較的大型の甕である。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は斜位のヘラ削り，内面はナデとなっているが剥離が著しい。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。29は覆土中出土の土師器甕で，胴部以下の大半を欠損し，法量は口縁部径推定20.8cmである。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後に斜位の細かいヘラ削りが僅かにみられ，内面はナデとなっている。30は覆土中出土の土師器甕の口縁部で，法量は口縁部径16.2cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は内外面ともヨコナデである。31は床面直上出土の土師器甕で，胴下半部を欠損する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は横位のヘラ削り後の縦位のヘラ削りで，内面はナデとなっている。32は覆土中出土の土師器甕で，口縁部の一部と底部を欠損する。焼成はあまく，胎土には石英・長石・スコリアを含み土師器用の粘土を使用しているが，形状的には須恵器甕を模倣したものと考えられる。調整は胴部外面は著しく荒れておりヒビ状の亀裂が全面を覆っている。内面はナデとなっている。33は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径5.7cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は胴部外面が斜位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面は丁寧なナデとなっている。34は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径7.8cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は胴部外面は横位のヘラ削り，底部はナデ，内面は丁寧なナデとなっている。35は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径推定7.3cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は胴部外面はヘラ削り後のナデ，底部はナデ，内面はナデとなっている。36は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径推定7.2cmである。焼成は良好で，胎土にスコリア・砂粒を含む。調整は胴部外面はヘラ削り後のナデ，底部はナデ，内面は丁寧なナデとなっている。37は覆土中出土

の土師器甕の底部で，法量は底部径8.5cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は胴部外面はヘラ削り後のナデ，底部はナデ，内面はナデとなっている。38は床面直上及び覆土中出土の土師器甕で，胴上半部以上を欠損する。法量は底部径7.7cmで，胎土に石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は胴部外面は斜位のヘラ削り，底部はナデ，内面は丁寧なナデとなっている。焼成は良好である。39は床面直上出土の土師器甕で，胴上半部以上を欠損する。法量は底部径7.1cmで，胎土に石英・スコリアを含む。焼成は良好であるが，内外面とも摩滅が著しい。また，底部付近にヘラ状工具による刻み痕がみられる。40は覆土中出土の土師器の甕形ミニチュア土器で，法量は口縁部径9.2cmである。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。41は覆土中出土の土師器甕で，胴部以下の大半を欠損する。法量は口縁部径推定22.2cmで，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。焼成は良好である。

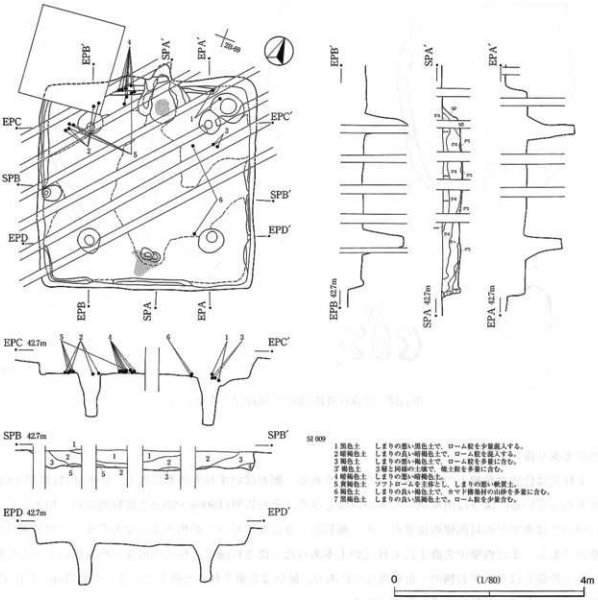
42～45は土師器の甑である。42は床面直上出土の土師器甑で，法量は口縁部径20.0cmで胴下半部を欠損する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。43は床面直上出土の土師器甑で，法量は口縁部径20.9cmで胴下半部を欠損する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。44は覆土中出土の土師器甑で，口縁部付近のみの遺存である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっている。45は床面付近出土の土師器甑で，底部付近を欠損する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後の横位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。46は覆土中出土の土製勾玉で重量は6.0ｇ。表面をヘラ状工具により面取りしている。47は覆土中出土の土製支脚で小破片のみの遺存であることから，破損後放棄されたものと考えられる。

なお，図示はしていないが，１個体と思われる土師器甕の破片があった。厚み14mmほどで，胎土に白色粒・赤色粒を多く含み，内外面が暗灰色の破片がかなりの量出土しているが，脆弱な土器のために復原できなかったため図示できなかった。

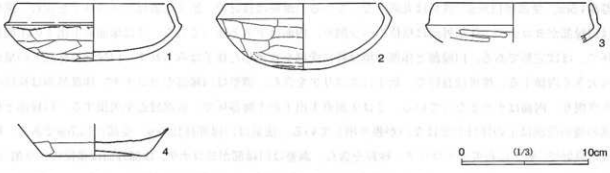
SI009（第32～33図，図版６・19）

調査地中央やや北の台地肩部の縁辺にあり，2B68を中心に位置する。住居北西隅を下層の確認グリッドで喪失し，住居の北側３分の２が数条のトレンチャーによって深耕されていた。住居の主軸はＮ-21°-Ｗにとり，この方向は台地縁辺の等高線にほぼ平行する。主軸長は4.34m，副軸長が4.58mで，副軸方向にやや長い方形の竪穴住居である，住居床面積は16.9㎡になる。住居の深さは谷に面する西壁・西壁で20cm～30cm，台地側では43cmほどになる。壁溝は断続的にあり，カマドの両袖下部にも存在する。床面は台地側の東北方向に向かってやや低くなっている。住居中央の床がややくぼみ，硬化範囲はおもにその範囲を除いた四周に確認できた。住居埋土は最上層がローム粒を含む黒色土が堆積し，その下に床面まで達するローム粒を含む暗褐色土が堆積していた。焼土は南壁中央近くに40cm×60cmの範囲で出土した。

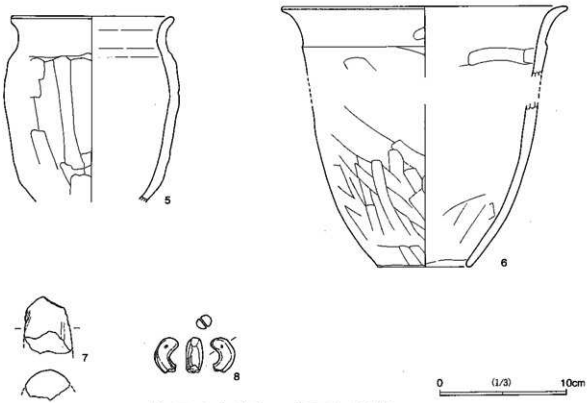
カマドには２条のトレンチャーによる深い耕作の跡が走り，遺存状態は悪かった。カマドは北壁中央のやや東に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，山砂の混じった褐色土で袖の基部を構築していた。もっとも残りのよい左袖で，高さ25cmほど遺存していた。煙道部は約50°の角度で，30cmほど



第31図　井森戸遺跡SI009住居跡 (1/80)



第32図　井森戸遺跡SI009住居跡出土遺物(1) (1/3)



第33図　井森戸遺跡SI007住居跡出土遺物(2) (1/3)

地山を掘り抜いている。

主柱穴は住居対角線上の住居隅の近くに４本ある。掘形はいずれも円形に近く，掘形径はほぼ50cm前後とそろっている。深さは南東隅の１本が78cmと浅く，それ以外は90cm～95cmと比較的深い。出入口ピットについてはカマドの対向壁の南壁近くの，掘形が二重になるピットが相当するであろう。ただし掘込みは垂直である。また西壁中央直下にも柱穴が１本あった。深さ17cmで，柱穴の最深部が西側によった位置にある。貯蔵穴はカマド右側の，北東隅近くにあり，掘形は北東主柱穴と接している。長径70cm，短径53cm，深さ40cmほどですり鉢状に近い掘形である。

出土遺物は，１は床面直上出土の土師器坏で，口縁部の一部を欠損する。口縁部と体部の境の受部は明瞭なつくりとなっており，口縁部は受部から大きく内傾する。法量は口縁部径推定12.0cm，口縁部高1.5cm，器高4.5cm，受部径13.9cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に雲母・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。２は床面直上出土の土師器坏で，ほぼ完形である。口縁部と体部の境は特に受部を意識した様子はみられず，口縁部は体部との境から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土にスコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。３は床面直上出土の土師器坏で，底部付近を欠損する。口縁部と体部の境の受部は１の坏ほどではないが張り出している。法量は口縁部径12.4cm，受部径13.7cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。４は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径8.0cmである。調整は胴部外面は横位のヘラ削り，底部はやや上げ底ぎみでナデ，内面はナデとなっている。胎土に長石・スコリア

を含む。5は床面直上出土の土師器甕で，底部を欠損する。法量は口縁部径12.9cm，胴部最大径14.6cmである。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後の横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。6は床面直上出土の土師器甑で，法量は口縁部径22.4cm，底部開口部径7.3cm，器高推定20.5cmである。焼成は良好で，胎土にスコリアの混入が著しい。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位または斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。7は覆土中出土の土製支脚片である。8は覆土中出土の土製勾玉で重量は5.5ｇ。表面をヘラ状工具による面取りがみられる。

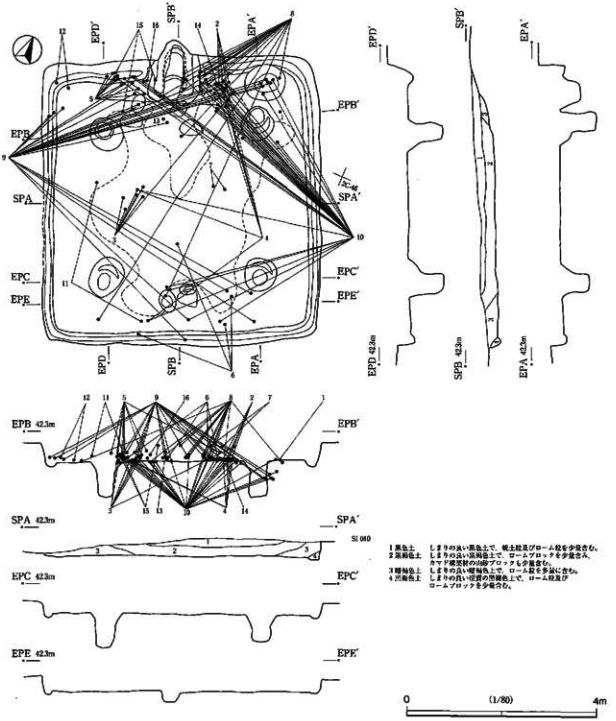
SI010（第34～37図，図版6・20）

調査地中央やや北側の，南西方向に傾斜する2C45を中心に位置する。住居の主軸はN-26°-Wにとる。主軸長は6.10m，副軸長が5.82mで，主軸方向にやや長い方形の竪穴住居である。住居床面積は28.6㎡になる。住居の深さは南西方向が低く，西壁中央では数cmしかない。もっとも深い北壁で44cmある。壁溝は全体に浅く，四周の壁直下とカマドの両袖下部まで巡る。床面は平坦だが，南にいくにつれ低くなり，その勾配を床面の硬化範囲のなかでみると，およそ1000分の9になる。床面の硬化範囲は主柱穴に囲まれた範囲で確認できたが，カマド前面には硬化範囲は広がっていなかった。住居埋土はおもに2層から構成され，上層がローム粒・焼土粒を含む黒色土が堆積し，その下にローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。埋土中に焼土粒を含むにもかかわらず，床面に顕著な焼土の堆積は確認できなかった。なおカマド前面と出入口ピット部分で山砂がブロック状に堆積していた。あるいはカマドの廃棄に伴って袖を破壊した痕跡の可能性もある。

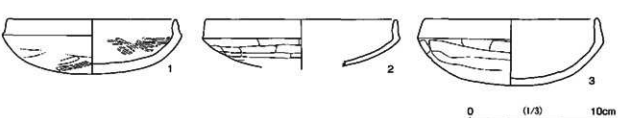
カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，右側の袖は暗褐色土を2cmほど敷いて基部としていた。袖は壁の高さまで遺存し，約40cm遺存していた。煙道部は約20°の角度で，40cmほど地山を掘りくぼめている。

主柱穴は住居対角線上の住居隅の近くに4本ある。掘形は円形から卵形で，掘形径は南西柱穴が長径90cmともっとも大きく，それ以外はいずれも長径75cmである。深さは南東柱穴だけ58cmと浅く，それ以外は76cmである。なお北西柱穴以外の柱穴の掘形には，副軸線に向かって中端を工作している。出入口ピットについては南壁中央の床面上に2本ピットがあり，いずれも垂直に掘込んでおり，東側は深さが40cmで，西側のピットは24cmである。いずれも出入口ピットに関わるものと考えられる。貯蔵穴はカマド右側の，北東隅近くにあり，掘形の一部は壁溝に接する。掘形は東西方向に長く，長径86cm，短径76cm，深さ45cmほどですり鉢状に近い。出土遺物としては，土器片が数点，中央に向かって斜めに流れ込むように出土した。

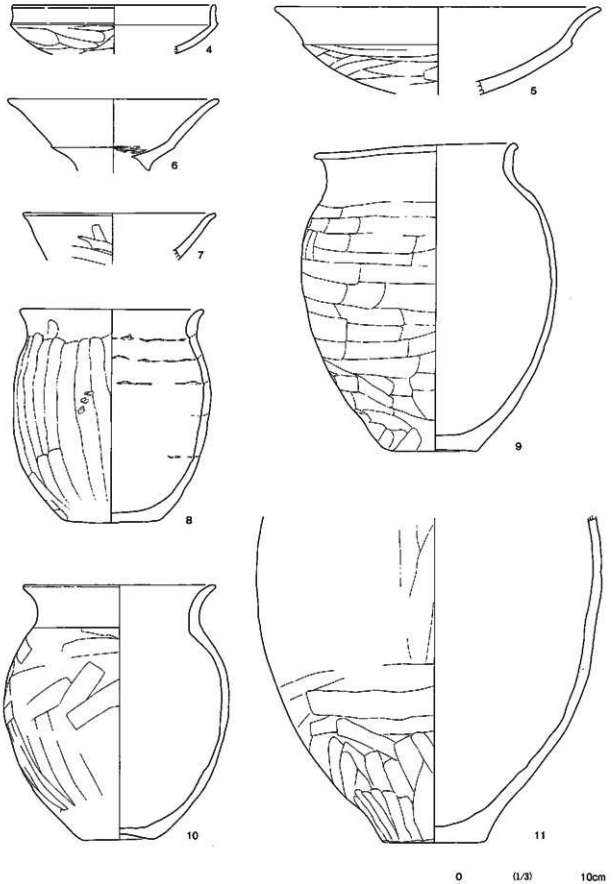
出土遺物はカマド周辺と住居南半部に偏在する傾向があり，その範囲は山砂の分布範囲に比較的重なるが土器の出土量は少ない。1は床面直上出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径13.2cm，器高4.3cm，口縁部高1.4cm，受部径14.6cmで，底部は丸底となっておりやや扁平な形状である。焼成は良好で，胎土にスコリアの混入が著しい。内面は黒色処理されているが，内外面とも剥離が著しい。2は床面直上出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定14.8cm，器高3.7cm，口縁部高1.6cm，受部径15.6cmでやや扁平な形状である。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。3は床面直上出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径13.5cm，器高5.3cm，口縁部高1.4cmで底部は丸底となっている。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。胎土は密で石英・スコリア・砂粒を含む。4は床面直上出土の土師器坏で，底部付近を欠損する。法量は口



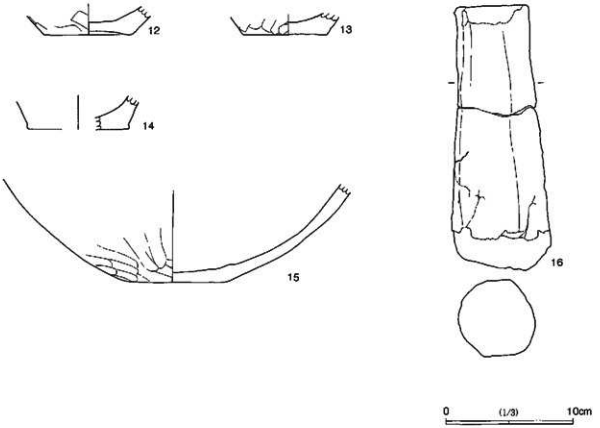
第34図　井森戸遺跡SI010住居跡 (1/80)



第35図　井森戸遺跡SI010住居跡出土遺物(1) (1/3)



第36図　井森戸遺跡SI010住居跡出土遺物(2) (1/3)



第37図　井森戸遺跡SI010住居跡出土遺物(3) (1/3)

縁部径15.9cm，器高3.9cm，口縁部高1.5cm，受部径16.2cmで，口縁部は受部からほぼ垂直に立ち上がる。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。胎土は密で雲母・スコリア・砂粒を含む。5は床面付近出土の土師器高坏の坏部で，脚部を欠損する。法量は口縁部径25.1cmで口縁部が大きく外反している。調整は口縁部がヨコナデ，坏部外面は横位のヘラ削りで赤彩があり，内面は丁寧なミガキがみられ黒色処理されている。6は床面直上出土の土師器高坏の坏部で，脚部を欠損する。法量は口縁部径16.0cmで口縁部は大きく外反する。調整は口縁部がヨコナデ，坏部外面はヘラ削り後のミガキ，内面はナデ後の一部ミガキがみられ，光沢のある黒色処理もみられるが剥離も著しい。焼成は良好で，胎土にはスコリアを含む。7は覆土中出土の土師器高坏の坏部で，坏部の一部と脚部を欠損する。法量は口縁部径15.1cmで，坏部は逆『ハ』字状に開く形態である。調整は脚部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。胎土は密で長石・スコリア・砂粒を含む。8は床面直上出土の土師器甕で，ほぼ完形である。法量は口縁部径14.0cm，底部径7.7cm，器高16.7cm，胴部最大径15.6cmで比較的小型の甕である。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっているが，輪積みの痕跡が明瞭に残り一部に剥離もみられる。胎土には石英・スコリアを含む。9は床面直上出土の土師器甕で，ほぼ完形である。法量は口縁部径15.3cm，底部径6.7cm，器高24.1cm，胴部最大径20.0cmである。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は横位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっているが，一部に剥離もみられる。10は床面直上出土の土師器甕で，ほぼ完形である。法量は口縁部径15.0cm，底部径5.8cm，器高19.0cm，胴部最大径17.5cmで，口縁部は胴部との境から緩やかに外反する。調整は口縁部がヨコナデ，胴

部外面は縦位のヘラ削り後の斜位のヘラ削り，底部はやや上げ底気味でヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。胎土は密で長石・スコリア・砂粒を含む。11は床面付近出土の土師器甕で，口縁部を欠損する。法量は底部径25.5cm，胴部最大径27.0cmで大型の甕である。調整は胴部外面は縦位のヘラ削りであるが，底部付近では横位のヘラ削り及び斜位のヘラ削りとなっている。底部はヘラ削り後のナデ，内面は全体に剥離が著しい。12は床面付近出土の土師器甕の底部で，法量は底部径7.0cmである。調整は胴部外面は斜位のヘラ削り，底部はやや上げ底気味でヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。13は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径7.0cmである。調整は胴部外面は斜位のヘラ削り，底部はヘラ削り，内面はナデとなっている。14は覆土中出土の土師器甕の底部で，法量は底部径推定8.1cmである。調整は胴部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。胎土には長石・スコリアを含む。15は床面直上及び覆土中出土の土師器甕の底部付近で，大型の甕である。調整は胴部外面は斜位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面は剥離が著しい。16はカマドの裾の外側から出土した土製支脚で，比較的遺存状態はよい。重さは660.6ｇで20.8cmほど遺存する。

図示した以外に須恵器坏身の小片が１点出土している。

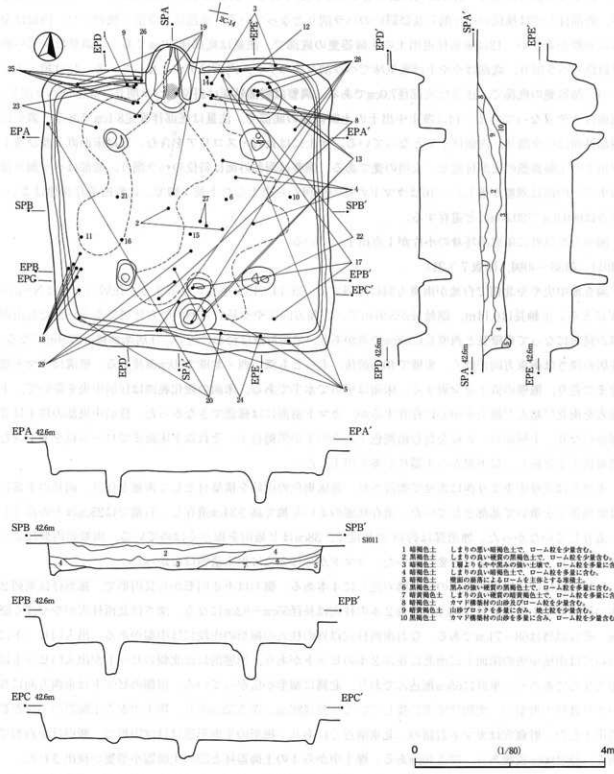
SI011（第38～40図，図版７・21）

調査地中央やや北側で台地が南東方向に傾斜する，2C14・15を中心に位置する。住居の主軸はN－13°－Wにとる。主軸長は6.14m，副軸長が5.91mで，主軸方向にやや長い方形の竪穴住居である。ただし南西隅が鈍角になって東壁長と西壁長に63cmの差があり，平面形態は台形に近い，住居床面積は27.9㎡になる。住居の深さは南東方向が低く，東壁で40cm前後，もっとも深い西・北壁で60cm前後ある。壁溝はカマド部分まで巡り，隔壁の直下を全周する。床面は平坦で水平である。床面の硬化範囲は住居中央を除いて，主柱穴を南北に結んだ線上を中心に存在するが，カマド前面には確認できなかった。住居中央部の埋土は３層からなり，上層がローム粒を含む暗褐色土，その下が黒褐色土，それ以下床面までローム粒を多く含む暗褐色土が堆積し，最下層から土器片が多く出土した。

カマドは北壁中央より西に寄せて敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を敷いて基部としていた。遺存状態のよい左袖で高さ34cm遺存し，右袖では25cmほどの高さしか遺存していなかった。煙道部は約45°の角度で，38cmほど地山を掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからはとくに出土遺物はなかった。

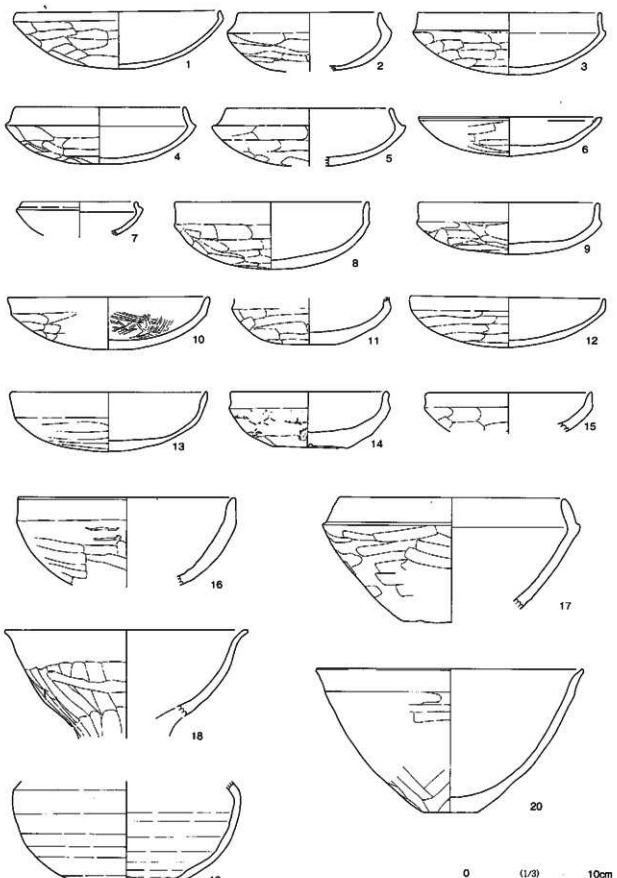
主柱穴はほぼ住居対角線上の住居隅の近くに４本ある。掘形は不正円形から長円形で，掘形径は東列２本の柱穴がやや大きく長径65cm，西列２本の柱穴は長径55cm～62cmになる。深さは北西柱穴がやや浅く58cm，それ以外は68～74cmである。なお南西柱穴以外の柱穴の掘形の中段には中端がある。出入口ピットについては南壁中央の床面上に南北に並ぶ２本のピットがあり，形態的には北側のピットが出入口ピットに相当するであろう。垂直に65cm掘込んでおり，北側に掘形が広がっている。南側のピットは東西方向に長いすり鉢状の掘形で，南側は壁溝に接している。長径86cm，深さ53cmあり，埋土中から土師器の小片が数点出土した。貯蔵穴はカマド右側の，北東隅近くにあり，掘形の平面形態はほぼ円形で，断面は逆台形である。径は90cm前後あり，深さ46cmある。埋土中から４の土師器坏と23の土師器小型甕が検出された。

出土遺物は住居全体から出土しているが全て覆土中の出土である。とくにカマド右側の貯蔵穴周辺に多い。１はカマド左側裾部脇から出土の土師器坏で，法量は口縁部径15.8cm，器高4.5cm，口縁部高0.6cmで，底部は丸底で口縁部は体部との境から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調

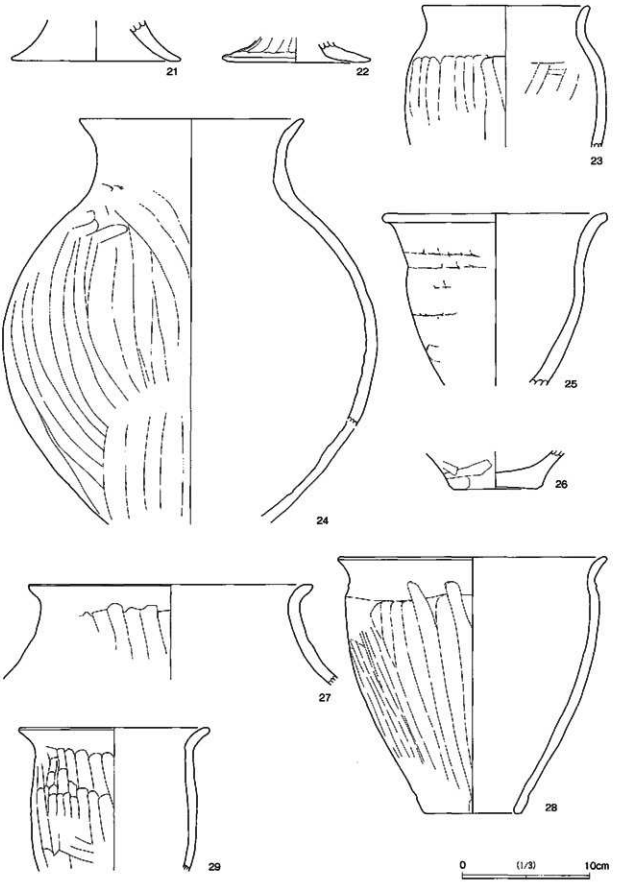


1 暗褐色土　しまりの悪い暗褐色土で、ローム粒を少量含む。
2 黒褐色土　しまりの良い軟質の黒褐色土で、ローム粒を少量含む。
3 暗褐色土　1層よりも中間色の強い土層で、ローム粒を多量に含む。
4 暗褐色土　しまりの良い暗褐色土で、ローム粒を多量に含む。
5 暗褐色土　壁面の崩落によりローム土を主体とする層堆。
6 黒褐色土　黒みの強い軟質の黒褐色土で、ローム粒を多量に含む。
7 暗黄褐色土　しまりの良い軟質の暗黄褐色土で、ローム粒を多量に含む。
8 暗褐色土　カマド構築材の山砂及びローム粒を少量含む。
9 暗黄褐色土　出砂ブロックを多量に含み、焼土粒を少量含む。
10 黒褐色土　カマド構築材の山砂を多量に含み、ローム粒を少量含む。

第38図　井森戸遺跡 SI011住居跡 (1/80)



第39図　井森戸遺跡SI011住居跡出土遺物(1) (1/3)



第40図　井森戸遺跡SI011住居跡出土遺物(2) (1/3)

整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。2は住居中央付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径11.0cm，器高推定4.6cm，口縁部高1.7cm，受部径13.2cmである。口縁部は体部との境の受部から緩慢に立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。3はカマド右側の貯蔵穴付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.3cm，器高4.8cm，受部径15.3cmで，底部は丸底で口縁部は受部から真っ直ぐ立ち上がり，須恵器坏蓋を模した形態である。焼成は良好で，胎土に石英・雲母・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。4はカマド右側の貯蔵穴及び住居南壁沿いの梯子穴付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定3.2cm，器高4.5cm，受部径15.3cmで，底部は丸底で口縁部は受部から内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっており一部に剥離がみられる。5はカマド右側の貯蔵穴付近と住居南壁付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.8cm，器高4.6cm，口縁部高1.5cm，体部最大径15.5cmで，底部は丸底で口縁部は受部から内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・雲母を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデとなっており黒色処理がみられる。内面はナデとなっている。6は住居中央付近から出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.7cm，器高3.1cmで底部は丸底で口縁部は体部の延長として僅かに認められる程度であり，扁平なつくりとなっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。7は土師器坏。法量は口縁部径9.0cm，器高推定3.0cm，口縁部高0.6cm，受部径10.2cmで底部は丸底で口縁部は受部から短く内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。8はカマド右側の貯蔵穴周辺出土の土師器坏で，法量は口縁部径15.0cm，器高5.3cm，口縁部高1.5cmで底部は丸底で口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。9はカマド左側の北壁付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.0cm，器高4.1cm，口縁部高1.5cm，受部径14.8cmで底部は丸底で口縁部は受部から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっており，内外面とも赤彩の痕跡がみられる。10は住居の東壁付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径15.6cm，器高4.1cmで底部は丸底で口縁部は体部の境から緩やかに外反する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヨコナデ，内面は繊細なミガキがみられる。11は住居の西壁付近出土の土師器坏で，口縁部を欠損する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。12はカマド右側の貯蔵穴付近出土の土師器坏で，法量は口縁部推定15.2cm，器高3.8cmで底部は丸底となっている。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヨコナデで一部に剥離がみられ，内面はナデとなっており赤彩の痕跡がみられる。13は住居中央付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定15.2cm，器高3.0cm，口縁部高1.4cm，底部は丸底で口縁部は体部との境から僅かに外傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削りで漆状の付着がみられ，内面は剥離が著しい。14はカマド右側出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.2cm，器高3.0cm，底部径6.0cm，口縁部高1.5cmで底部は平底となっている。口縁部は体部との境からほぼ直立する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は指頭によるナデとなっ

ており輪積みの痕跡を残したままで，内面は剥離が著しい。15は住居中央付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定13.0cm，口縁部高1.2cmで底部を欠損する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。16は住居中央西壁寄りの位置出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定17.3cm，口縁部高1.8cmで底部は丸底となっている。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・雲母・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっているが剥離が著しい。17はカマド右側，付近及び住居南壁の梯子穴付近出土の土師器坏であるが，全体としては椀ないし鉢状の形態であるが口縁部のつくりが坏のつくりとなっているのでここでは坏として扱うものとする。法量は口縁部径17.6cm，器高9.8cm，口縁部高2.16cm，底部径推定8.1cm，受部径20.4cmで底部は平底である。口縁部は受部から内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。18は住居西壁付近出土の土師器高坏で脚部を欠損する。法量は口縁部径18.8cmである。調整は口縁部がヨコナデ，坏部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっており，内外面とも赤彩の痕跡が認められる。19はカマド内及びカマド左側出土の須恵器で，胴上半部以上を欠損するため器形は特定できないが壺またはハソウと思われる。焼成は良好であり，調整は胴部内外面とも回転ロクロ目がみられる。20は住居南壁付近出土の土師器鉢で，法量は口縁部径21.0cm，器高11.3cm，底部径4.4cmである。焼成は良好で，胎土は粗く石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削りを基調とし底部付近では斜位のヘラ削りがみられ，内面はナデとなっている。21は住居中央の西壁寄りの位置出土の土師器高坏の脚裾部で，法量は開口部径推定13.2cmである。焼成は良好で，胎土は粗く石英・スコリアを含む。調整は内外面ともナデとなっている。22はカマド右側及び住居南壁寄りの位置出土の土師器高坏の脚裾部である。法量は開口部径11.6cmである。焼成は良好で，胎土は密でスコリアを含む。調整は外面が縦位のヘラ削り，内面はナデとなっている。23はカマド左側付近出土の土師器甕で，胴下半部を欠損する。法量は口縁部径推定13.0cm，胴部最大径推定15.8cmである。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。24は住居南壁付近出土の土師器甕で，底部付近を欠損する。法量は口縁部径推定17.4cm，胴部最大径推定29.4cmで大型の甕である。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削りであるが曲線的に削られている。内外面とも剥離が著しい。25はカマド左側付近出土の土師器甕で，底部付近を欠損する。法量は口縁部径17.2cm，胴部最大径14.4cmで口縁部に比べて胴部の小さいバランスの悪い形状である。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面はナデとなっているが，輪積みの痕跡を残しており，内面はナデとなっている。26はカマド左側出土の土師器甕の底部で，法量は底部径6.5cmである。調整は胴部外面は横位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデでやや上げ底となっており，内面はナデとなっている。27は住居中央出土の土師器甕の口縁部である。法量は口縁部径22.2cmで，口縁部が非常に短いつくりとなっている。焼成は良好で，胎土は密で石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっている。28はカマド右側の貯蔵穴周辺と住居南壁付近出土の土師器甑で，法量は口縁部径推定20.8cm，器高20.1cm，底部開口部径7.6cmである。焼成は良好で，胎土は密で石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。29は住居南壁寄りの位置出土の土師器甕で底部付近を欠損する。法量は口縁部径14.9cm，胴部最大径13.2cmで比較的小型の甕である。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削りを重ねて施し，内面は丁寧なナデとなっている。

4　その他の時代の遺構と遺物

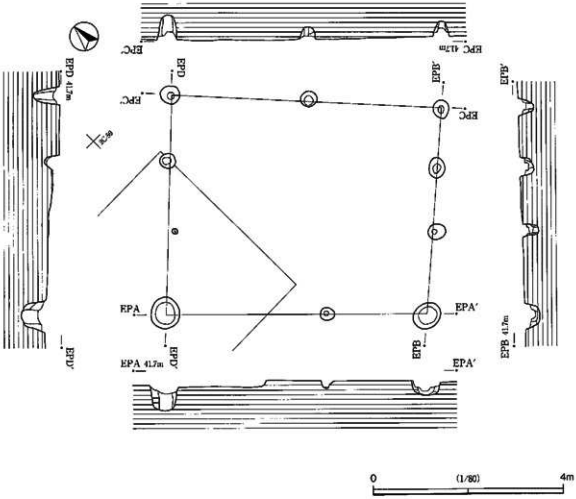
概要

出土遺物や遺構同士の重複関係からは遺構の帰属時期を特定できなかった。

掘立柱建物

SB001（第41図，図版９）

調査地中央の北寄りの2C59・69を中心に位置し，すぐ南にはSI006がある。下層の確認調査中に本遺構を検出したため，遺構の一部の上面を削平している。２間（5.68m・5.44m）×３間（4.61m・4.38m）の南北棟の側柱建物で，桁行方向よりも梁行方向に間の数が多いのが特徴である。主軸はN-45°-Wにふれる。柱間寸法は一定でない。それでも梁行の柱間寸法を間でみると，西端の１間の平均柱間寸法が1.77m（1.74m・1.80m），残り２間の平均柱間寸法が1.36m（最小1.23m・最大1.46m）になり，梁間に限定すれば一応整った間を構成していることがわかる。それにたいして桁行では，４間の柱間寸法（平均2.78m・最小2.19m・最大3.25m）の開きがあまりに大きいので，棟方向は桁行に平行するものと考えておきたい。ただ，屋根構造については通常の切妻か，片屋根であるかは特定できない。柱掘形はいずれも円形だが，西桁行隅柱２本の長径が60cm前後と大きく，それ以外は30cm～40cmである。深さは北梁行の隅柱２本が50cm程度で，それ以外は30cm前後のものが多い。柱痕跡は図示した柱穴で確認できた。柱痕跡は平面形はい



第41図　井森戸遺跡SB001掘立柱遺構（1/80）

第42図　井森戸遺跡その他の遺物(4) (1/3)

ずれも円形で，直径は10cm～25cmである。柱穴埋土からの出土遺物はない。

SB001は構造がやや特殊だが，柱穴の掘形径は中世の掘立柱建物の柱穴よりは大きく，掘形もしっかりしているので，それよりは遡るものと考えられる。建築方位は古墳時代後期の竪穴住居の方位よりもさらに西に振れるので，必ずしも同時施工でない可能性もある。またSB001の西北25mのところに位置する古墳時代の方墳ＳＭ001との関連も検討の余地はあるが，ここでは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのいずれかの時期に帰属すると考えておきたい。

包含層出土の遺物（第42図，図版22）

１は土師器高坏の脚部接合部付近。２は土師器坏で口縁部は体部との境から短く内傾する。体部外面は横位のヘラ削り，内面は粗いミガキがみられる。法量は口縁部径11.7cm，体部径12.8cm，器高推定3.6cm，口縁部高0.7cm。

第３章　成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡の調査

第１節　調査区及び発掘区の設定

岩之台（井森戸）２遺跡は成田市東三里塚字岩之台129－１他に所在する。

岩之台（井森戸）２遺跡は成田国際空港の南端に位置しており，整備貨物地区南側貨物取扱施設の用地造成のため，平成14年度と平成15年度の両年度にわたり埋蔵文化財調査が実施された。

岩之台（井森戸）２遺跡の調査区の設定は前章井森戸遺跡と同様であり，公共座標を基準として50m×50mの方眼グリッドを設定し，北から０，１，２，…，西からB，C，D，…とし，0B，1C，2D，…と呼称した。また，各方眼グリッド内を北西端から南東端にかけて先頭の00グリッドを第１段第１列とし10列ごとに次段の西端に移り，00～99の10段10列100分割小グリッドを設定し，遺構の検出や遺物の取り上げの際の基準とした。

第２節　調査の経緯

岩之台（井森戸）２遺跡は，空港南端を直線状に走る旧296号線の南に広がる標高43m前後の台地上に位置する。

岩之台（井森戸）２遺跡の調査は，２年度にわたり実施され，平成14年６月17日～平成14年８月30日まで対象面積9,250㎡のうち925㎡について上層確認調査，平成14年９月２日～平成14年11月29日まで対象面積9,250㎡のうち370㎡の下層確認調査をそれぞれ実施した。その結果，平成14年９月２日～平成15年３月30日まで590㎡の上層本調査と128㎡の下層本調査が実施された。また，平成15年７月18日～平成15年10月30日まで対象面積15,750㎡のうち1,575㎡の上層確認調査，平成15年11月17日～平成15年12月５日まで対象面積15,750㎡のうち630㎡の下層確認調査をそれぞれ実施した。その結果，平成15年10月31日～平成15年12月25日まで7,000㎡の上層本調査と356㎡の下層本調査が実施された。

第３節　調査の概要

岩之台（井森戸）２遺跡は，成田国際空港の南に隣接した同じ台地上にあり，成田市と芝山町の市町界によって分断されているものの井森戸遺跡とは本来は同一の遺跡である。

両遺跡を含む井森戸遺跡については，主要地方道成田松尾線（通称はにわ道）建設工事に伴う埋蔵文化財調査[1]，旧296号線代替用地造成にともなう埋蔵文化財調査[2]，県企業庁関連の空港南部工業団地造成にともなう埋蔵文化財調査[3]がそれぞれ実施されている。

岩之台（井森戸）２遺跡は，井森戸遺跡の北部を占めており，旧石器時代の石器出土地点２か所，縄文時代の遺物包含層３か所，古墳時代の住居跡６軒，小竪穴１基，近世の溝状遺構２条が検出されている。

調査は上層の確認調査，下層の確認調査の成果に基づき上層・下層の本調査を実施したが，基本となる層序は次のようである。

Ⅰ層は黒褐色土の現地表土である耕作土。調査前は耕作のためトラクター等により一部が削平されている。

Ⅱc層は暗赤褐色土で軟質の縄文時代遺物包含層である。

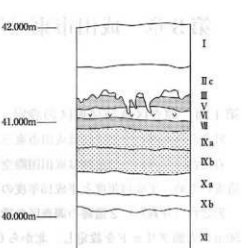
Ⅲ層は黄褐色のソフトローム層である。立川ローム最上部にあたり，軟質化したローム層である。岩之台（井森戸）２遺跡では，Ⅲ層の遺存状態がきわめて悪いのが特徴である。

Ⅴ層は暗黄褐色の硬質ローム層である。第１黒色帯にあたり，色調は淡く，粘性も弱い。

Ⅵ層は明褐色の硬質ローム層でAT（姶良丹沢）パミスを多量に包含する。

Ⅶ層は暗赤褐色の硬質ローム層で，第２黒色帯にあたる。赤色スコリアを多量に含み，粘性が強い。

Ⅸ層は井森戸遺跡ではあまり明瞭には区分できなかったが，岩之台（井森戸）２遺跡では上部のⅨa層と下部のⅨc層に区分される。



Ⅸa層は暗褐色の硬質ローム層で，粘性が強く，赤色スコリアを多量に含む。

Ⅸc層も暗褐色の硬質ローム層であるが，Ⅸa層よりも粘性は弱く，赤色スコリアの量も少ない。

Ⅹ層も井森戸遺跡では単層として認識されたが，岩之台（井森戸）遺跡では上部のⅩa層と下部のⅩb層に区分される。

Ⅹa層は暗黄褐色の硬質ローム層で，赤色スコリアを含み，粘性は弱い。

Ⅹb層は暗青褐色の硬質ローム層で，立川ローム最下層にあたる。粘性があり，しまりは良い。

Ⅺ層は灰褐色の硬質ローム層で，武蔵野ローム最上部にあたる。粘性があり，しまりは弱い。

１　旧石器時代

概要

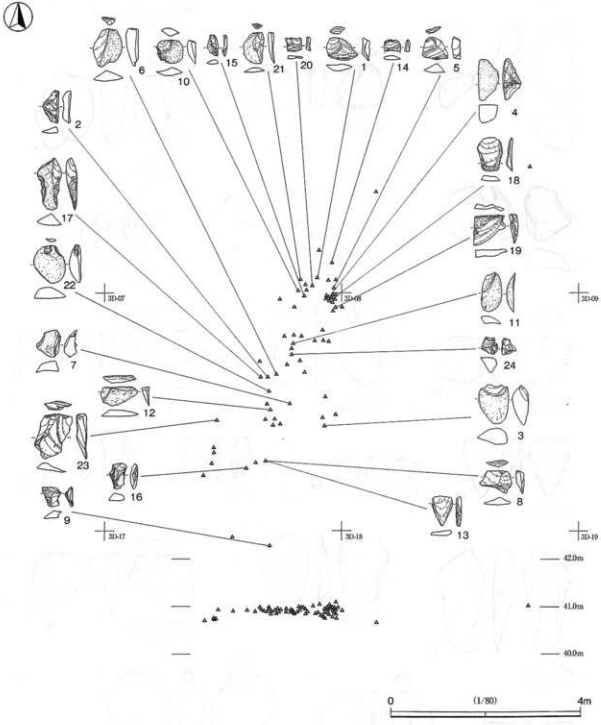
岩之台遺跡の旧石器時代の遺物は，調査区のほぼ中央井森戸遺跡との境界付近３Ｄグリッド及び３Ｅグリッドを中心に２か所から石器類が検出されている。

石器類集中地点

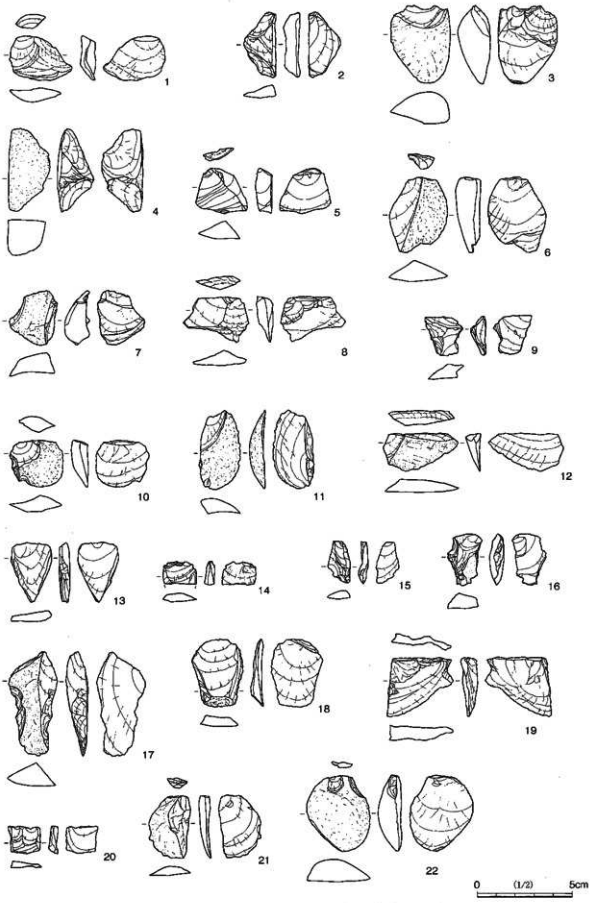
第１地点（３Ｄグリッド）（第43～45図，図版３・22・23）

第１地点では図示した石器類のほか礫石や副次的な微少剥片も多数検出されたが，ここでは石器あるいは石器製作に主体的に関わった可能性のある剥片について扱うものとする。

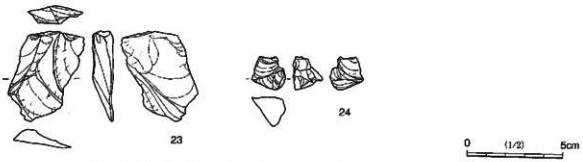
１は2D97グリッドⅦ層出土の剥片で，石材はホルンフェルス。表面は２方向から，裏面は一方向からの打点とそれに伴う剥離痕が見られる。２は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は粗粒安山岩である。表面は２方向から，裏面は一方向からの剥離痕が見られる。３は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面には自然面を残している。４は3D07グリッドⅦ層出土の石核で，石材は安山岩である。表面は自然面のままで，裏面は二方向からの剥離痕が見られる。５は2D97グリッドⅦ層出土の微細剥離痕のある剥片で，石材はメノウである。６は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面に自然面を残している。７は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面には自然面を大きく残した状態で，裏面は打点と一方向の大きな剥離の痕跡が見られる。８は3D07グリッド



第43図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第１地点石器出土状況 (1/80)



第44図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第１地点出土石器(1) (1/2)

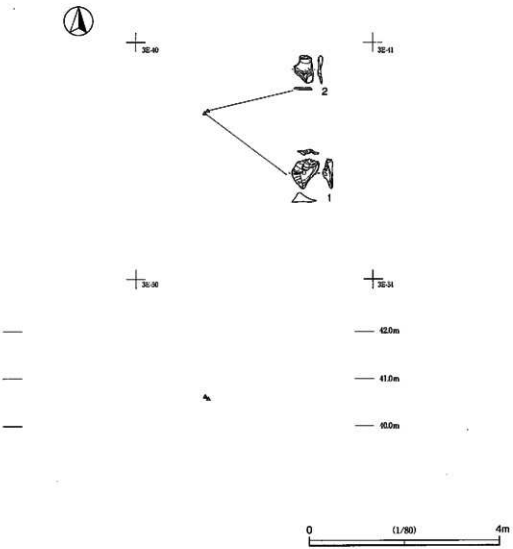


第45図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第１地点出土石器(2) (1/2)

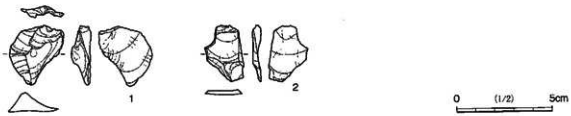
Ⅶ層出土の剥片で，石材は砂岩である。両面とも大きく剥離された痕跡が見られる。９は3D17グリッドⅦ層出土の剥片で，左側縁部は剥離調整，右側縁部は切断により加工されている。石材は安山岩粒の混入が見られる黒曜石である。10は3D07グリッドⅦ層出土のリタッチドフレイクで，剥離後に一部の縁部に調整を加えている。石材は安山岩である。11は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面には丸味のある自然面を残し，裏面は大きな剥離痕となっている。12は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面に自然面を残している。13は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は砂岩である。両面とも一方向からの単純な剥離である。14は2D97グリッドⅦ層出土の剥片で，先端部を切断した痕跡がある。石材は黒曜石である。15は3D07グリッドⅦ層出土の小剥片で，石材はメノウである。表面は複雑に多方面からの調整が入るが，裏面は単純な剥離痕となっている。16は3D07グリッドⅦ層出土の台形石器で，左側縁部に剥離による調整，右側縁部に折取り切断の痕跡が見られる。石材はメノウである。17は3D07グリッドⅦ層出土のナイフ形石器で，表面には自然面を残し左右両側縁部には剥離調整が見られる。石材は安山岩である。18は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面の一部に礫面を残し，裏面は上方からの打撃による大きな剥離痕が見られる。19は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表裏面とも同一方向からの剥離痕が見られる。20は2D97グリッドⅦ層出土の剥片で，石材はメノウである。21は2D97グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面には自然面を残しており，裏面は上方からの大きな剥離痕が見られる。22は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。表面はドーム状に自然面を残しており裏面は上方からの打撃による大きな剥離痕が見られる。23は3D07グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。24は3D07グリッドⅦ層出土の石核で，不整形な小剥片を剥がしたものである。石材は黒曜石である。

第２地点（３Ｅグリッド）（第46～47図，図版３・23）

第２地点は３Ｅグリッドに位置し，第１地点から50mほど東南側にあたる。１は3E40グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。２も3E40グリッドⅦ層出土の剥片で，石材は安山岩である。１・２とも同じ石材であり，同一母岩から剥離した可能性が高いが直接の接合関係には無い。



第46図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第２地点石器出土状況 (1/80)



第47図　岩之台（井森戸）２遺跡旧石器時代第２地点出土石器 (1/2)

第４表　石器観察表（岩之台・旧石器）

石器集中	掘図No.	遺物番号	石　材	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	打角(度)	標　高(m)	器　種
ブレ１	1	P-1-8	ホルンフェルス	Ⅶ	23.5	33.1	7.9	5.03	113	40.895	剥片
ブレ１	2	P-1-27	祖製安山岩	Ⅶ	34.3	16.9	9.0	3.58	129	40.977	剥片
ブレ１	3	P-1-33	安山岩	Ⅶ	41.2	31.1	17.0	23.56		40.863	剥片
ブレ１	4	P-1-43	安山岩	Ⅶ	43.8	21.4	19.3	15.56		40.988	石核
ブレ１	5	P-1-9	メノウ	Ⅶ	23.6	26.7	9.2	4.66	118	40.963	剥片
ブレ１	6	P-1-26	安山岩	Ⅶ	39.8	30.5	13.2	14.25	115	40.926	剥片
ブレ１	7	P-1-31	安山岩	Ⅶ	28.7	25.4	12.9	7.30	100	40.941	剥片
ブレ１	8	P-1-15	砂岩	Ⅶ	32.2	23.5	8.9	5.14	152	40.927	剥片
ブレ１	9	P-1-71	黒曜石	Ⅶ	20.7	20.0	8.0	2.28		40.833	剥片
ブレ１	10	P-1-4	安山岩	Ⅶ	24.8	28.4	9.1	5.92	117	41.001	リタッチドフレイク
ブレ１	11	P-1-22	安山岩	Ⅶ	41.4	21.7	7.9	6.7		40.912	剥片
ブレ１	12	P-1-30	安山岩	Ⅶ	19.6	39.3	8.0	4.72	86	40.880	剥片
ブレ１	13	P-1-38	砂岩	Ⅶ	31.2	21.5	5.7	3.31	80	40.896	剥片
ブレ１	14	P-1-52	黒曜石	Ⅶ	12.3	17.3	5.5	1.22		40.770	剥片
ブレ１	15	P-1-3	メノウ	Ⅶ	21.9	11.9	4.8	0.81	107	40.965	剥片
ブレ１	16	P-1-36	メノウ	Ⅶ	26.7	17.7	7.9	3.45	71	40.908	台形石器
ブレ１	17	P-1-48	安山岩	Ⅶ	54.7	25.8	11.9	13.11		40.956	ナイフ形石器
ブレ１	18	P-1-2	安山岩	Ⅶ	35.5	27.1	6.5	5.59	120	40.974	剥片
ブレ１	19	P-1-16	安山岩	Ⅶ	34.9	30.9	8.6	8.11	111	40.854	剥片
ブレ１	20	P-1-1	メノウ	Ⅶ	14.1	16.8	4.4	0.94	130	41.002	剥片
ブレ１	21	P-1-12	安山岩	Ⅶ	32.9	22.0	6.2	4.00	102	40.943	剥片
ブレ１	22	P-1-28	安山岩	Ⅶ	39.8	33.1	12.7	18.21	120	40.920	剥片
ブレ１	23	P-1-35	安山岩	Ⅶ	46.9	39.2	11.1	13.88	146	40.931	剥片
ブレ１	24	P-1-47	黒曜石	Ⅶ	16.6	17.4	15.6	3.08		40.880	石核
ブレ２	1	P-2-1	安山岩	Ⅶ	31.3	28.3	9.9	5.34	153	40.617	剥片
ブレ２	2	P-2-2	安山岩	Ⅶ	29.5	20.8	4.4	1.90	127	40.553	剥片

２　縄文時代

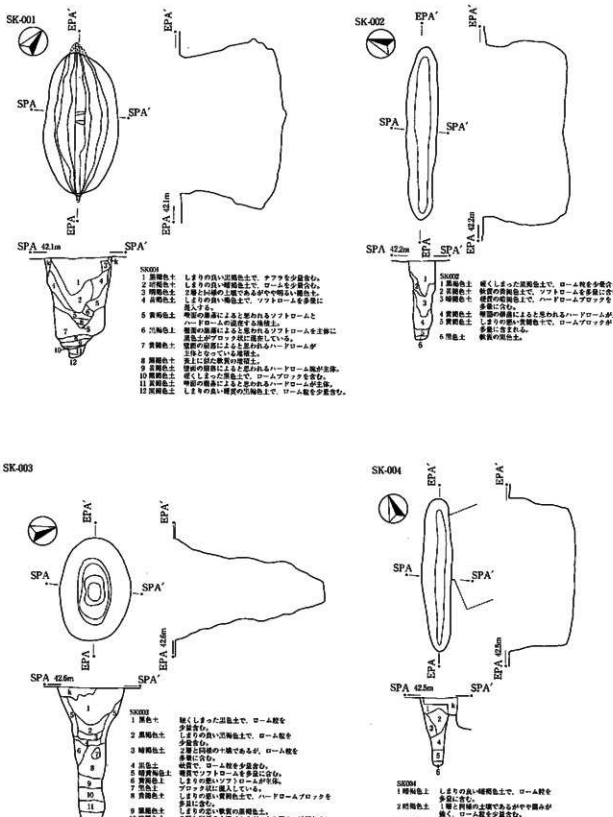
土坑及び陥穴

SK001（第48図，図版４）

調査地中央部で遺構が密集する付近の2C39グリッドに位置し，谷津を登りきった台地縁部に構築されている。平面形は開口部が長楕円形を呈し，底部付近では開口部よりも抉り込みが大きく長軸横断面では巾着状となっており，短軸横断面は開口部から真っ直ぐな掘り込みとなっているが，中段付近の壁の崩落によるものとみられる。また，底部が長軸方向に極端に細く窪められる特徴を有する。長軸・短軸はそれぞれ開口部で3.00m・1.60m，底部での長軸長は3.40mで，深さは2.24mである。主軸方向はＮ-38°-Ｗである。埋土は１～３層は暗褐色系の地表土の流れ込み土壌で，４～７層は黄褐色系のロームを主体とする土壌となっている。両壁の崩落による埋没土と思われる。８層は黒褐色土が水平に堆積しており，９～11層までは黄褐色系のロームが主体となっている。最下層の12層では本遺構埋没時の地表土の可能性の高い黒褐色土の堆積が見られる。

SK002（第48図，図版４）

調査地北西部で台地の北西縁部0B88グリッドに位置し，他に遺構の検出されていない場所である。平



第48図　岩之台（井森戸）２遺跡陥穴(1) (1/80)

面形は開口部で著しく長い楕円形を呈し，長軸横断面では中段付近が開口部より若干掘り広げられている。底面は比較的安定している。長軸・短軸はそれぞれ開口部で3.62m，0.64m，中段での長軸長は3.72m，底部での長軸長は3.30mで，深さは1.84mである。主軸方向はN-72°-Eである。埋土は1層が表土の流入土と思われる黒褐色土で，2層から5層にかけては黄褐色土系のロームが主体となっており，特に3層以下については壁の崩落による自然堆積と思われる。6層は本遺構埋没時の地表土の可能性の高い黒褐色土の堆積が見られる。

SK003（第48図，図版4）

調査地西部の台地中央1C50グリッドに位置し，SK002同様周辺には遺構は検出されていない。平面系は楕円形を呈し，開口部の規模に比べて著しく深さのある陥穴である。底部は柱穴跡のように狭くなっている。長軸・短軸はそれぞれ開口部で2.16m，1.56m，底部での長軸・短軸はそれぞれ0.36m，0.12mで，深さは3.20mである。主軸方向はN-73°-Wである。埋土は1層から4層までは黒色系土壌と5層の黄色系のローム土壌は表土及び壁面の崩落による流入土層と考えられるが，6層以下は黄色系の土壌と黒色系の土壌が互層状態で水平に堆積している。最下層の12層は黒褐色でザクザクした感触であるが，底面は赤褐色の砂層となっている。

本遺構は，形態的にはその深さからも井戸状の遺構を想起させており，陥穴であるのかあるいは別の性格の遺構であるのかいずれにしても確証に欠けることを併記しておきたい。出土遺物はとくにない。

SK004（第48図，図版5）

調査地北部の1C28グリッドに位置し，この地点は遺跡のある台地中央の地点になる。平面形態は開口部で長楕円形を呈し，長軸横断面では開口部から真っ直ぐ底部にむかって壁が降りており特に途中での掘り込みや突出は見られない。底面は平坦でほぼ水平である。長軸・短軸はそれぞれ開口部で3.28m，064m，底部での長軸長は3.20mで，深さは1.48mである。主軸方向はN-26°-Eである。埋土は1層の暗褐色の堆積土は一部撹乱を受けているが，2層から3層は暗褐色土壌及び黄褐色ロームの流入土層となっている。それ以下の堆積は水平で自然堆積である。出土遺物はとくにない。

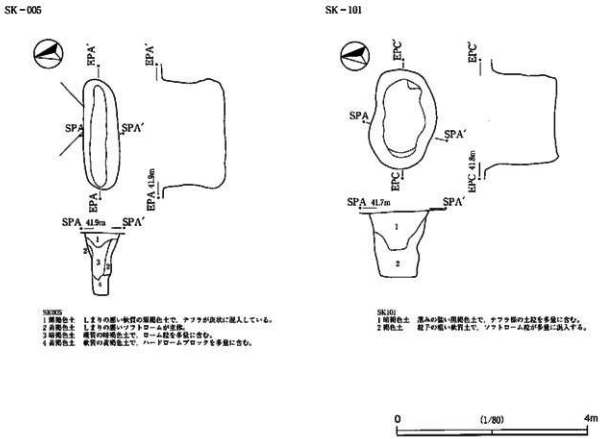
SK005（第49図，図版5）

調査地中央部の遺構が密集する2C37グリッドに位置し，谷津を登りきった台地縁部にあり，SK001とは至近距離の地点である。平面形態は開口部で長楕円形を呈し，長軸横断面では底部付近で長軸方向にさらに掘り込みが見られ巾着状になっている。底面はほぼ水平で安定している。長軸・短軸はそれぞれ開口部で2.34m，0.76m，底部付近の最大幅は0.36mで，深さは1.30mである。主軸方向はN-77°-Wである。埋土は1層が黒褐色土で旧地表土の堆積層と思われるが，2層以下は本遺構埋没に伴う自然堆積層である。出土遺物はとくにない。

SK101（第49図）

調査地東北部の台地平坦部2F72グリッドに位置し，周辺の遺構密度は薄い地点にある。平面形態は開口部で楕円形を呈し，長軸横断面では開口部から底部まで真っ直ぐに壁が降りている。底面は水平で安定している。長軸・短軸はそれぞれ開口部で2.08m，1.40mで，深さは1.42mである。主軸方向はN-90°-Wである。埋土は1層・2層とも自然堆積であり，遺物は検出されていない。

本遺構は平面形態や深さから土坑である可能性が高い。



第49図　岩之台（井森戸）２遺跡陥穴(2) (1/80)

縄文時代の遺物包含層

概要

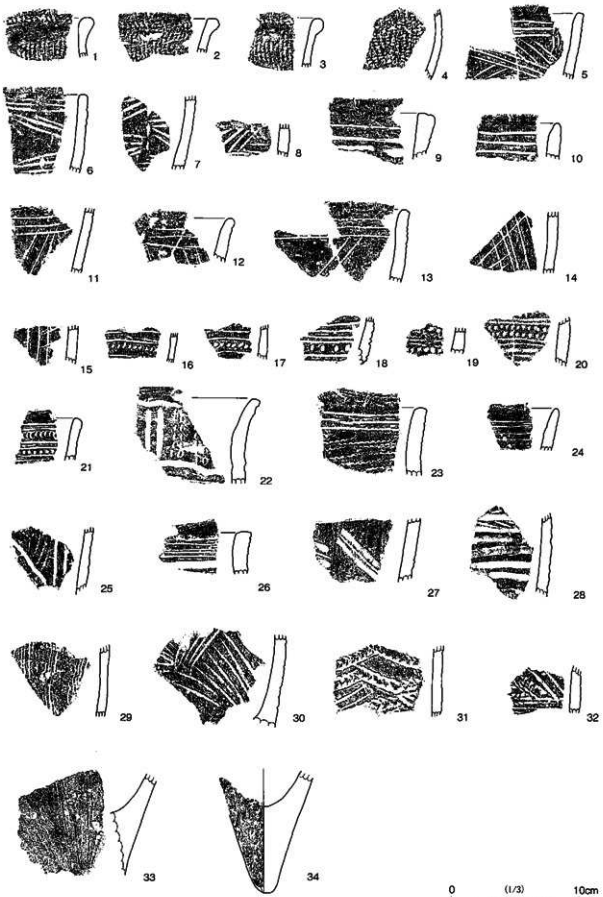
岩之台（井森戸）２遺跡の縄文時代の遺物包含層は，確認調査の結果遺物の分布が広がりそうな２Ｄ・３Ｄグリッドを中心とする第１地点，３Ｅグリッドの第２地点，２Ｆグリッドの第３地点について本調査を実施したが，主に第１グリッドからに土器片及び石器・フレーク類が多数出土した。縄文時代早期を主とするが，前期から後期の時期の土器片も僅かに混在する。土器片に混じって多くの石器類も出土している。

土器（第50～51図，図版24）

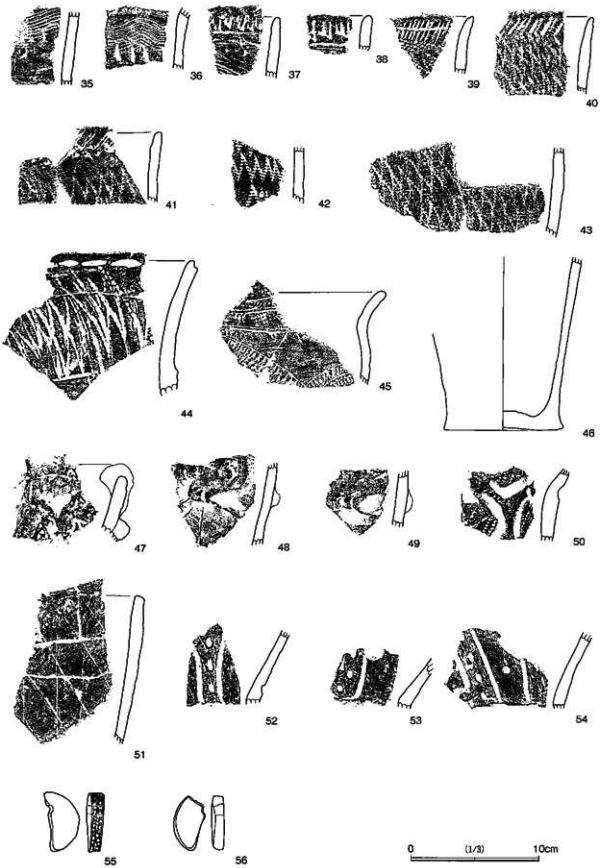
１～４は撚糸文系の土器群で，１～３は丸味のあるやや厚めの口唇部が大きく外反し，口唇部には押圧縄文が見られ，胴部は縦位のRL縄文となる。また口唇部直下は無文部分も見られ井草Ⅰ式に比定される。

５～15は並行沈線を基調としており，いずれも横位または斜位の施文を組み合わせている。７は縦位の刺突列を挟んで斜位の並行沈線が２条単位で施文されており，５・６・８も同様な文様構成の一部である可能性も高い。９・10は口縁部に沿った並行沈線が見られ，１～13は横位と斜位の並行沈線の組み合わせとなり，14・15は格子状に沈線が交差する。

16～21は横位の並行沈線と連続刺突文の組み合わせで，16～19は連続刺突文は１列であるが20は２列編成となっている。また，21は刺突文はそれぞれ１列であるが，三日月様の刺突文列と豆粒様の刺突文列が見られる。



第50図　岩之台（井森戸）２遺跡包含層出土土器(1) (1/3)



第51図　岩之台（井森戸）２遺跡包含層出土土器(2) (1/3)

22は上下をやや太めの沈線で区画された文様帯の中に縦位の並行沈線と２列１組の縦位の連続刺突文で充填している。23は口縁部に沿う３条の並行沈線とその下部には貝殻復縁文を横位に充填している。
24は口縁部に沿って２組の細く繊細な２条の並行沈線が見られる。25は並行沈線で区画された空間を貝殻復縁文で充填している。26は口縁部に沿って数条の細い並行沈線と太い沈線が見られ，27は太い沈線が細い沈線を挟む組み合わせた文様構成を斜位に施文している。28は横位の太い沈線が主体となっている。29は櫛条工具による縦位の波状文，30は２条１組の沈線を斜位に乱雑に交差させており，31は上部に連続刺突文で創出された２連の山形文様帯があり下部には斜位の並行沈線のある田戸上層式に比定され，32は並行沈線で囲まれた区画内を貝殻復縁文で充填している。

33・34は尖底土器の底部で，いずれも無文であるが先端部が比較的尖った形状である。

35～45は縄文時代前期の土器群である。35・36は櫛状工具による横位の波状文と連続爪形文のある諸磯a式。37～41は口縁部に半裁竹管による刻目と胴部に貝殻腹縁による連続刺突文のある興津・浮島式土器で，いずれも貝殻の腹縁を支点をずらしながら交互に移動させてジグザグ文様を創出している。42・43も貝殻腹縁によるジグザグ文様の特徴から興津・浮島式に比定される。44は口唇部に楕円形の連続刺突が見られ，口縁部より下部は貝殻腹縁によるジグザグ文様となっている。45は繊細な沈線で区画された中を貝殻腹縁文で充填しており興津式に比定される。46は底面の安定した平底土器の底部付近で，粗い削りで器面を整えている。

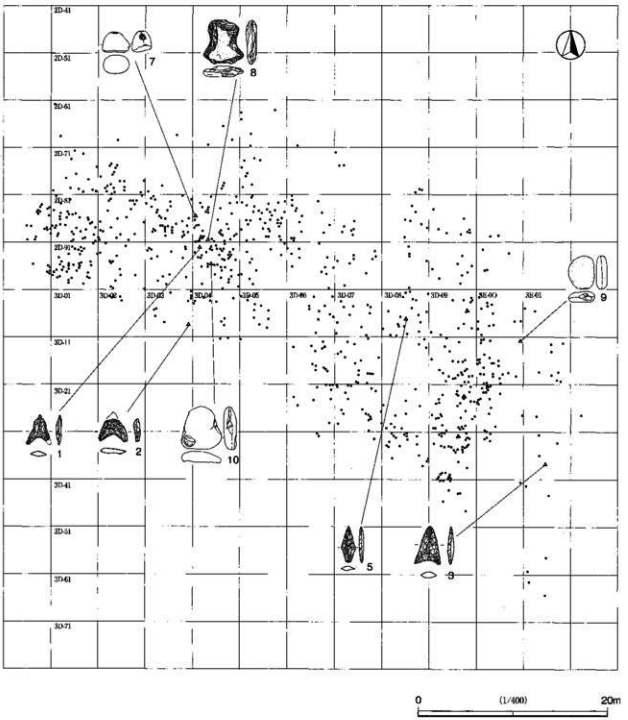
47～50は縄文時代中期の土器群。47は阿玉台式の波状口縁の先端部分で，肉厚の隆帯が縁部に沿って添付されている。胎土には多量の石英粒や雲母細粒を含む。48・49は阿玉台式の胴部で，隆帯を摘み上げた手掛かり状の突出部が創出されている。50は沈線で縁取りされた区画内をRL縄文で充填した加曽利E式。

51～54は縄文時代後期の土器群。51は器面に繊細な沈線による大まかな格子柄を描く後期初頭の土器で，52～54は沈線による区画内に豆粒状の列点文が特徴的な称名寺式に比定される。

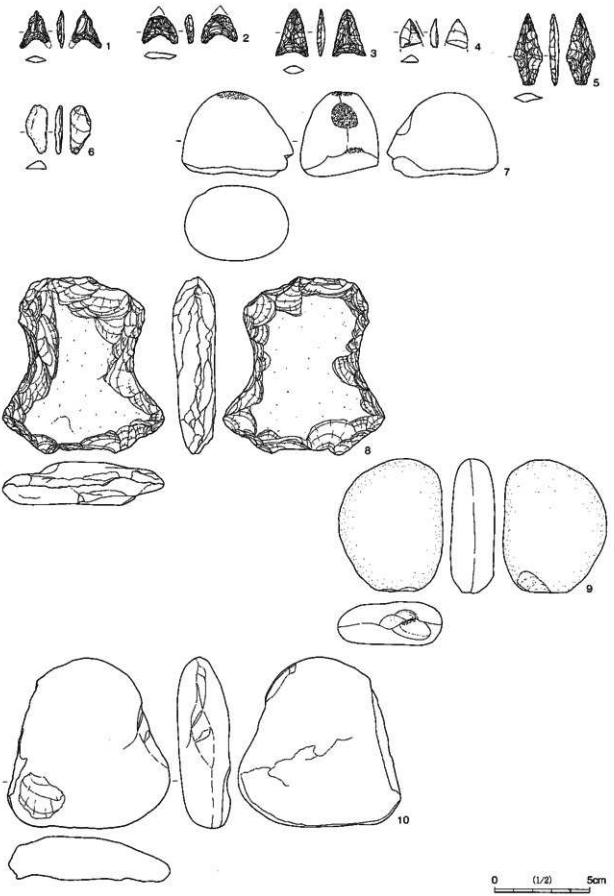
55・56は土製の玦状耳飾でともに２Fグリッド出土である。55はほぼ半分の遺存で，側面に２列の連続刺突文を密に充填しており全体に赤褐色で石英細粒を含み，法量は直径46mm，厚さ11mm，重さ16ｇである。56もほぼ半分の遺存で，側面は丁寧に撫でられているが無文のであり全体に黄褐色で55とは別個体である。法量は直径推定45mm，厚さ9mm，重さ11ｇである。

石器（第52～53図，図版25）

１は2D94グリッドⅢ層上面出土の石鏃である。石材は珪質頁岩で，片方の脚部を欠損している。２は3D03グリッドⅢ層上面出土の石鏃である。石材はチャートで，先端部を欠損する。３は3E31グリッドⅢ層上面出土の石鏃である。石材はチャートで，基部の抉りは比較的浅いつくりとなっている。４は3E04グリッドⅢ層上面一括取り上げの剥片で，折断及び右側縁部に調整痕が見られる。石材は黒曜石である。５は3D08グリッドⅢ層上面出土の有茎の石鏃である。左右両側縁部は丁寧な調整によって形状を整えている。石材はチャートである。６は2D88グリッドⅢ層上面一括取り上げの剥片で，表面は礫面のままである。石材は頁岩である。７は2D84Ⅲ層上面出土の敲石で，頂部に打痕が明瞭についている。石材は花崗岩である。８は2D84グリッドⅢ層上面出土の撥形の打製石斧で，大型の扁平楕円礫を素材として利用している。石材は安山岩で，表裏両面に礫面を残している。９は3E10グリッドⅢ層上面出土の砥石である。石材は安山岩で，丸味のある縁部を中心に擦痕が著しい。10は2D94 3E31グリッドⅢ層上面出土の焼け礫である。石材は扁平なホルンフェルスで，表面には擦痕が著しいことから砥石として利用された可能性も



第52図　岩之台（井森戸）２遺跡縄文時代石器出土状況（1/400）



第53図　岩之台（井森戸）２遺跡縄文時代石器 (1/2)

第５表　石器観察表（岩之台・縄文）

石器集中	掃除No.	遺物番号	石　材	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備　考
2D	1	2D-94-1	珪質頁岩	Ⅲ	19.7	15.3	3.6	0.55	41.314	石鏃
3D	2	3D-03-10	チャート	Ⅲ	14.9	19.0	4.1	0.91	40.490	石鏃
3E	3	3E-31-5	チャート	Ⅲ	24.6	16.6	4.3	1.29	41.753	石鏃
3E	4	3E-04-1	黒曜石	Ⅲ	15.4	11.5	3.8	0.43		剥片
3D	5	3D-08-18	チャート	Ⅲ	37.6	15.1	5.1	2.11	41.289	有茎石鏃
2D	6	2D-88-1	頁岩	Ⅲ	25.5	11.0	4.0	0.98		礫片
2D	7	2D-84-23	花崗岩	Ⅲ	45.0	58.5	41.0	125.48	41.479	敲石
2D	8	2D-84-35	安山岩	Ⅲ	93.4	94.5	22.3	204.13	41.424	打製石斧
3E	9	3E-10-5	安山岩	Ⅲ	70.0	55.5	22.5	104.07	41.786	砥石
2D	10	2D-94-25	ホルンフェルス	Ⅲ	89.8	85.9	27.8	265.26	41.304	扁平礫

考えられる。

3　古墳時代

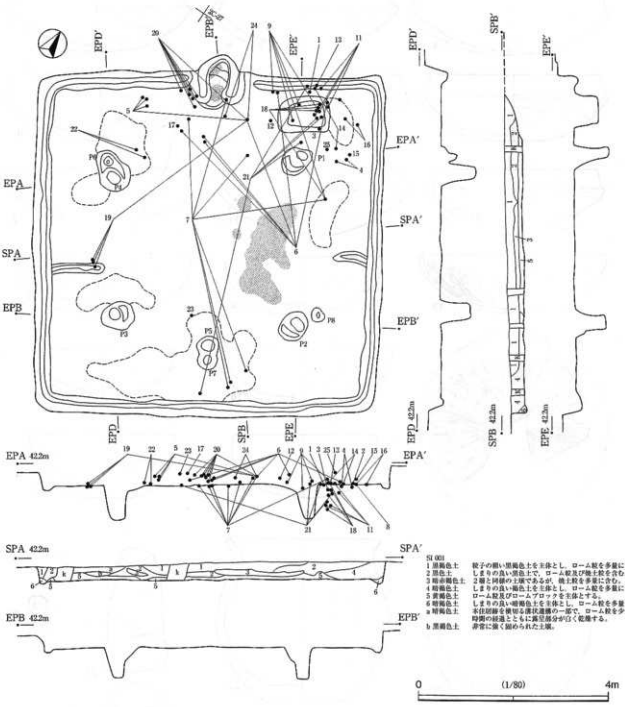
SI001（第54～55図，図版７・26）

調査地中央やや西側で台地が南西方向に傾斜する，2C27に位置する。住居の主軸はＮ-35°-Ｗにとる。主軸長は7.68m，副軸長が7.36mで，ほぼ正方形の竪穴住居である。住居床面積は42.5㎡になる。住居の深さは南西方向が若干低く，西壁で32cm前後，もっとも深い西・北壁で40cm前後ある。壁溝はカマド部分まで巡り，カマドの裾で途切れている。東西の壁のほぼ中央部分から住居中央に向かってそれぞれ溝が延びている。西側の溝は長さ1.12m，東側の溝は長さ0.64mで，仕切壁の支え溝である可能性も考えられる。床面はほぼ平坦で水平である。床面の硬化範囲は住居中央を除いて，南壁付近を中心に存在するが，カマド前面には確認できなかった。住居中央部の埋土は３層からなり，１層がローム粒を含む暗褐色土，２層が黒色土，３層が暗赤褐色土，それ以下５層が床面までローム粒を多く含む黄褐色土が堆積し，２層・３層・５層から土器片が多く出土した。

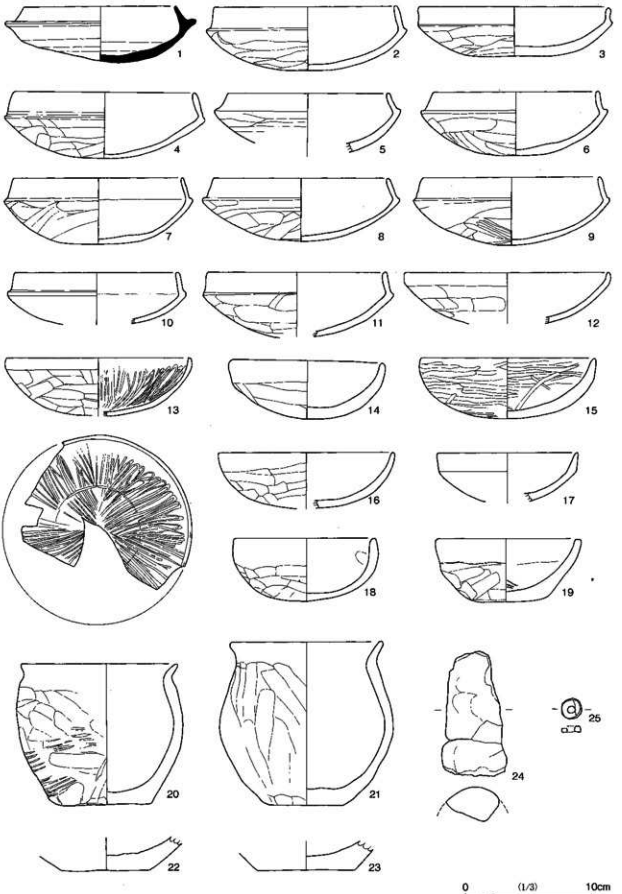
カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を敷いて基部としていた。左袖は一部撹乱されているが高さ12cm遺存し，右袖では17cmほど遺存していた。煙道部は約23°の角度で，火床部は床面より4.0cm掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからは少量の土器破片が出土した。

主柱穴はほぼ住居対角線上の住居隅の近くに４本ある。掘形は不正円形から長円形で，掘形径はいずれのほぼ同じであり，長径64cm～72cmになる。深さは68～72cmである。出入口ピットについては南壁中央の床面上に南北に並ぶ２本のピットがあり形態的には上部堀形が瓢箪状で，機能的には北側のピットが主，南側のピットが補助に相当するものと考えられる。貯蔵穴はカマド右側袖部近くにあり，掘形の平面形態は隅丸方形で，断面はほぼ長方形である。規模は長辺110cm，短辺80cm，深さ50cmである。貯蔵穴内からは３・９・11・21が出土しており，周辺からも多数出土遺物が検出された。

出土遺物は１～19は須恵器及び土師器の坏である。１はカマド右側に位置する貯蔵穴周辺の床面直上出土の須恵器坏で，完形である。法量は口縁部径11.9cm，器高4.4cm，受部径15.0cm，口縁部高1.2cmで底部は丸底であるがやや押しつぶされた形状で，口縁部は受部から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土に長石・スコリアを含む。調整は外面が回転ヘラ削り，内面がナデとなっている。２はカマド右側に位置する



第54図　岩之台（井森戸）２遺跡SI001住居跡 (1/80)



第55図　岩之台（井森戸）２遺跡SI001住居跡出土遺物 (1/3)

貯蔵穴の床面直上出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径14.2cm，器高5.0cm，口縁部高1.6cm，受部径16.2cmで底部は丸底となっている。口縁部と体部の境の受部は明瞭につくり出されており，口縁部は受部からやや内傾する。焼成は良好で，胎土に砂粒・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面は丁寧ななでナデとなっており，内外面とも黒色処理がみられる。3はカマド右側の貯蔵穴出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径14.9cm，器高3.9cm，口縁部高1.6cmで底部は丸底となっている。口縁部と体部の境は明瞭に稜線がつくり出されているが受部としての意識はみられない。口縁部は体部からほぼ真っ直ぐに立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっており，一部に剥離がみられる。4は住居北東コーナー付近の床面直上出土の土師器坏で，完形である。法量は口縁部径14.2cm，器高5.2cm，口縁部径2.1cmで底部は丸底となっている。受部は明瞭なつくりとなっており，口縁部は受部から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっており，一部に剥離がみられる。5はカマド左側の覆土中出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径12.5cm，器高4.1cm，口縁部高1.4cm，受部径14.7cmで底部は丸底となっている。受部は緩やかな段としてつくり出されており，口縁部は受部から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り後のナデ，内面は丁寧なナデとなっている。6は覆土中出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径12.8cm，器高5.0cm口縁部高1.5cm，受部径15.0cmで底部は丸底である。受部は明瞭なつくりで，口縁部は受部から内弯気味に立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。7は住居中央部を中心に床面直上から出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径13.3cm，器高5.2cm，口縁部高1.6cm，受部径14.8cmで底部は丸底である。受部は明瞭なつくりで，口縁部は受部から内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっており，内外面とも黒色処理がみられる。8はカマド右側に位置する貯蔵穴周辺出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径13.6cm，器高5.2cm，口縁部高1.8cm，受部径15.6cmで，底部は丸底である。受部のつくりは明瞭で，口縁部は受部から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっており，内外面とも黒色処理がみられる。9はカマド右側の貯蔵穴内出土の土師器坏で，およそ半分ほどの遺存である。法量は口縁部径推定14.0cm，器高5.3cm，口縁部高1.8cm，受部径15.8cmで，底部は丸底である。受部のつくりは明瞭で，口縁部は受部からやや内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後のナデ，内面は丁寧なナデとなっている。10はカマド右側に位置する貯蔵穴付近の覆土中出土の土師器坏で，大きく欠損している。法量は口縁部径推定13.0cm，器高推定4.1cm，口縁部径1.8cm，受部径推定14.6cmで，底部は丸底である。受部のつくりは明瞭で，口縁部は受部からやや内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。11はカマド右側に位置する貯蔵穴内出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径14.0cm，器高5.1cm，口縁部径1.7cm，受部径16.5cmで底部は丸底である。受部のつくりは明瞭であるが張り出しは弱く，口縁部は受部からやや内傾気味に立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。12はカマ

ド右側に位置する貯蔵穴付近の覆土中出土の土師器坏で，およそ半分ほどの遺存である。法量は口縁部径推定15.8cm，器高推定4.0cmで，底部は丸底である。口縁部は体部との境から軽く摘まれるように立ち上がる。焼成は良好で，胎土にスコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。13はカマド右側に位置する貯蔵穴付近の床面直上出土の土師器坏で，口縁部の半分ほどを欠損する。法量は口縁部径推定14.3cm，器高4.6cmで，底部は丸底である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後の丁寧なナデ，内面は放射状の丁寧なミガキとなっている。14はカマド右側に位置する貯蔵穴付近の床面直上出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径11.7cm，器高4.6cmで，底部は丸底である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。15はカマド右側に位置する貯蔵穴付近の床面直上出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径13.5cm，器高4.8cmで，底部は丸底である。焼成は良好で，胎土にスコリア・粘土粒を含む。調整は体部外面はヘラ削り後の横位のミガキ，内面はナデ後のミガキとなっており，内外面とも黒色処理がみられる。16はカマド右側に位置する貯蔵穴付近の床面直上出土の土師器坏で，およそ半分ほどの遺存である。法量は口縁部径推定13.6cm，器高4.4cmで，底部は丸底である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り後の丁寧なナデ，内面はナデとなっている。17はカマド左側の覆土中出土の土師器坏で，大きく欠損する。法量は口縁部推定11.0cm，器高推定3.8cmで，底部は丸底である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。18はカマド右側の貯蔵穴内出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径10.8cm，器高4.9cmで，底部は丸底である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。19は住居西壁及びカマド付近出土の土師器坏で，ほぼ完形である。法量は口縁部径11.3cm，器高5.0cm，底部径5.4cmで，底部は平底気味である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削りであるが輪積み痕が残されたままで，内面はナデとなっている。

20～23は土師器甕である。20はカマド前面付近の覆土中出土の土師器甕で，法量は口縁部径12.0cm，器高11.1cm，底部径7.0cm，胴部最大径13.0cmと比較的小型の甕である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリア・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は斜位のヘラ削りであるが，器面にヘラ状工具の擦痕が多数みられ，底部はヘラ削り後のナデ，内面は剥離が著しい。21は住居床面直上及びカマド右側の貯蔵穴内出土の土師器甕で，法量は口縁部径11.8cm，器高12.8cm，底部径5.8cm，胴部最大径13.6cmで，20同様比較的小型の甕である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリア・粘土粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。22は住居北西に位置する主柱穴付近の床面直上出土の土師器甕である。底部のみの遺存で，法量は底部径6.9cmである。焼成は悪く，胎土に長石・スコリア・粘土粒を含む。調整は底部付近の内面はナデとなっている。23は住居中央出入り口ピット付近の覆土中出土の土師器甕である。底部のみの遺存で，法量は底部径7.2cmである。焼成は悪く，胎土は密であり，石英・長石・スコリアを含む。調整は底部内面はナデとなっている。24は土製支脚で，縦方向に破損しており，現存する法量は長さ10.5cmで重量は106ｇである。

なお，４・８・13・14・15・16はカマド右側の貯蔵穴を壁側から『コ』字状に取り囲むような位置で検出されている。

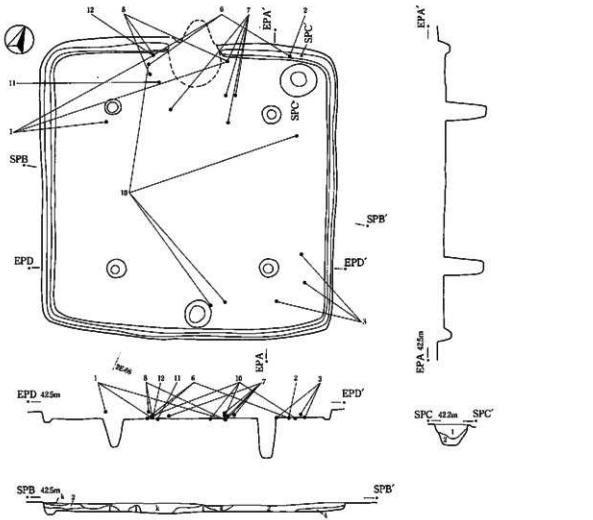
SI101（第56～58図，図版7・27）

調査地中央やや西側で台地が南西方向に傾斜する，2E55～2E56付近にに位置する。住居の主軸はN-21°-Wにとる。主軸長は6.72m，副軸長が6.12mで，ほぼ正方形の竪穴住居である。住居床面積は32.7㎡になる。平坦な台地上に位置するため住居の深さはほぼ同じで20cm前後ある。壁溝はカマド部分まで巡り，カマドの据で途切れている。床面はほぼ平坦で水平である。床面の硬化範囲は住居中央を中心に存在するが，カマド前面には確認できなかった。住居中央部の埋土は4層からなり，1層は炭化粒やテフラ状の褐色土を含む黒色土，2層は多量のソフトローム粒を含む暗褐色土，3層は2層よりもソフトローム粒の混入量の少ない暗赤褐色土，4層はソフトロームブロックを主とする褐色土で，1層・2層から土器片が多く出土した。

カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を敷いて基部としていた。左袖は高さ19cm遺存し，右袖では22cmほど遺存していた。煙道部は約22°の角度で，火床部は床面から8.0cmほど掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからの出土遺物はない。

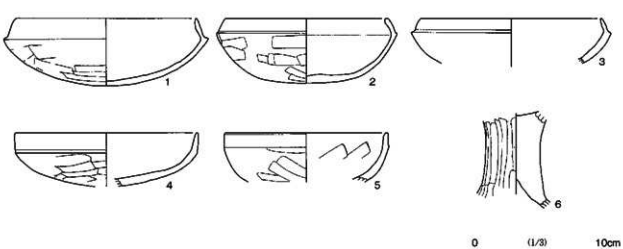
主柱穴はほぼ住居対角線上の住居隅の近くに4本ある。掘形はほぼ正円形からで，掘形の径はいずれもほぼ同じであり40cm～45cm，深さは56～88cmである。出入口ピットについては主軸線上の南壁に接する床面上に位置している。貯蔵穴は住居北東コーナー付近にあり，掘形の平面形態は円形で，断面は底部のすぼまった台形である。規模は長径38cm，短径35cm，深さ23cmで比較的浅い貯蔵穴である。貯蔵穴内からの出土遺物は検出されていない。

出土遺物はカマド周辺と住居南東コーナー付近から出土している。1は覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.1cm，器高5.3cm，口縁部高1.7cm，受部径15.9cmで底部は丸底である。受部は体部端から僅かに段を成し，口縁部は受部から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっており，剥離が著しい。また，SI102住居跡出土の土器片と接合しており，両住居跡はあまり時間差のない関係ることが推測される。2は貯蔵穴付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.7cm，器高5.1cm，口縁部高1.4cm，体部最大径14.0cmで底部は丸底である。受部は明瞭に段がつくり出され，口縁部は受部から内弯気味に立ち上がる。焼成は良好で，胎土は粗く石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。3はカマド周辺出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.2cm，口縁部高1.2cm，体部最大径15.6cmで底部は丸底と思われる。受部は明瞭な段を成し，口縁部は受部から内傾する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。4はカマド周辺及び貯蔵穴周辺出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.4cm，口縁部高1.7cmで底部は丸底である。受部は体部と明瞭に区別されているが張り出しのないつくりとなっている。口縁部は真っ直ぐに立ち上がる。焼成は普通で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。5は覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.7cm，口縁部高1.5cmで底部は丸底と思われる。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土は密であり石英・雲母・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。6はカマド周辺の床面直上出土の土師器高坏である。脚部のみの遺存であるが裾部を欠損する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・長石・スコリアを含む。調整は脚部外面は縦位のヘ

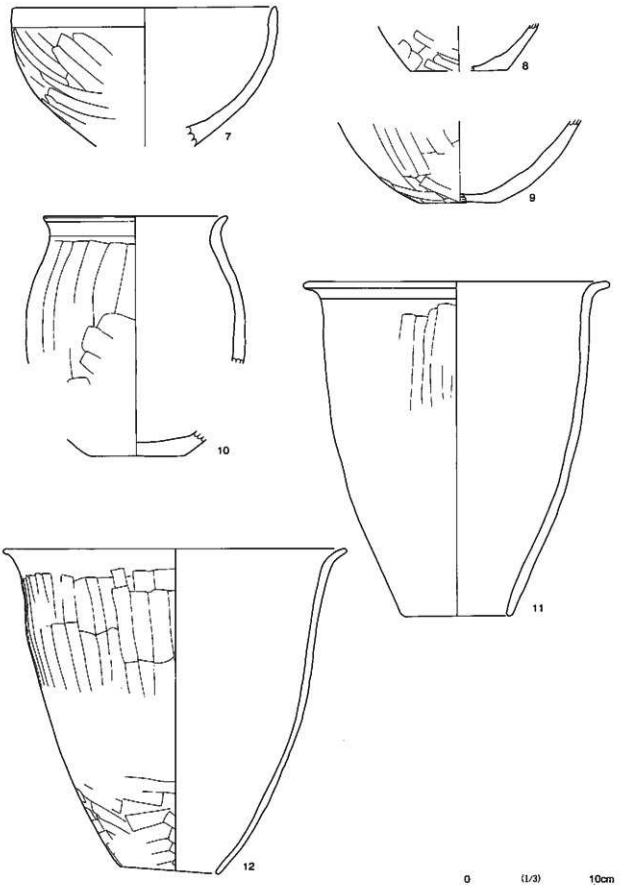


SI101
1 黒色土　　チャラ状の褐色を含む。多数の焼化材の混入が見られる。
2 暗褐色土　5～10mm程度のソフトローム粒を多く含む。
3 暗褐色土　焼土との混入がみられ、ソフトロームも含まれるが量的には少ない。
4 褐色土　　ブロック状のソフトロームを含む。

第56図　岩之台（井森戸）２遺跡SI101住居跡 (1/80)



第57図　岩之台（井森戸）２遺跡SI101住居跡出土遺物(1) (1/3)



第58図　岩之台（井森戸）２遺跡SI101住居跡出土遺物(2) (1/3)

ラ削りとなっている。7はカマド周辺出土の土師器鉢で，底部を欠損する。法量は口縁部径推定20.7cmで口縁部は体部からそのまま真っ直ぐに立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。8は覆土中出土の土師器甕の底部。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は体部外面は斜位のヘラ削り，底部は粗いヘラ削り痕がみられ，内面はナデとなっている。9は住居の広い範囲に散在していた土師器甕の底部。焼成は良好で，胎土に長石・雲母・砂粒を含む。調整は胴部外面は縦位のヘラ削りで底部付近は斜位のヘラ削りとなっており，内面はナデである。10はカマド周辺出土の土師器甕で，胴下半部の一部を欠損する。法量は口縁部径14.4cm，器高推定18.8cm，底部径7.3cm，胴部最大径17.1cmで比較的小型の甕である。焼成は良好で，胎土は密であり長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削りで剥離が著しく，内面はナデとなっている。11はカマド周辺の床面直上出土の土師器甑である。法量は口縁部24.0cm，器高26.4cm，底部開口部径8.0cmである。焼成は良好で，胎土は密であり長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。12は住居南東部コーナー付近の床面直上出土の土師器甑である。法量は口縁部径26.9cm，器高25.2cm，底部開口部径7.7cmである。焼成は良好で，胎土は密であり石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削りを短く重ねて施し，内面は丁寧なナデとなっている。

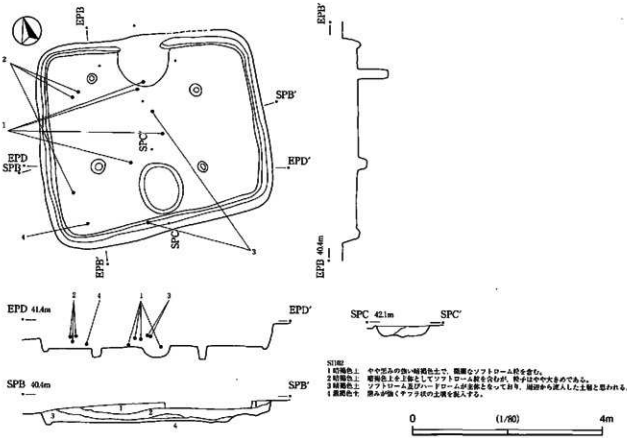
SI102（第59～60図，図版8・27）

調査地中央で台地が南西方向に僅かに傾斜する，3D27及び3D28付近に位置する。成田市と芝山町の市町境に沿って東西に走る旧道下から検出された。住居の主軸はN-10°-Eにとる。主軸長は4.40m，副軸長が4.96mで，住居の平面形は西壁が東壁よりも広い台形状の竪穴住居である。住居床面積は14.86㎡で小型の竪穴住居である。住居の深さは西壁方向が若干低く20cm前後，もっとも深い東壁で48cm前後ある。壁溝はカマド部分まで巡り，カマドの裾で途切れている。床面はほぼ平坦で水平である。床面は全体的に硬化しているが，カマド前面には硬化面は確認できなかった。住居中央部の埋土は4層からなり，1層は微細なソフトローム粒を含む暗褐色土，2層はやや大粒のソフトローム粒を含む暗褐色土，3層は多量のソフトローム・ハードロームを混入する暗赤褐色土，4層は黒褐色土が堆積し，2層・3層・4層から土器片が多く出土した。

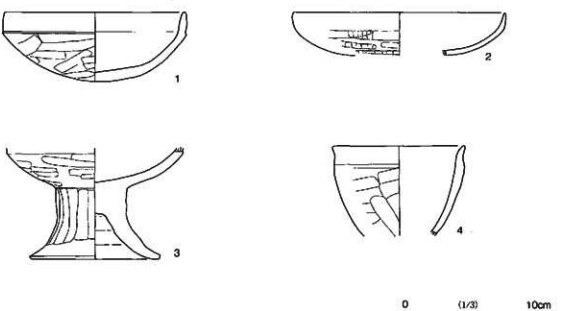
カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を敷いて基部としていた。左袖は高さ12cm遺存し，右袖では17cmほど遺存していた。煙道部は約25°の角度で，火床部は床面より3.0cm掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからは少量の土器破片が出土した。

主柱穴はほぼ住居対角線上の住居隅の近くに4本ある。掘形は正円形で，掘形径はいずれもほぼ同じであり，長径20cm～32cmになる。深さは20cm～64cmである。出入口ピットについては検出されていないが，通常出入り口ピットが作られる位置に平面円形の土坑が検出されている。土坑は主軸線上の南壁に接する位置にあり，掘形の平面は楕円形で，断面は皿状である。規模は長径112cm，短径88cm，深さ24cmである。

出土遺物は1が覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.2cm，器高5.4cm，口縁部高1.7cm，受部径14.4cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段をつくり出しているが張り出しは小さい。焼成は良好で，胎土は密であり石英・雲母・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。2は住居南西コーナーの床面直上出土の土師器坏で，法量は口縁部径推定



第59図　岩之台（井森戸）２遺跡SI102住居跡 (1/80)



第60図　岩之台（井森戸）２遺跡SI102住居跡出土遺物 (1/3)

16.8cmで底部は丸底と思われる。焼成は普通で，胎土は密であり石英・砂粒を含む。調整は体部外面はヘラ削りであるが，ヘラ状工具を引きずった痕がみられ，内面はナデとなっている。3は住居中央位置の床面直上出土の土師器高坏で，坏部の口縁部を欠損する。法量は脚裾部開口部径10.5cm，脚部高5.7cmである。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリア・砂粒を含む。調整は坏部外面は横位のヘラ削りで脚部外面は縦位のヘラ削りとなっておりともに赤彩の痕跡がみられ，坏部内面はナデとなっているが剥離が著しく，脚部内面には輪積みの痕跡が明瞭に残されている。4は住居中央位置及び南壁付近出土の土師器甕で，底部付近を欠損する。法量は口縁部径10.4cm，胴部最大径10.4cmで比較的小型の甕である。焼成は普通で，胎土は粗く，スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。

SI103（第61～63図，図版8・28）

調査地東部の平坦な台地上で，3F42及び3F52付近に位置する。住居の主軸はN-30°-Wにとる。主軸長は7.56m，副軸長が7.48mで，ほぼ正方形の竪穴住居である。住居床面積は46.51㎡になる。住居の深さは南東方向が若干低く，西壁で48cm前後，もっとも浅い東壁で36cm前後である。盤溝はカマド部分直下まで巡り住居を全周する。床面はほぼ平坦で水平である。床面の硬化範囲は住居前面で確認されたが，南カマド前面には確認できなかった。住居中央部の埋土は3層からなり，1層は微細なソフトローム粒子を含む黒褐色土，2層は暗褐色土，3層はソフトローム粒子の他にハードロームの混入もみられる暗褐色土で，出土遺物は1層・2層・3層から検出された。

カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を敷いて基部としていた。左袖は高さ32cm遺存し，右袖では34cmほど遺存していた。煙道部は約48°の角度で，火床部は床面より3.0cm前後掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからは少量の土器破片が出土した。

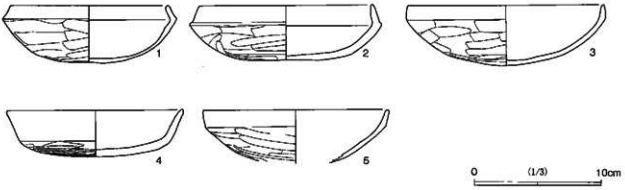
主柱穴はほぼ住居対角線上の住居隅の近くに4本ある。掘形は不正円形から長円形で，掘形径はいずれもほぼ同じであり，長径64cm～80cmになる。深さは80cm～104cmである。出入口ピットについては主軸線上の南壁付近の床面に位置し，規模は長径48cm，短径56cm，深さ48cmである。貯蔵穴はカマド右側袖部と北東コーナーの中間位置に近く，掘形の平面形態は円形で，断面は底部径が開口部径よりもやや短い台形状である。規模は長径120cm，短径105cm，深さ58cm前後である。貯蔵穴内からは11が出土しており，周辺からも多数出土遺物が検出された。

出土遺物はカマド周辺及び貯蔵穴と住居南壁付近から検出されている。1は住居西壁付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.5cm，器高4.5cm，口縁部高1.2cm，受部径13.6cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段はなく，口縁部は体部との境から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土は密であり，石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。2は住居南東コーナー付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径13.6cm，器高4.3cm，口縁部高1.6cm，受部径14.9cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段をつくり出しており，口縁部は受部から大きく内傾する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。3はカマド左脇の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径15.4cm，器高4.7cmで底部は丸底である。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデと

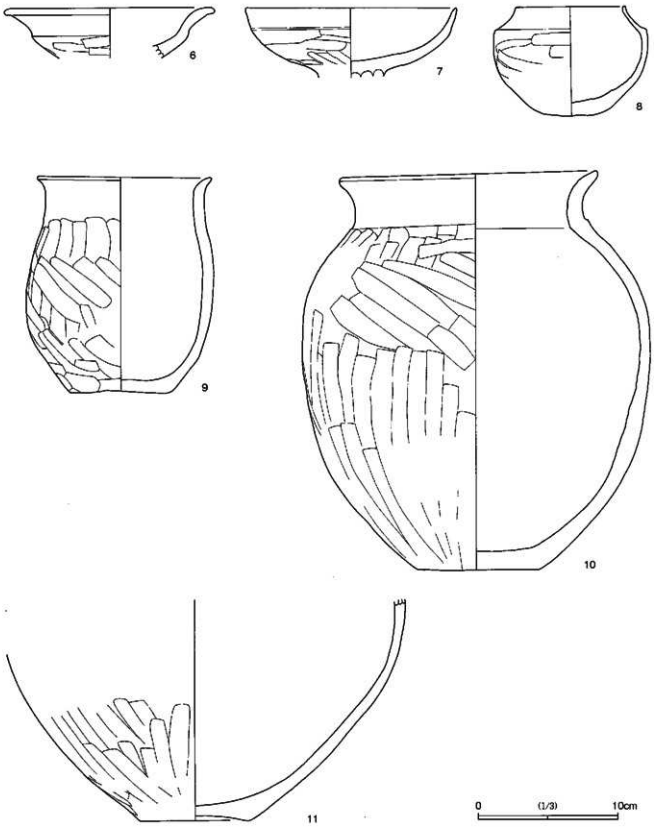
SI103
1 黒褐色土　黒褐色土を主体として、褐色のソフトローム粒を含む。
2 明褐色土　やや粘性の強い明褐色土を主体として、褐色のソフトローム粒を含む。
3 赤褐色土　ソフトロームを主体とする混入土層。
4 明褐色土　粉粒（白砂）を多量にさながらマメ褐色粒の混入土。
5 黄褐色土　黄褐色土を主体として、ロームブロックを含む。

0　(1/80)　4m

第61図　岩之台（井森戸）２遺跡SI103住居跡 (1/80)



第62図　岩之台（井森戸）２遺跡SI103住居跡出土遺物(1) (1/3)



第63図　岩之台（井森戸）２遺跡SI103住居跡出土遺物(2) (1/3)

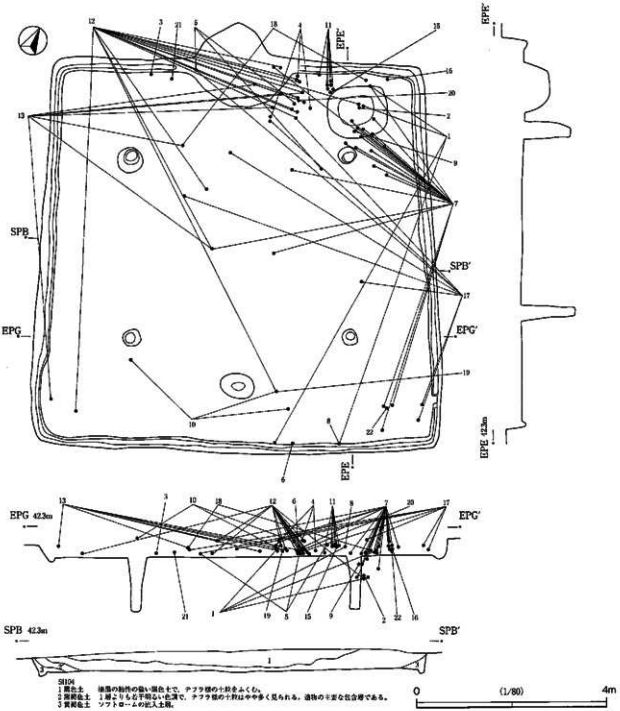
なっている。4は貯蔵穴周辺の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径13.3cm，器高3.7cm，口縁部高2.4cmで底部は丸底である。口縁部の比率は体部に比べて大きい特徴を持ち体部との境から大きく外傾する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。調整は体部外面はミガキがみられ，内面はナデとなっている。5はカマド付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.5cm，口縁部高1.4cmで底部は丸底と思われる。口縁部は体部との境から僅かに外傾する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。6は住居南壁付近の覆土中出土の土師器高坏で，脚部を欠損する。法量は坏部口縁部径15.0cm，口縁部高2.1cmで口縁部は体部との境から大きく外反する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，坏体部は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。7は貯蔵穴周辺の覆土中出土の土師器高坏で，脚部を欠損する。法量は坏部口縁部径15.2cm，口縁部高1.5cmで，口縁部は体部との境からやや外傾する。焼成は良好で，胎土は粗く石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面は丁寧なナデである。8は住居中央西壁寄りの位置及びカマド左側の覆土中出土の土師器甕で，法量は口縁部径7.8cm，器高7.8cm，底部径2.4cm，胴部最大径11.0cmで比較的小型の甕である。口縁部は胴部との境から大きく内反する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。9はカマド右側の覆土中出土の土師器甕で，法量は口縁部径12.4cm，器高15.6cm，底部径7.1cm，胴部最大径13.3cmで小型の甕である。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後の斜位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。10はカマド左側及び住居東壁付近の覆土中出土の土師器甕で，法量は口縁部径18.4cm，器高28.4cm，底部径8.7cm，胴部最大径24.8cmである。口縁部と胴部の境には明瞭な稜線があり，口縁部は胴部との境から大きく外反する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後の斜位のヘラ削り，内面はナデとなっている。11は貯蔵穴周辺及びカマド左側位置の床面付近出土の土師器甕で，胴上半部以上を欠損する。法量は底部径7.8cm，胴部最大径推定30.0cmである。焼成は良好で，胎土に長石・スコリア・砂粒を含む。調整は胴部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっている。

SI104（第64～67図，図版8・9・28・29）

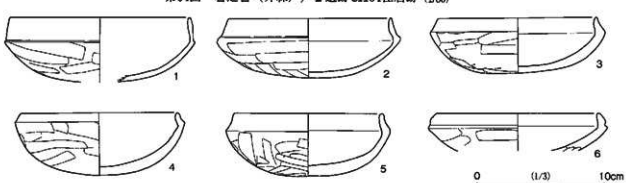
調査地東側で平坦な台地上で，3F00付近に位置する。住居の主軸はN－27°－Wにとる。主軸長は9.04m，副軸長が8.40mで，南壁8.48m，北壁7.76mで，南壁が北壁よりも若干長い台形状の大型の竪穴住居である。住居床面積は61.77㎡になる。住居の深さは南方向が若干浅く，南壁で32cm前後，もっとも深い北壁で40cm前後である。壁溝はカマド下部まで巡り住居の壁ぎわを全周する。床面はほぼ平坦で水平である。床面の硬化範囲ははほぼ全域に存在するが，カマド前面には確認できなかった。住居の主たる堆土は3層からなり，1層はテフラ様の土壌を含む黒色土，2層もテフラ様の土壌を多く含む黒褐色土，3層は黄褐色のソフトロームの流入土層であり，1層・2層から土器片が多く出土した。

カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を敷いて基部としていた。左袖は高さ20cm遺存し，右袖では14cmほど遺存していた。煙道部は約32°の角度で，火床部は床面より12.0cm前後掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからは少量の土器破片が出土した。

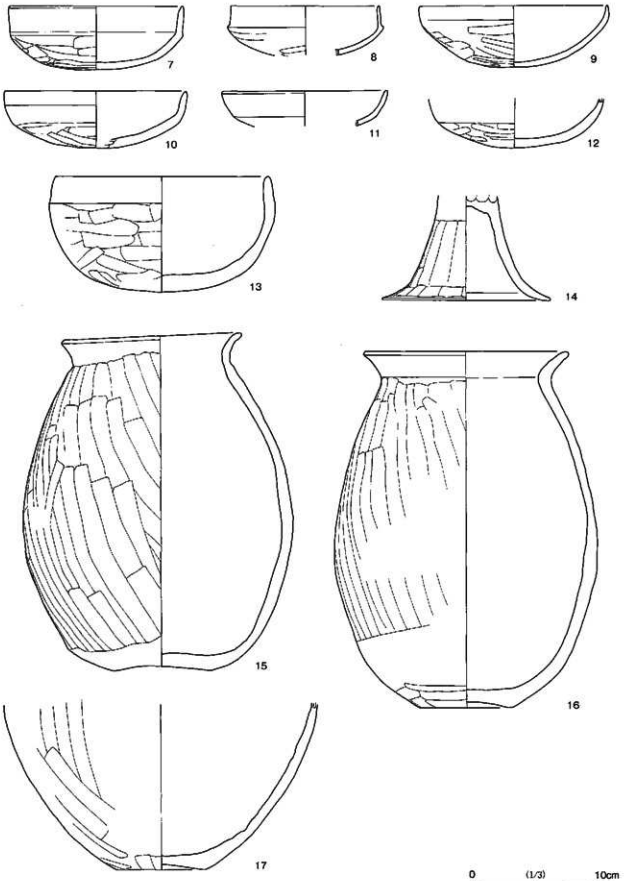
主柱穴はほぼ住居対角線上の住居隅の近くに4本ある。掘形は不正円形から長円形で，掘形径はいずれ



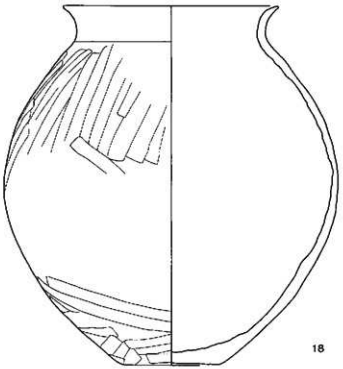
第64図　岩之台（井森戸）２遺跡SI104住居跡 (1/80)

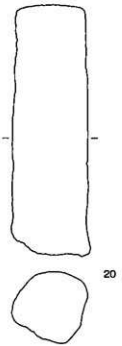


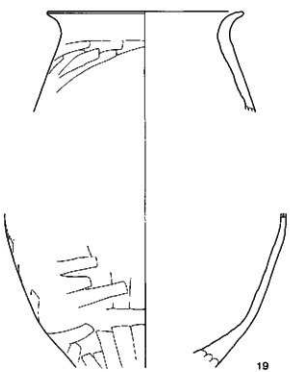
第65図　岩之台（井森戸）２遺跡SI104住居跡出土遺物(1) (1/3)

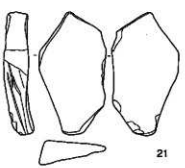


第66図　岩之台（井森戸）２遺跡SI104住居跡出土遺物(2) (1/3)









0 (1/3) 10cm

第67図　岩之台（井森戸）２遺跡SI104住居跡出土遺物(3) (1/3)

のほぼ同じであり，長径32cm～56cmになる。深さは96～116cmである。出入口ピットについては主軸線上の南壁に接する床面上に位置しており，長径72cm，短径52cm，深さ50cmの規模である。貯蔵穴は住居北東コーナー付近にあり，掘形の平面形態は一辺1.3mのほぼ正方形で深さは56cmである。断面は底部の若干すぼまった台形である。貯蔵穴内からは1・3・12・18が出土しており，周辺からも多数出土遺物が検出された。

出土遺物はカマド右側の貯蔵穴付近と住居南壁付近から出土している。1～13は土師器坏である。1は貯蔵穴内出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.1cm，口縁部高2.0cm，受部径14.9cmで底部は丸底と思われる。受部は明瞭な段をつくり出しており，口縁部は受部からやや内傾する。焼成は良好で，胎土は密でありスコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面は放射状のミガキがみられる。2はカマド右側出土の床面付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.7cm，器高4.7cm，口縁部高1.8cm，受部径14.3cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段を成し，口縁部は受部から内傾する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。3は貯蔵穴及びカマド右側覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.5cm，器高4.4cm，受部径13.6cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段はなく，口縁部は体部との境から内傾する。焼成は良好で，胎土は密であり，石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面が横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。4は南壁付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.3cm，器高4.9cm，口縁部高0.8cm，受部径13.2cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段はなく，口縁部は体部との境から短く内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。5は北壁付近の床面直上出土の土師器坏で，法量は口縁部径11.7cm，器高4.9cm，受部径12.9cmで，底部は丸底である。受部は明瞭な段はなく，口縁部は体部との境から内反する。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。6は貯蔵穴周辺の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.8cm，口縁部高1.4cm，受部径14.4cmで，底部は丸底である。受部は明瞭な段を成し，口縁部は受部から短く内傾する。焼成は良好で，胎土に長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。7は住居南壁の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径13.7cm，口縁部高2.4cm，器高5.1cm，体部最大径14.1cmで底部は丸底である。口縁部と体部の境には明瞭な稜がつくり出されており，口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土は密であり，石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。8は住居出入り口ピット付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径11.8cm，口縁部高1.7cm，受部径12.2cmで，底部は丸底である。受部は明瞭な段を成し，口縁部は受部から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土は密でありスコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。9はカマド周辺の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.8cm，器高4.9cmで，底部は丸底である。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。10は住居南壁付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.3cm，器高4.5cmで，底部は丸底である。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土は密であり石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。11はカマド右

側床面付近から出土の土師器坏または高坏で，法量は口縁部径13.0cm，口縁部高2.1cmで，口縁部と体部の境には緩やかな段がみられ，口縁部は体部との境から大きく内弯しながら外に張り出している。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部内面はナデとなっている。12は貯蔵穴内出土の土師器坏で，口縁部を欠損する。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がるものと思われる。焼成は良好であるが，胎土は粗い。調整は体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。13はカマド及び住居中央位置の床面付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径16.9cm，器高9.1cmで，底部は丸底で大型の坏である。口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・雲母・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。

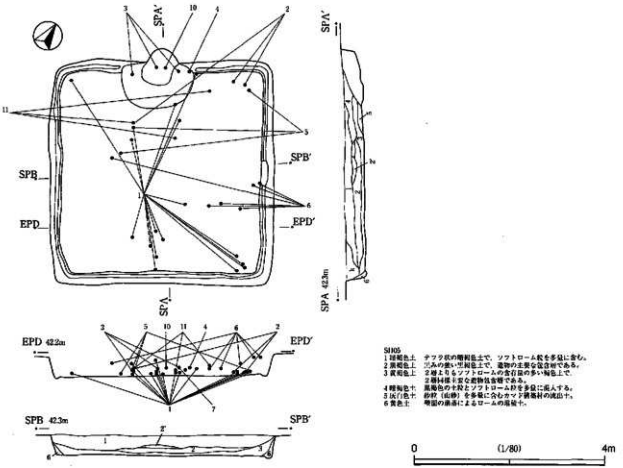
14は貯蔵穴周辺出土の床面付近出土の土師器高坏で，坏部を欠損する。法量は脚裾部開口部径13.2cmである。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は脚部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデにより輪積み痕は消されている。

15～19は土師器甕である。15は貯蔵穴周辺の床面付近出土の土師器甕で，法量は口縁部径14.1cm，器高26.3cm，底部径7.6cm，胴部最大径20.7戦地で，胴下半部に最大径がくる下膨れ状の形態を呈し，底部はやや上げ底気味である。焼成は良好で，胎土に石英・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。16はカマド右側及び住居南西コーナー付近の床面直上出土の土師器甕で，法量は口縁部径16.0cm，器高28.0cm，底部径7.2cm，胴部最大径20.5cmで，胴部最大径が胴下半部にくる形態である。焼成は良好で，胎土に長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後に一部を横位のナデで削りの痕を消しており，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。17はカマド周辺及び貯蔵穴周辺の床面付近出土の土師器甕で，胴上半部以上を欠損する。法量は底部径7.0cmで，胴部最大径推定24.5cmである。焼成は良好で，胎土に長石・雲母。スコリアを含む。調整は胴部外面は縦位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。18は貯蔵穴周辺の床面直上出土の土師器甕で，法量は口縁部径17.0cm，器高28.2cm，底部径7.6cm，胴部最大径26.2cmで，胴部のほぼ中央に胴部最大径がある。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削りと底部付近で斜位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。19はカマド周辺及び住居中央位置の床面付近出土の土師器甕で，法量は口縁部径15.9cm，胴部最大径推定22.0cmで比較的長い胴を有する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り後の横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。20は土製支脚。21は砂岩製の砥石片である。また，SI101及びSI106出土の土器片と接合関係にあり，両遺構との時間差はあまりない可能性が考えられる。

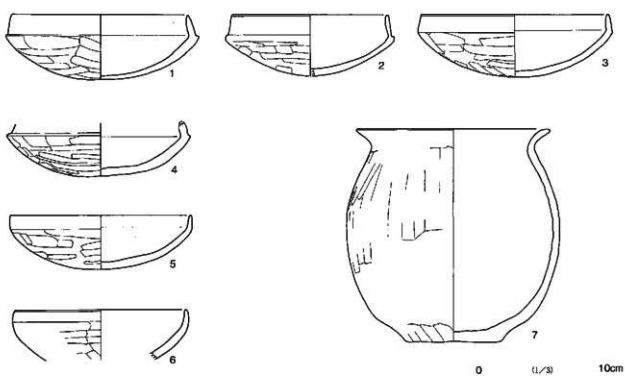
SI105（第68～70図，図版9・29）

調査地東端の平坦な台地上で主要地方道成田松尾線（通称はにわ道）に近接した4F08付近に位置する。住居の主軸はN-33°-Wにとる。主軸長は4.96m，副軸長が4.72mで，ほぼ正方形の竪穴住居である。住居床面積は17.97㎡になる。住居の深さはほぼ同一で45cm前後である。壁溝はカマド部分まで巡り，カマドの裾下で途切れている。床面はほぼ平坦で水平である。床面の硬化範囲は住居前面にに存在する。住居中央部の埋土は3層からなり，1層はソフトローム粒を含む暗褐色土，2層は1層よりもしまりの良い黒褐色土，3層は床面までローム粒を多く含む黄褐色土が堆積し，2層・3層から土器片が多く出土した。

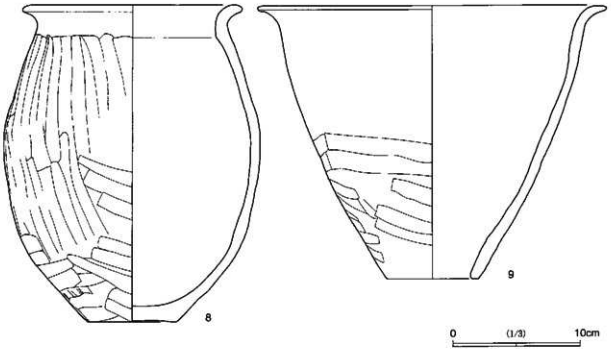
カマドは北壁中央に敷設され，黄灰褐色の山砂を構築材として両袖を作り，両袖の下部には暗褐色土を



第68図　岩之台（井森戸）２遺跡SI105住居跡 (1/80)



第69図　岩之台（井森戸）２遺跡SI105住居跡出土遺物(1) (1/3)



第70図　岩之台（井森戸）２遺跡SI105住居跡出土遺物(2) (1/3)

敷いて基部としていた。カマドの袖は左袖が高さ19cm遺存し，右袖では21cmほど遺存していた。煙道部は約60°の角度で，火床部は床面より19cm前後掘りくぼめている。両袖の内側はよく焼けており，袖の芯部まで赤変していた。カマドからの出土遺物はない。

主柱穴及び貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物はカマド周辺及び住居中央・東壁・南壁付近から出土している。１はカマド周辺の床面付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径13.8cm，器高5.1cm，口縁部高1.7cm受部径15.1cmで，底部は丸底である。受部は明瞭な段を成し，口縁部は受部からやや内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。２はカマド付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径12.4cm，器高4.8cm，口縁部高1.7cm，受部径13.3cmで，底部は丸底である。受部は明瞭な段を成し，口縁部は受部からやや内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。３はカマド付近の覆土中出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.8cm，器高4.9cm，口縁部高1.6cm底部は丸底である。口縁部は体部との境からやや内傾する。焼成は良好で，胎土に石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面はナデとなっている。４はカマド周辺及び住居北東コーナー付近の床面直上出土の土師器坏で，口唇部を欠損する。法量は口縁部径推定12.6cm，受部径14.3cmで底部は丸底である。受部は明瞭な段を成し，口縁部はやや内傾する。焼成は良好で，胎土の石英・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面は横位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。５はカマド右側の床面付近出土の土師器坏で，法量は口縁部径14.2cm，器高4.3cmで底部は丸底である。

口縁部は体部との境から真っ直ぐ立ち上がる。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリアを含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。６はカマド周辺の床面付近出土

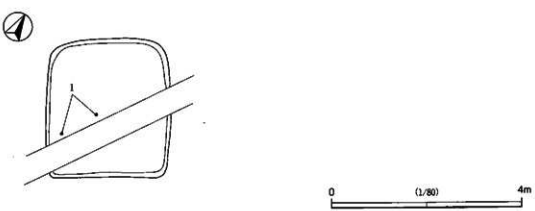
の土師器坏で，底部を欠損する。法量は口縁部径13.5cmで，底部は丸底と思われる。焼成は良好で，胎土に石英・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデとなっている。7は住居中央位置及び北東コーナー付近の床面直上出土の土師器甕で，法量は口縁部径15.2cm，器高16.7cm，底部径7.4cm，胴部最大径16.6cmで，比較的小型の甕である。焼成は良好で，胎土は粗く，石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，内面はナデとなっている。8はカマド周辺及び住居南壁付近の床面直上出土の土師器甕で，法量は口縁部径17.2cm，器高24.9cm，底部径7.0cm，胴部最大径20.0cmで，口縁部は胴部との境から短く外反する。焼成は良好で，胎土に石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は縦位のヘラ削りで底部付近では斜位のヘラ削りとなっており，内面はナデとなっている。9は住居東壁付近の覆土中出土の土師器甑で，法量は口縁部径27.2cm，器高21.5cm，底部開口部径7.2cmである。焼成は良好で，胎土は密であり石英・長石・スコリア・砂粒を含む。調整は口縁部がヨコナデ，胴部外面は胴下半部では横位のヘラ削り，内面は丁寧なナデとなっている。

SI106（第71～72図，図版30）

調査地東端の平坦な台地上で主要地方道成田松尾線（通称はにわ道）に近接した4F44付近に位置する。本遺構はカマドや主柱穴といった付帯施設がまったく見あたらず，長辺2.92m，短辺2.52m，深さは西壁で58cm，東壁で93cmで東壁付近が深いほぼ正方形の小竪穴となっている。

床面はほぼ平坦で水平である。

出土遺物は1点のみで，1は土師器甕の底部で，法量は底部径6.9cmである。焼成は良好で，胎土は粗く石英・長石・砂粒を含む。調整は胴部外面は斜位のヘラ削り，底部はヘラ削り後のナデ，内面はナデとなっている。



第71図　岩之台（井森戸）2遺跡SI106住居跡（1/80）

第72図　岩之台（井森戸）2遺跡SI106住居跡出土遺物（1/3）

4　その他の時代の遺構と遺物

SM001（第73～74図，図版9・10）

調査地中央のやや西側で，南西に傾斜した斜面の肩口にあり，2C15及び2C16付近に位置する。埋葬施設のある主軸の方位はN-30°-Eをとる。主軸長11.2m，副軸長9.52mで，周溝は幅96cm～136cm，深さ19cm～39cmで，比較的小規模な方形規格で，埋葬施設のある南側では一部周溝が二重になっている。調査地を含め遺跡周辺は削平を受けており，残存する部分は新規テフラ面またはソフトローム面以下に残された部分であることを考慮すれば，周溝の当初規模はもう少し大きなものであったことは想定できる。埋葬施設はこの二重周溝の部分を断ち切る形で掘り込まれている。規模は，主軸長4.16m，副軸長2.08m，深さ1.28m前後の土坑墓である。埋葬施設は外側の周溝外壁に接しているが前庭部を持たない竪穴式で，覆土中より炭化材や土坑墓北東壁ぎわの底部に残された板材を固定したと思われる溝の存在から木棺を直葬したものと考えられる。覆土中から検出された炭化材は埋葬後に空洞化した土坑墓内に埋没したものと思われる。

出土遺物は須恵器の短頸壺である。埋葬施設の覆土の比較的上部から検出されており，埋葬後に供献されたものと思われる。頸部より上を欠損し，胴部最大径は16.2cm，底部径は8.8cmで，底部には高台が付く。胴部全体は黄灰色で頸部接合部から肩部にかけて濃緑色の自然釉がみられる。肩部から底部にかけての外面はロクロ目が明瞭である。

SB002（第75図，図版9）

調査地中央の北寄りの2D40及び2D50を中心に位置し，すぐ南にはSB001・SI006がある。

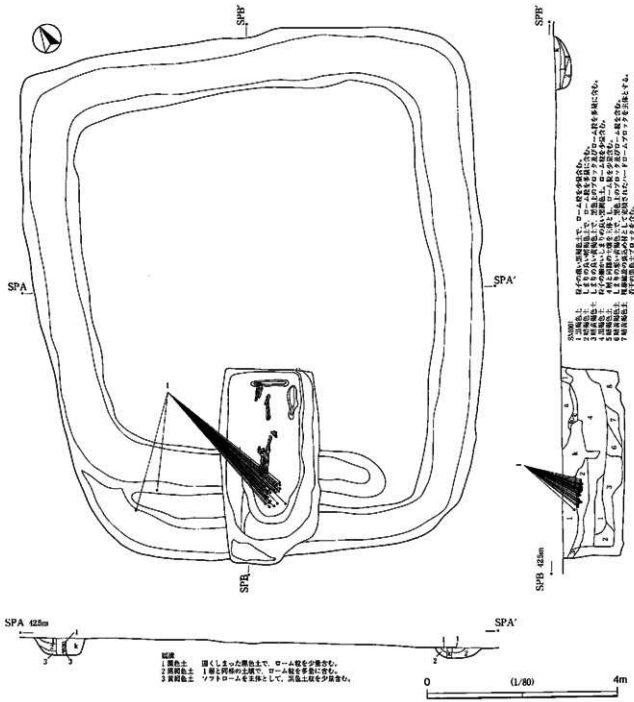
特にSB001とは隣接しているが，並行する位置関係にはなく同時に存在した可能性は低い。

上層確認調査の際には検出されず，下層の確認調査中に検出されたため遺構北部の一部の柱穴を検出できなかった。2間（5.28m・4.98m）×3間（4.62m・4.38m）の南北棟の側柱建物で，桁行方向よりも梁行方向に間の数が多いのが特徴である。主軸はN-45°-Wにふれる。柱間寸法に一定でない。梁行の柱間寸法を間でみると，西端の1間の平均柱間寸法が1.77m（1.74m・1.80m），残り2間の平均柱間寸法が1.36m（最小1.23m・最大1.46m）になり，梁間に限定すれば一応整った間を構成していることがわかる。それにたいして桁行では，4間の柱間寸法（平均2.78m・最小2.19m・最大3.25m）の開きがあまりに大きいので，棟方向は桁行に平行するものと考えておきたい。ただ，屋根構造については通常の切妻か，片屋根であるかは特定できない。柱掘形はいずれも円形だが，西桁行隅柱2本の長径が60cm前後と大きく，それ以外は30cm～40cmである。深さは北梁行の隅柱2本が50cm程度で，それ以外は30cm前後のものが多い。柱痕跡は図示した柱穴で確認できた。柱痕跡は平面形はいずれも円形で，直径は10cm～25cmである。柱穴埋土からの出土遺物は特にない。

SB001は構造がやや特殊だが，柱穴の掘形径は中世の掘立柱建物の柱穴よりは大きく，掘形もしっかりしているので，それよりは遡るものと考えられる。建築方位は古墳時代後期の竪穴住居の方位よりもさらに西に振れるので，必ずしも同時施工でない可能性もある。またSB001の西北25mのところに位置する古墳時代の方墳SM001との関連も検討の余地はあるが，ここでは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのいずれかの時期に帰属すると考えておきたい。

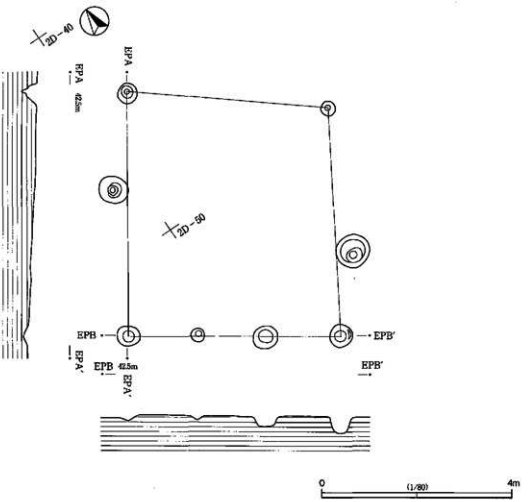
SD001・SD101（第76～77図，図版10・30）

SD001は井森戸遺跡に属するが，岩之台（井森戸）2遺跡に所在するSD101と同一の溝の一部であるこ



第73図　岩之台（井森戸）２遺跡方形周溝状遺構 (1/80)

第74図　岩之台（井森戸）２遺跡方形周溝状遺構出土遺物 (1/3)



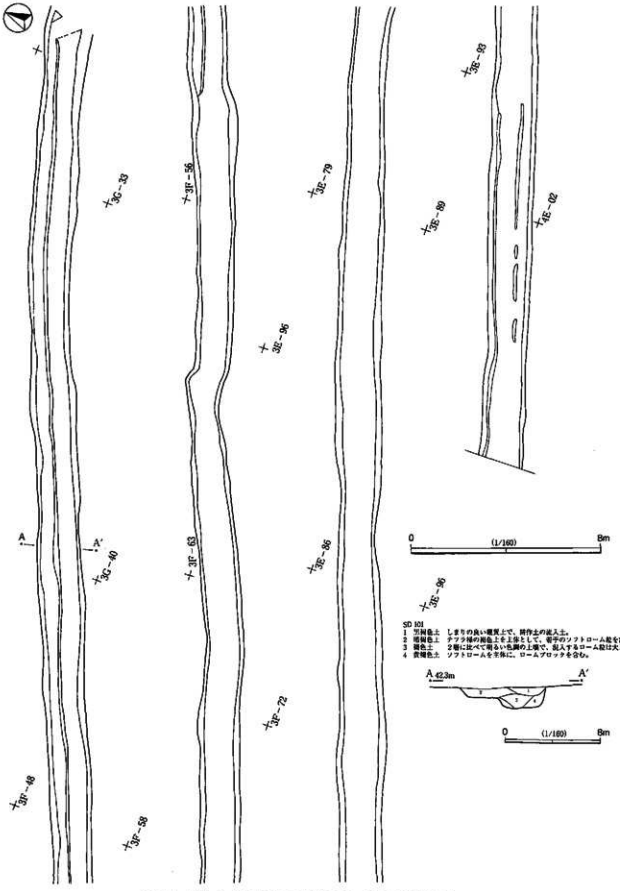
第75図　岩之台（井森戸）２遺跡SB002掘立柱状遺構（1/80）

とから，岩之台（井森戸）２遺跡の遺構として扱うものとする。

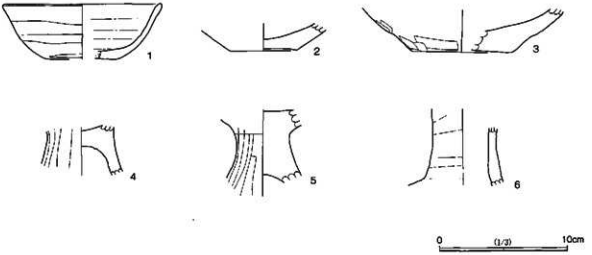
調査地中央が小支谷によって大きく浸食された東側に位置し，およそN－70°－Wの方向にほぼ直線的に斜行する溝である。調査地内の約16mを調査したが，西側に谷が控えており，東端と西端で確認面に60cmほどの比高がある。溝の断面は逆台形で，上端幅は東部で2.0m，西にいくにつれ狭まって西端では1.7mほどになり，下端幅は1.4m～1.5mである。深さはほぼ一定しており，20cmになる。底面の北側には立ち上がり部分に沿って，幅５cm，深さ３cmの細い溝を伴う。この細い溝に平行して，底面中央のやや南よりにも同様の溝がある。これらは一見轍痕跡のようにもみえるが，心々距離が90cmほどであり，轍痕跡としては両者の幅が狭すぎることを考慮しなければならない。

SD101は成田市と芝山町の市町界を走る道に寸断されるものの，南西から北東の方向にほぼ直線で東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡を斜めに横断する。東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡内では，長さ約120m，上端幅約1.9m，下端幅は約1.6m，深さは約20cmである。溝の南西端と北東端では確認面に１m以上の比高差が認められた。

SD001・SD101の両溝状遺構出土の遺物は６点で，いずれも小破片である。１は小ぶりな土師器坏で外面は粗いロクロ目内面は丁寧なナデ調整，底部は中央部分でやや上げ底ぎみである。法量は口縁部径12.5



第76図　岩之台（井森戸）２遺跡D001・SD101溝状遺構（1/160）



第77図　岩之台（井森戸）２遺跡SD001・SD101溝状遺構出土遺物 (1/3)

cm，器高4.3cm。２は土師器甕の底部で上げ底状である。法量は底部径5.1cm。３も土師器の底部付近で底部径は7.8cm，外面には横位のヘラ削りが見られる。内面は丁寧なナデ調整である。４・５は土師器高坏の脚部接合部付近で，外面はいずれも縦方向のヘラ削り調整が見られる。６は須恵器の壺の頸部破片で，外面はロクロ目が明瞭に残っている。

SD102（第78～79図，図版30）

SD102は成田市と芝山町の市町界に沿っており，調査直前まで使用されていた道の下に位置する。長さ約107m，上端最大幅は3.2m，下端最大幅は1.6m，深さは25cm前後である。溝の西端は調査地中央の２DグリッドSB101やSB001（井森戸遺跡）付近からはじまり，SD101と交差する付近まで検出された。

出土遺物は2D61グリッドで石製品と2D84グリッドで鉄製品が検出された。１は隅丸の長方形で法量は縦3.03cm，横4.88cm厚み1.02cm，重さ22.4ｇの粘板岩製の石製模造品で，両端部に穿孔が見られる。２は鉄鏃の茎部の一部で断面は長方形を呈する。

包含層出土の土器（第80～81図，図版30）

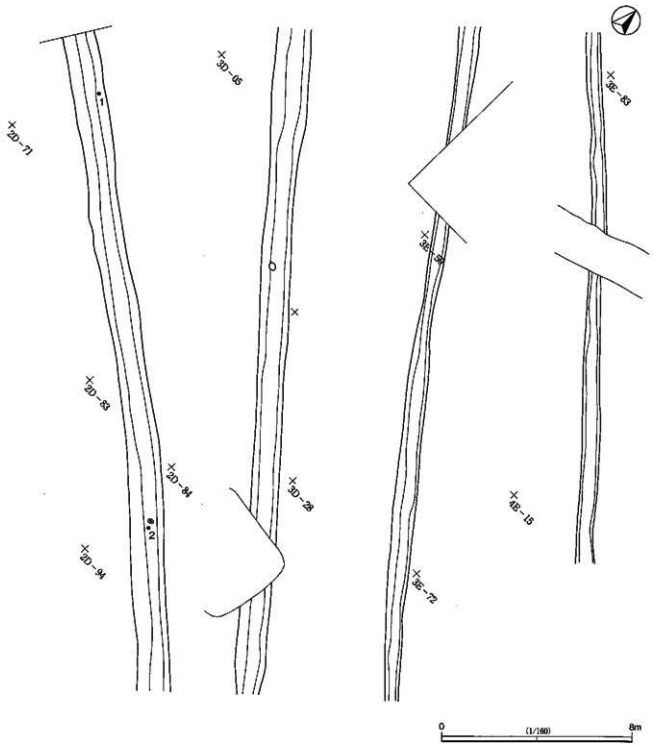
１・３は土師器高坏の脚部の一部で，外面には縦方向のヘラ削り調整が見られる。２は土師器の小型椀で，胴部外面は横位のヘラ削りが見られる。法量は口縁部径9.4cm，胴部最大径9.6cm，で胎土には長石・砂粒を含む。４は土師器坏で口縁部は体部との境から真っ直ぐに立ち上がる。法量は口縁部径13.7cm，口縁部高1.8cm。

包含層出土のその他の遺物（第81図，図版30）

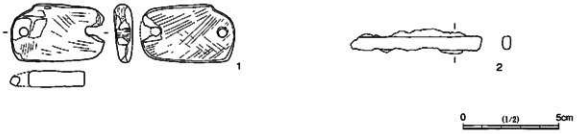
１・２及び６・７は厚さがほぼ均等であり，鉄製のおそらく刀子の破片と思われる。３は釘状の鉄製品。４は鉄鏃の茎部の一部。５は厚みに差がありどのような製品のはへんであるのか不明である。８は銭貨で文久永宝。法量は縁外径2.6cm，縁内径2.0cm，郭外径0.8cm，郭内径0.6cmで，裏面には左右対称の青海波を有する。

註１　1986「井森戸遺跡」「主要地方道成田松尾線Ⅳ」財団法人千葉県文化財センター

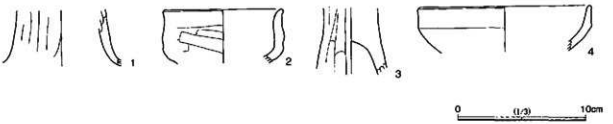
２　2003「山武郡芝山町井森戸遺跡・成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡・山武郡芝山町岩山中袋遺跡」



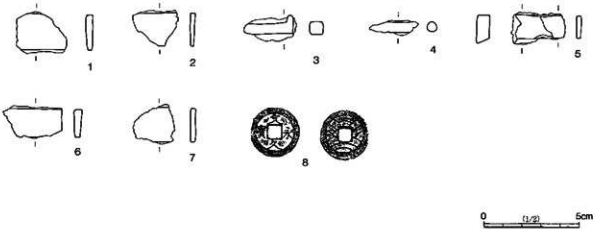
第78図　岩之台（井森戸）２遺跡SD102溝状遺構 (1/160)



第79図　岩之台（井森戸）２遺跡SD102溝状遺構出土遺物 (1/3)



第80図　岩之台（井森戸）２遺跡その他の遺物(1)（1/3）



第81図　岩之台（井森戸）２遺跡その他の遺物(2)（1/2）

『R296号線代替用地内埋蔵文化財調査報告』　財団法人千葉県文化財センター

3　2004　「芝山町上宿・井森戸遺跡」『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書３』　財団法人千葉県文化財センター

第4章　まとめ

第1節　井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）2遺跡の旧石器時代

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）2遺跡の旧石器時代は，井森戸遺跡ではⅢ層ソフトローム出土のフレイク類が主で一括資料を含め5点であるが，岩之台（井森戸）2遺跡では2か所から出土でともにⅦ層（第2黒色帯上部）出土で点数も第1地点24点と第2地点2点となっている。井森戸遺跡の石器類の出土地点は標高42m前後の谷津に近い台地の縁であり，岩之台（井森戸）2遺跡の石器類の出土地点は標高41m前後の台地の比較的奥の平坦な環境にある。

石材構成から見ると井森戸遺跡では，剥片が安山岩・珪質頁岩で，その他の砕片は黒曜石・珪質頁岩・安山岩である。一方岩之台（井森戸）2遺跡では，ナイフ形石器は安山岩，台形石器はメノウ，石核は安山岩・黒曜石，リタッチドフレイクは安山岩，その他の剥片はホルンフェルス・安山岩・メノウ・砂岩・黒曜石と様々な石材が認められるが，出土石材の60%を安山岩が占めている。

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）2遺跡の旧石器時代は，出土した石器類の点数はⅢ層・Ⅶ層ともに少量であり，当時の生活拠点というよりもむしろ狩猟の場としてのキャンプ的な性格に収まるものと考えられる。

第2節　井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）2遺跡の縄文時代

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）2遺跡の縄文時代は，井森戸遺跡では1軒の竪穴住居跡，陥穴3か所，遺物包含層1か所が，岩之台（井森戸）2遺跡では陥穴5基，土坑1基，遺物包含層3か所がそれぞれ検出された。井森戸遺跡の竪穴住居跡は出土した土器から田戸下層期のものと判断され，この時期のものとしては貴重な検出例となっている。

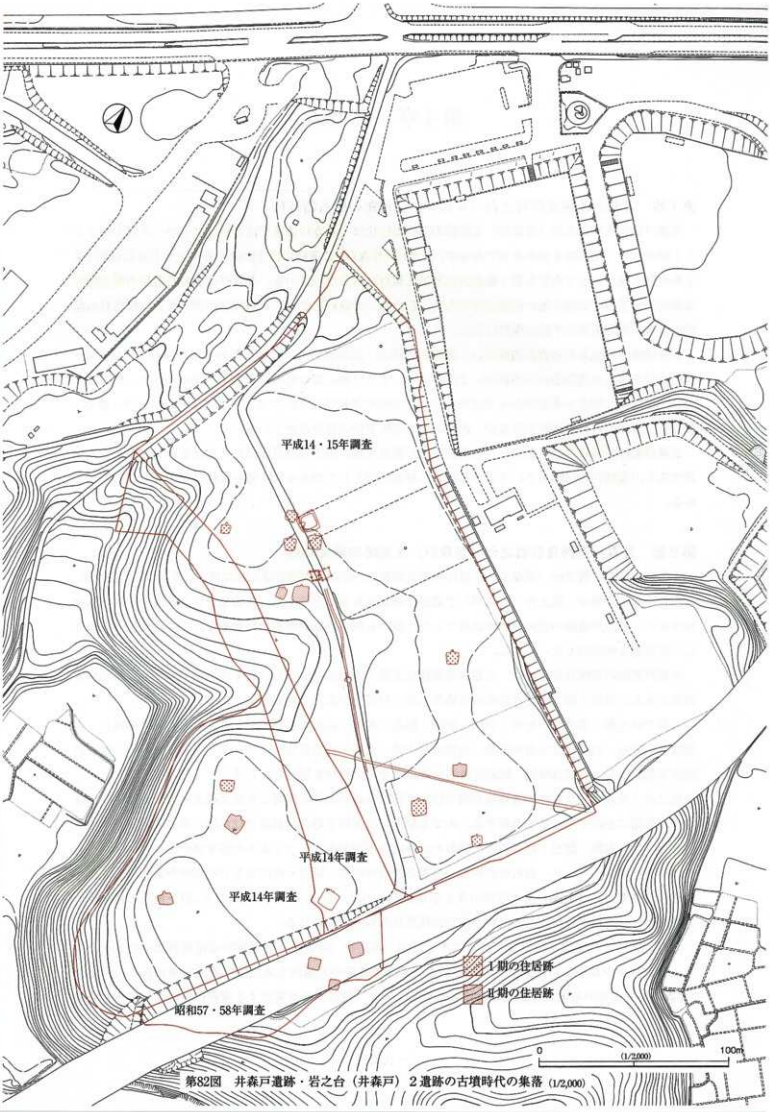
井森戸遺跡の遺物包含層では，土器は早期撚糸文系・沈線文系を中心に若干の前期土器がこれに加わる程度である。早期土器では文様構成の多様化した三戸式及び田戸下層式が目立っている。

石器では石鏃・尖頭器・石斧・石核・磨石・敲石・石皿・砥石などが出土しており，石鏃は黒曜石，尖頭器も黒曜石，石斧は安山岩や頁岩，石核は安山岩・頁岩・珪質頁岩・チャート，磨石は花崗岩，敲石は砂岩や硬質砂岩，石皿は砂岩，砥石は砂岩や凝灰岩などの石材を選択している。

岩之台（井森戸）2遺跡の遺物包含層では，土器は井森戸遺跡と同様に早期沈線文系の土器を中心に前期から後期にかけての土器が混在する。中でも早期では田戸下層式，前期では興津・浮島式が主である。

石器では，石鏃・敲石・打製石斧・砥石のほか用途不明のホルンフェルスの扁平礫が出土しており，石鏃は珪質頁岩・チャート，敲石は花崗岩，打製石斧は安山岩，砥石も安山岩などの石材を選択している。岩之台（井森戸）2遺跡の出土遺物の多くがⅢ層直上の出土であったが，これはⅡc層が後世の耕作等により削平された結果Ⅲ層直上の遺物が僅かに残されたものと思われる。

井森戸遺跡では黒曜石の石鏃が顕著であったが，岩之台（井森戸）2遺跡では珪質頁岩・チャートとなっておりやや異なる石材構成となっている。井森戸遺跡の石鏃出土地点は比較的谷津に近く，岩之台（井森戸）2遺跡の石鏃出土地点は台地の平坦部であり，使用する対象による選択の差であればきわめて



第82図　井森戸遺跡・岩之台（井森戸）２遺跡の古墳時代の集落（1/2,000）

興味深い結果である。

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡の縄文時代は，早期田戸下層式の土器を伴う住居跡が１軒検出されているものの，遺構としては両遺跡合わせて８基という陥穴の存在が目立っており，ベースキャンプ的にこの台地を利用していたものと考えられる。

第３節　井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡の古墳時代

井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡の古墳時代は，井森戸遺跡では５軒の竪穴住居跡が，岩之台（井森戸）２遺跡では６軒の竪穴住居跡と１基の小竪穴がそれぞれ検出された。両遺跡の所在する台地周辺は現在『はにわ道』用地部分を昭和57・58年[1]に，平成14年には隣接する296号代替用地部分[2]及びさらに南に位置する空港南部工業団地用地部分[3]の３か所がすでに調査されている。第１章でも触れたように，４地点の調査域は同じ台地上に存在し，遺跡としては同一である。（図版82）

今回報告する井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡に展開する集落が，先行して調査された地点において検出された集落の一部であることが判明した。岩之台（井森戸）２遺跡の北側に続いていたと思われる台地は調査以前にすでに削平されており，集落はこちらにも延びていた可能性は高い。住居は数軒ほどが一つの集まりを成しており，この台地上における集落構成を考える上で重要な視点となる。

坏の形態観察では，井森戸遺跡のSI009・SI010・SI011出土のものがSI006・SI007出土のものよりやや先行するものであり，岩之台（井森戸）２遺跡のSI001・SI101・SI104・SI105出土のものが同様にSI102・SI103出土のものに先行する。前者をⅠ期，後者をⅡ期とすると甕の形態観察では，井森戸遺跡の出土状況はほぼ坏の新旧関係と同じであるが，岩之台（井森戸）２遺跡の場合にはSI105のみ坏に比べてやや新しい傾向があり，Ⅰ期とⅡ期の過渡期の傾向がうかがえ，他の住居は坏の新旧関係と同じである[4]。

遺物の観察からこの台地上に展開する18軒中，時期を特定できる遺物の検出されなかった２軒を除く16軒についてはおおよそⅠ期とⅡ期の二時期に分けられる。Ⅰ期とⅡ期は北総台地における他の古墳時代後期の集落と比べると，７世紀前半と７世紀後半以降の実年代がそれぞれ想定され，井森戸遺跡周辺の土地利用が谷津田の開墾とともに進行した可能性をうかがわせている。この台地上にはこの時期以降の集落は見られず，平成15年に調査されたやや北方に位置する芝山町柳谷遺跡においてもⅡ期の住居跡と方形周溝状遺構が検出されている[5]。

このような周辺遺跡の状況からは，井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡のある台地が本格的な集落の展開を見せるのは古墳時代後期後半以降であり，この地域が新たな開墾地の対象となった時期でもあることを示している。さらに，台地の西側から大きく入り込む谷津を囲むように台地の平坦部に集落は展開し，いずれの住居跡もカマドの取り付け位置が北または北西であることから竪穴住居使用にあたり季節的な制約を受ける可能性もあり，年間を通して定住するタイプの集落であるのか周辺の未調査地域における同時期の集落の調査が待ち望まれる。

方形周溝状の遺構は出土遺物の観察からは８世紀代の可能性も考えられるが，３軒の住居に囲まれながら住居との切り合い関係が無くこれらの住居とさほど時間差の無い時期に存在していた可能性も否定できない。ロームを使用した裏込めや横穴式埋葬施設と同様な周溝に接する位置取り等，埋葬施設の仕様の観察からもこの遺構が古墳を意識して造られていることは明らかであり，この台地に展開する集落に何らかの関わりを持つ埋葬施設である可能性は高い。むしろ，Ⅰ期の集落廃絶後の区域に方形周溝状遺構という

墓跡を企画したと考えればⅡ期の集落と関わりが深いものである可能性も考えられる。

今回調査された地点では掘立柱遺構が２棟検出されている。２棟は隣接しその柱列は一部重なることから同時期に存在していたのではなく，移築または改築等相互に何らかの関連をもつものと思われる。ともに関連する遺物の出土は無く，前後関係については特定できない。また，集落との関係では他の時期の遺構が検出されておらず，谷津に近い斜面を登りきった場所を選択しており谷津での農業生産と関わりのある古墳時代の後期集落に伴うものと考えられる。

註１　1986 「井森戸遺跡」『主要地方道成田松尾線Ⅳ』 財団法人千葉県文化財センター

２　2003 「山武郡芝山町井森戸遺跡・成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡・山武郡芝山町岩山中袋遺跡」『旧296号線代替用地内埋蔵文化財調査報告』 財団法人千葉県文化財センター

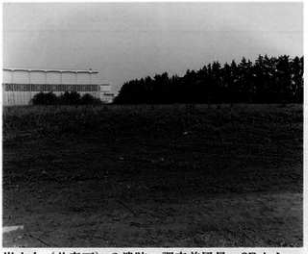
３　2004 「芝山町上宿・井森戸遺跡」『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書３』 財団法人千葉県文化財センター

４　筆者はかつて，佐倉市タルカ作遺跡（1985 「佐倉市タルカ作遺跡」『佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 財団法人千葉県文化財センター）の集落出土の土器分類を試みた際，須恵器の蓋坏及び坏身を模した土師器坏の存在から坏及び伴出する甕・甑を中心に古墳時代後期の住居跡出土の土器形態がⅠ～Ⅳ段階に細分できることを指摘した。井森戸遺跡及び岩之台（井森戸）２遺跡出土の土器の観察の結果Ⅰ期はタルカ作遺跡のⅢ段階に，Ⅱ期はタルカ作遺跡のⅣ段階にそれぞれ該当するものと思われる。特にⅣ段階は７世紀後半から地域によっては８世紀まで続く可能性もあり，タルカ作遺跡においてもこれらの時期と重複する時期の土器とともに方形周溝状遺構が検出された。

５　2005 「芝山町大里馬土手・柳谷遺跡」『空港整備地区南側貨物取扱施設埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 財団法人千葉県文化財センター

写　真　図　版

井森戸遺跡
岩之台（井森戸）2遺跡



岩之台（井森戸）２遺跡　調査前風景　SEから

井森戸遺跡　調査前風景　Wから

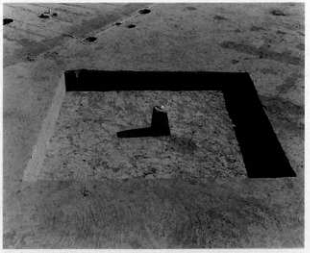
（岩）1C-00グリッド下層セクション　東壁　Wから

（井）2C-52グリッド下層セクション　北壁　Sから

（井）縄文土器包含層

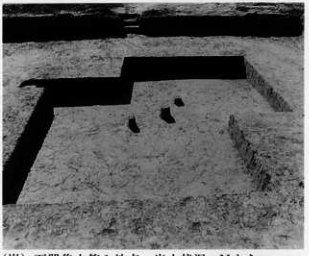
（井）3D-07グリッド旧石器時代遺物出土状況

(岩) 石器集中第1地点　出土状況　Eから

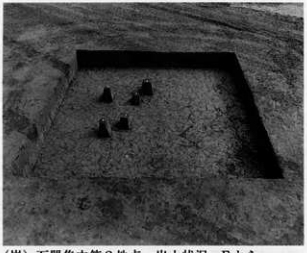


(岩) 石器集中第1地点　出土状況　Wから

(岩) 石器集中第1地点　出土状況　Eから



(岩) 石器集中第1地点　出土状況　Nから



(岩) 石器集中第2地点　出土状況　Eから

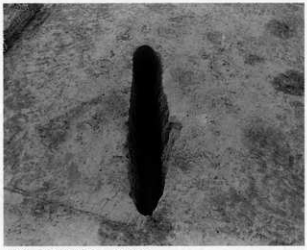
(岩) 縄文時代包含層遺物出土状況　SEから

（井）SK006全景　Eから

（井）SK007全景　SEから

（井）SK008全景　SEから

（岩）SK001全景　SEから



（岩）SK002全景　Eから

（岩）SK003全景　Eから

（岩）SK004全景　NEから

（岩）SK005全景　Eから

（井）SI008遺物出土状況　Sから

（井）SI008全景　Sから

（井）SI006遺物出土状況　Eから

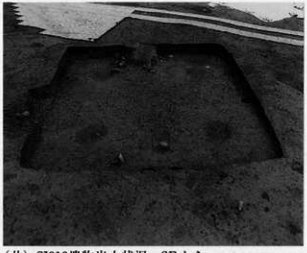
（井）SI006全景　Eから

（井）SI007カマド脇遺物出土状況　Eから

（井）SI007全景　SEから

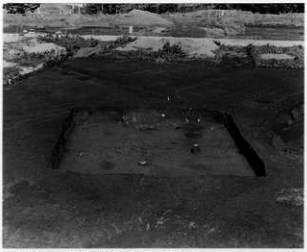
（井）SI009遺物出土状況　Eから

（井）SI009全景　Sから



（井）SI010遺物出土状況　SEから

（井）SI010全景　SEから



（井）SI011遺物出土状況　SEから

（井）SI011全景　SEから

（岩）SI001遺物出土状況　SEから

（岩）SI001全景　SEから

（岩）SI101遺物出土状況　Sから

（岩）SI101全景　Sから

（岩）SI102遺物出土状況　Sから

（岩）SI102全景　SWから

（岩）SI103遺物出土状況　Sから

（岩）SI103全景　Sから

（岩）SI104遺物出土状況　Eから

（岩）SI104全景　Nから

（岩）SI105遺物出土状況　SEから

（岩）SI105全景　SEから

右：（井）SB001全景　NWから
左：（岩）SB002全景　NWから

（岩）SB002全景　NWから

（岩）SM001遺物出土状況　SWから

（岩）SM001埋葬施設遺物出土状況　SWから

（岩）SM001埋葬施設遺物出土状況　SWから

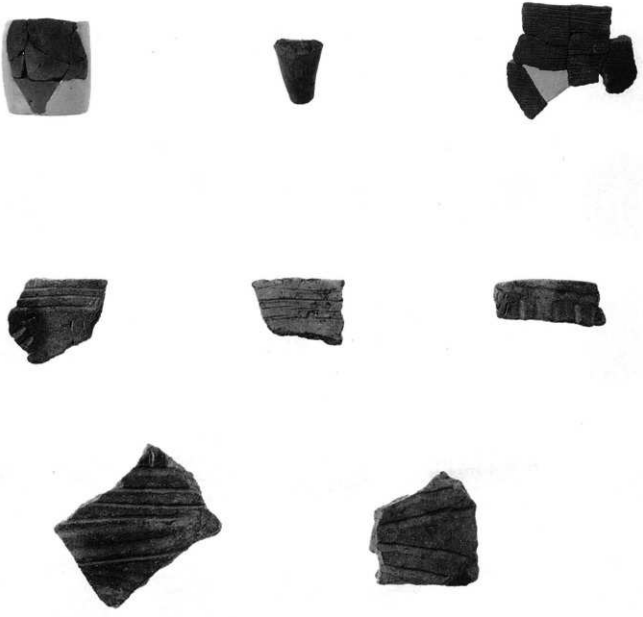
（岩）SM001埋葬施設土層断面　Eから

（岩）SM001全景　SWから

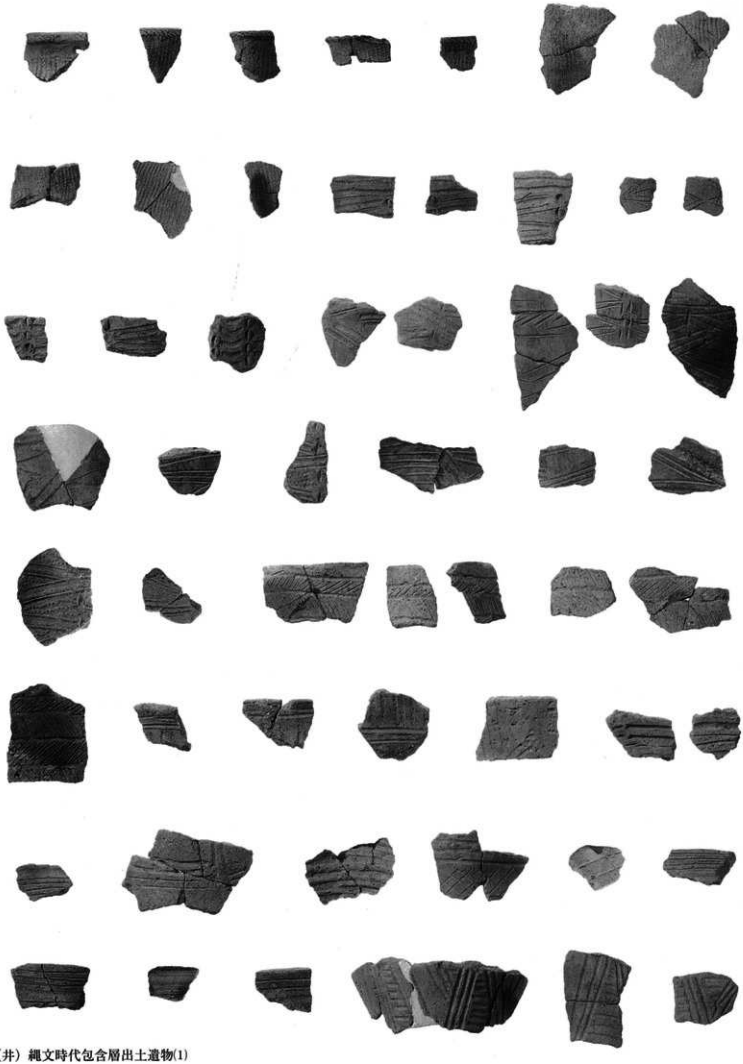
（岩）SM001埋葬施設全景　SWから

（岩）SD001・SD101全景　Eから

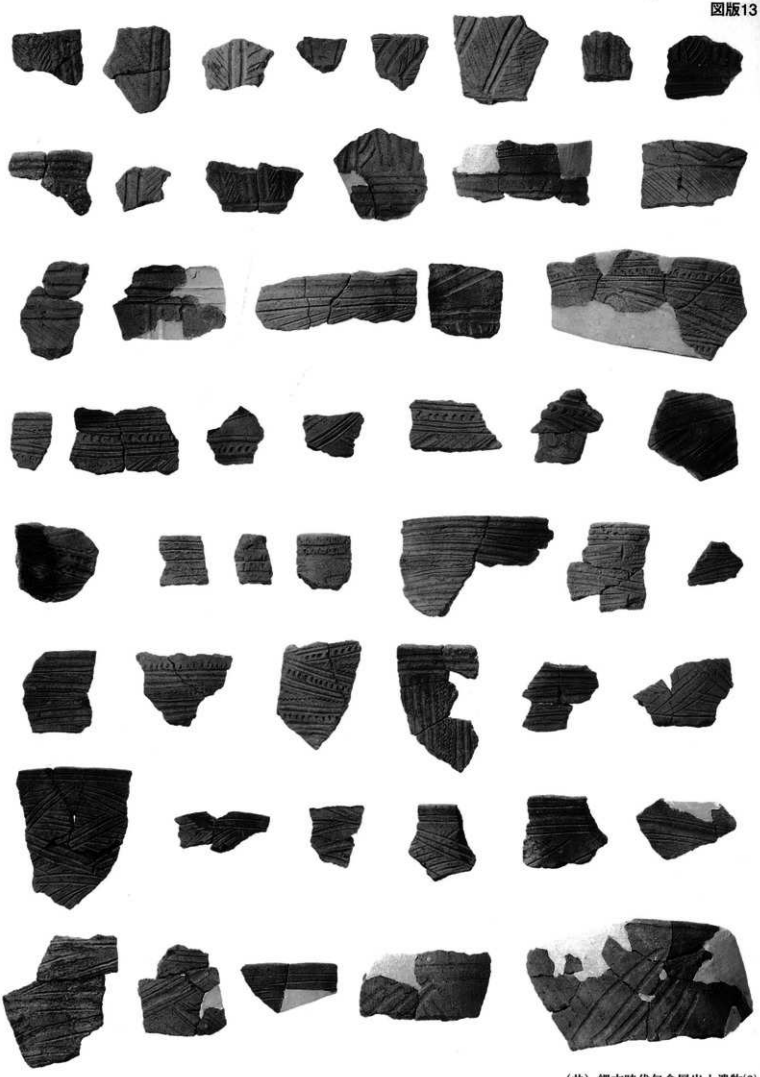
（井）旧石器時代石器



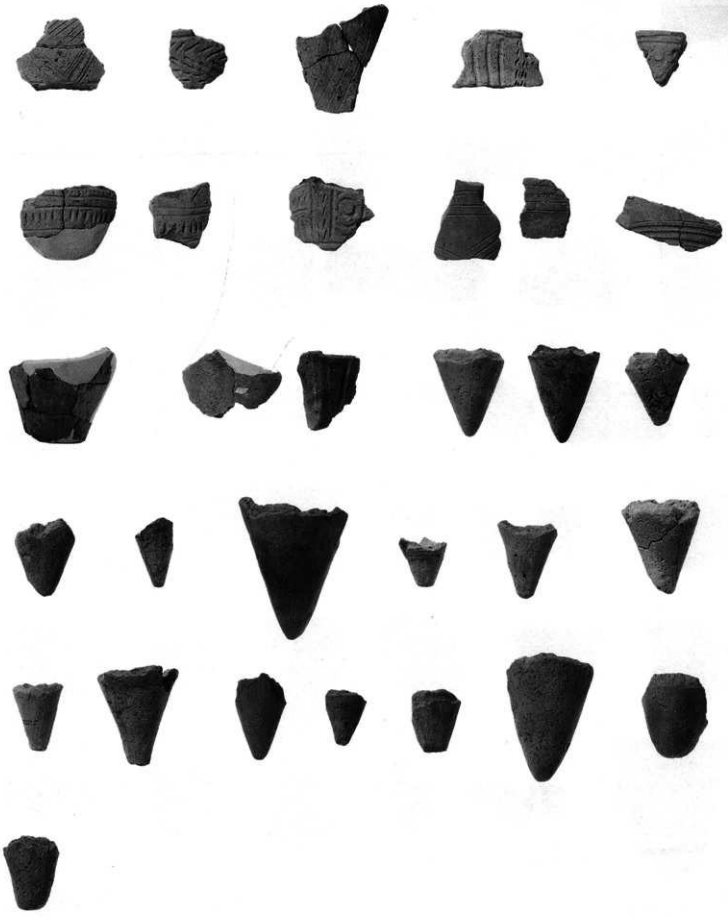
（井）SI008住居跡出土遺物



(井) 縄文時代包含層出土遺物(1)

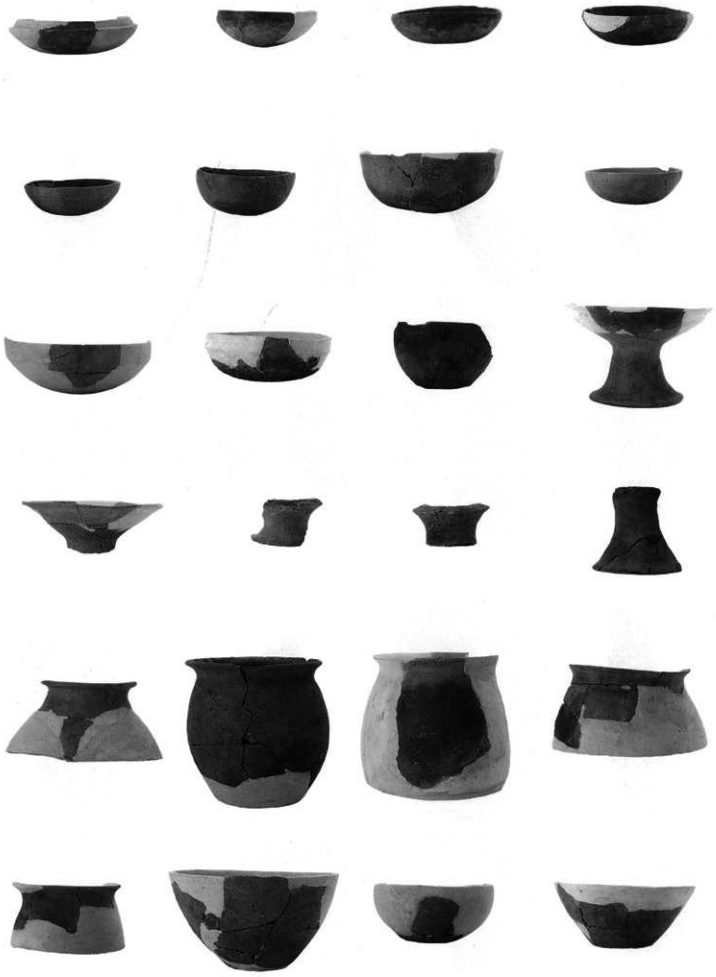


（井）縄文時代包含層出土遺物(2)

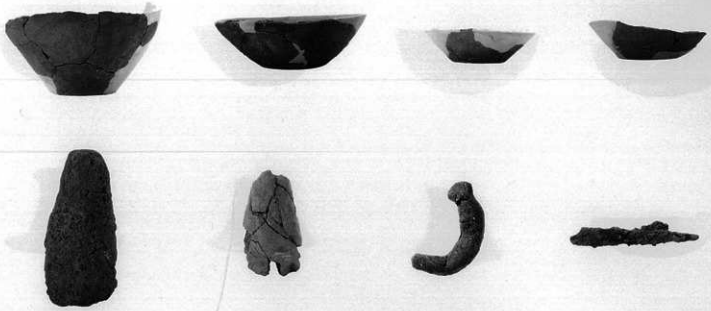


(井) 縄文時代包含層出土遺物(3)

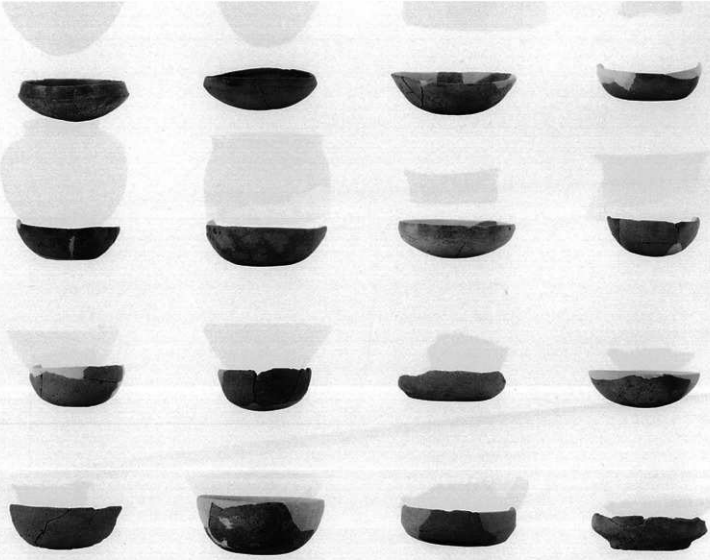
（井）縄文時代石器



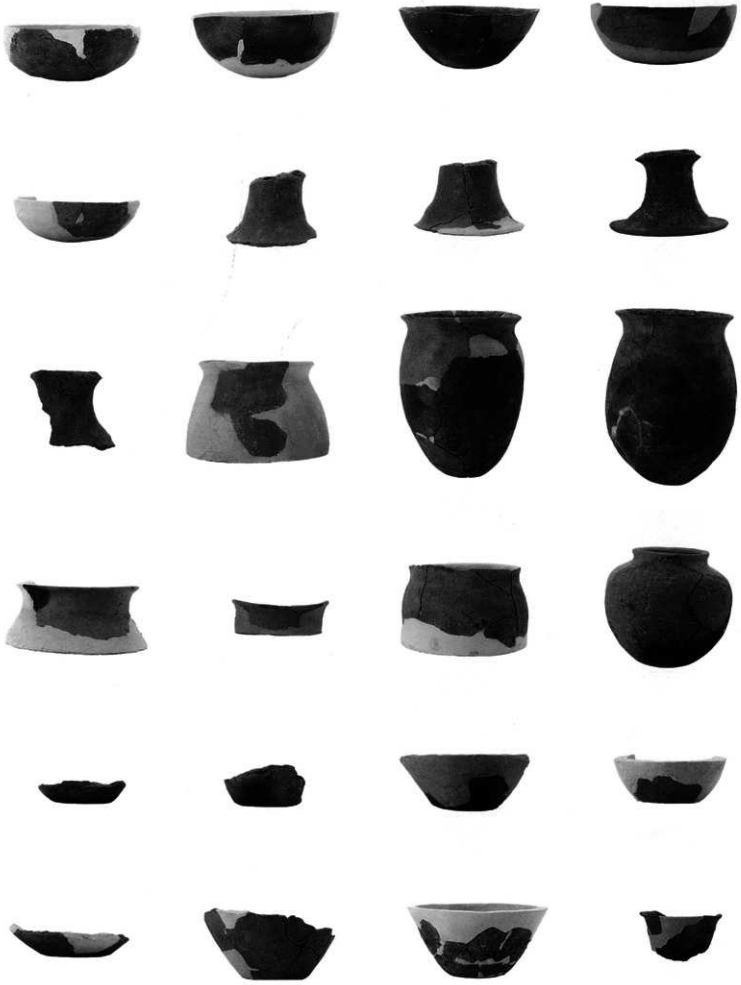
(井) SI006住居跡出土遺物(1)



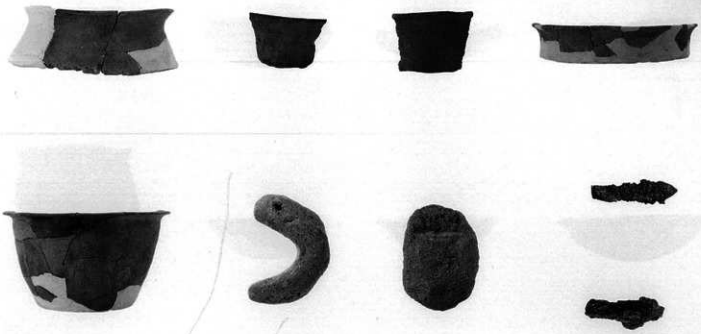
（井）SI006住居跡出土遺物(2)



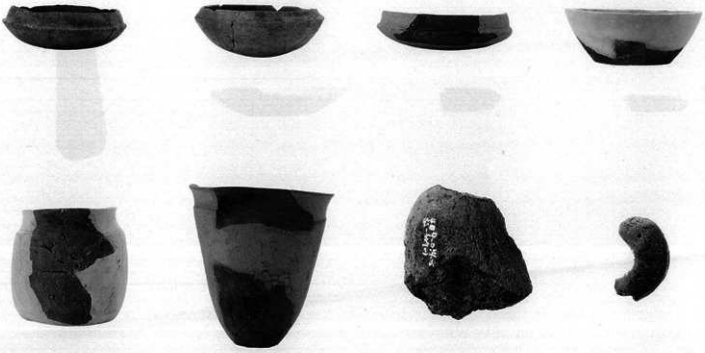
（井）SI007住居跡出土遺物(1)



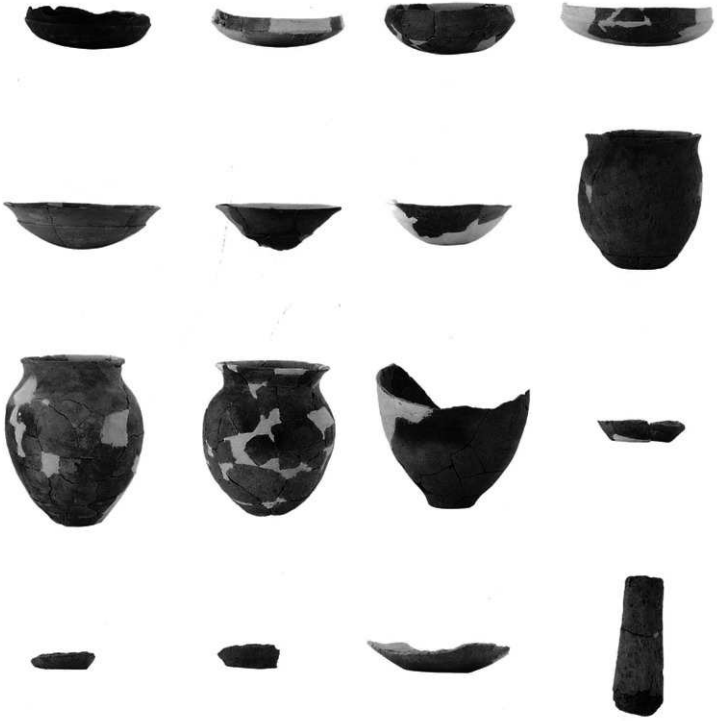
（井）SI007住居跡出土遺物(2)



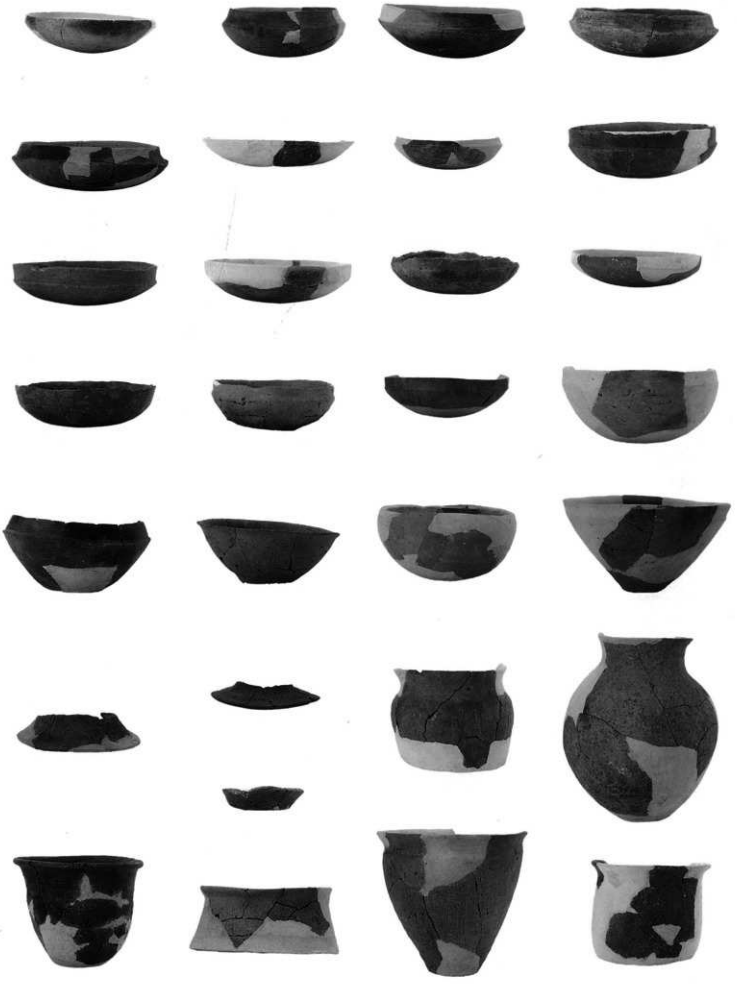
（井）SI007住居跡出土遺物(3)



（井）SI009住居跡出土遺物



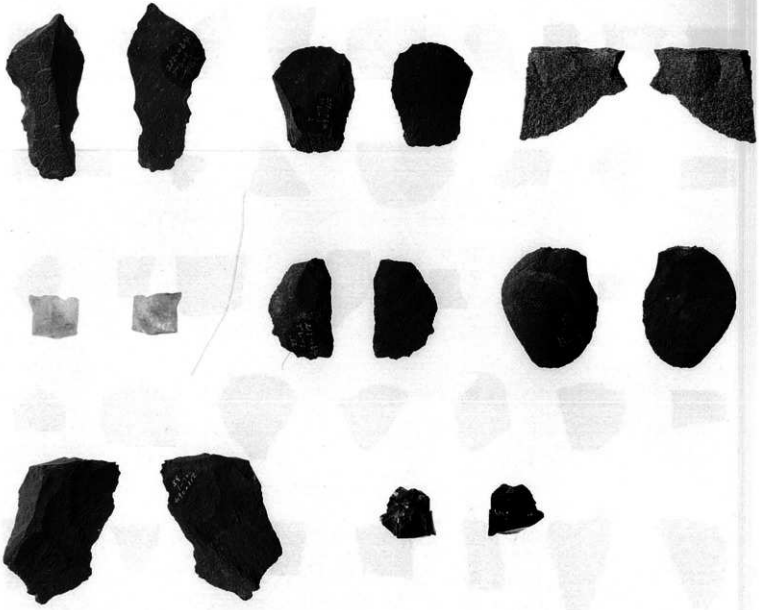
（井）SI010住居跡出土遺物



（井）SI011住居跡出土遺物

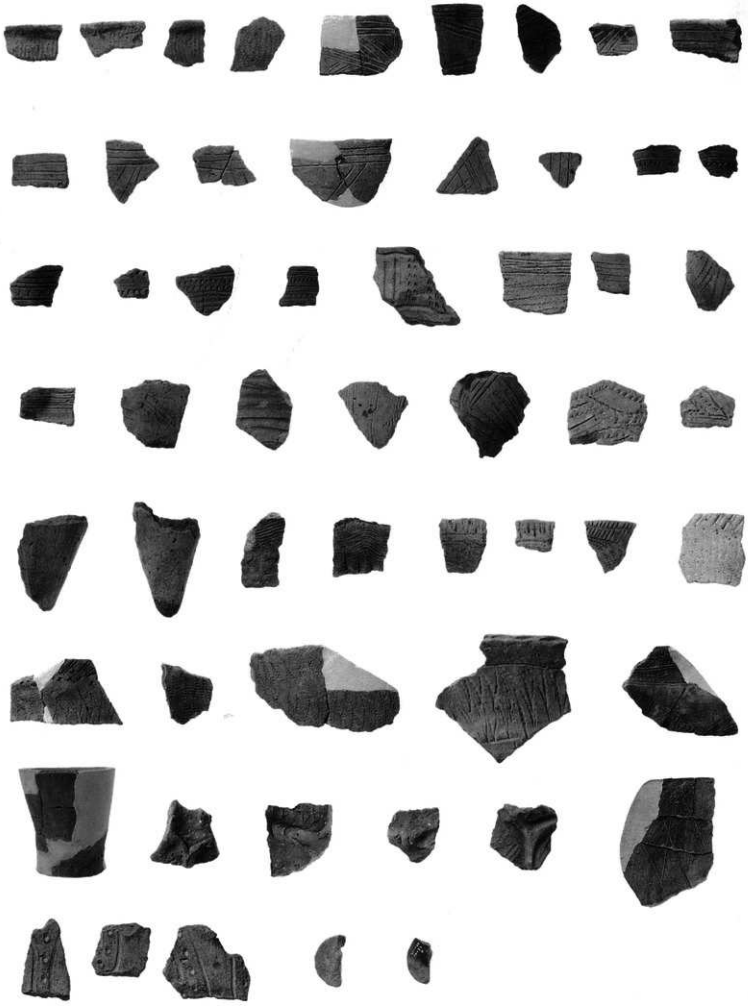
（井）その他の遺物

（岩）旧石器時代第１地点出土石器(1)



（岩）旧石器時代第１地点出土石器(2)

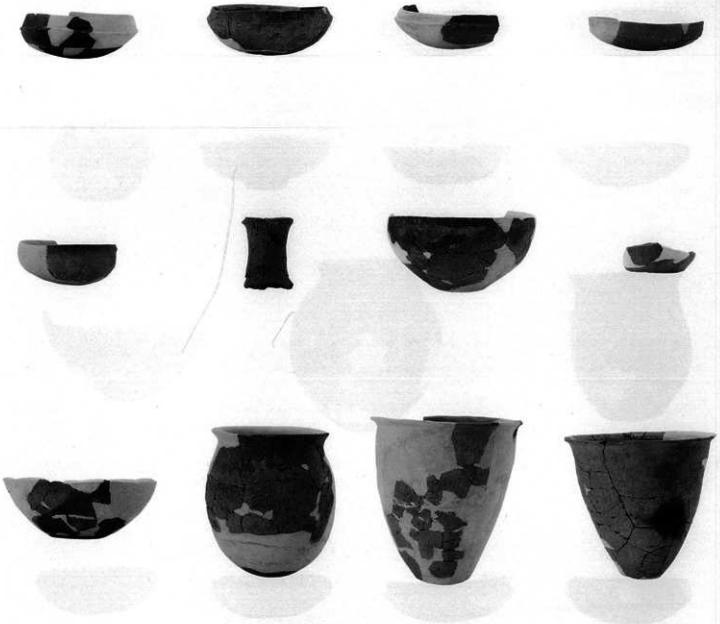
（岩）旧石器時代第２地点出土土器



（岩）縄文時代包含層出土土器

（岩）縄文時代石器

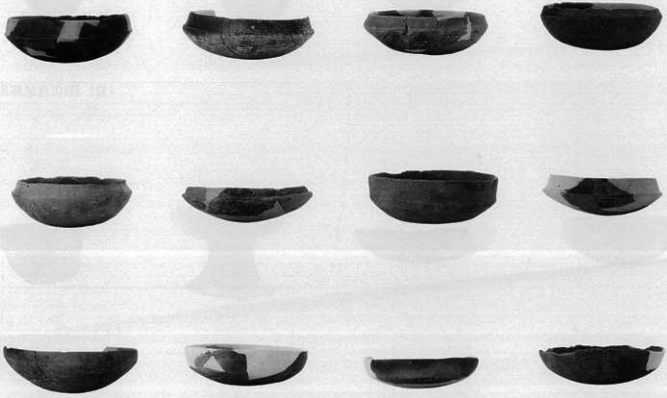
（岩）SI001住居跡出土遺物



（岩）SI101住居跡出土遺物

（岩）SI102住居跡出土遺物

（岩）SI103住居跡出土遺物



（岩）SI104住居跡出土遺物(1)

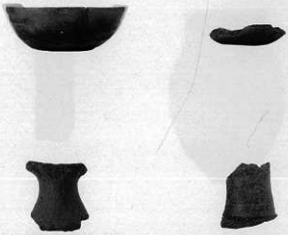
（岩）SI104住居跡出土遺物(2)

（岩）SI105住居跡出土遺物

図版30

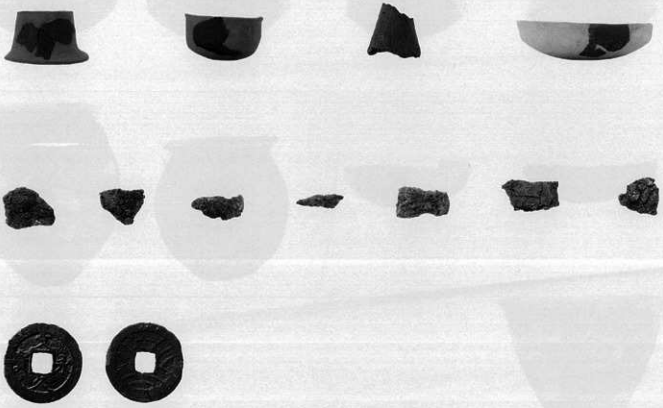
（岩）SI106住居跡出土遺物

（岩）SM001方形周溝状遺構出土遺物



（岩）SD001・SD101溝状遺構出土遺物

（岩）SD102溝状遺構出土遺物



（岩）その他の遺物

報告書抄録

ふ り が な	くうこうせいびかもつちくみなみがわかもつとりあつかいしせつまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	空港整備貨物地区南側貨物取扱施設埋蔵文化財調査報告書Ⅱ
副 書 名	芝山町井森戸遺跡・成田市東三里塚岩之台（井森戸）２遺跡
巻　　次	Ⅱ
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第５３４集
編 著 者 名	石倉亮治
編 集 機 関	財団法人　千葉県教育振興財団
所　在　地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地２
発行年月日	2006年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
井森戸遺跡	山武郡芝山町岩山字井森戸120－2他	409	014	35°44′22″	140°24′15″	20020617～20030331 20030715～20031225	6,750㎡ 1,250㎡	空港整備貨物地区南側貨物取扱施設工事に伴う事前調査
岩之台（井森戸）２遺跡	成田市東三里塚字岩之台126－1他	212	064	35°44′18″	140°24′14″	20020617～20030331 20030715～20031225	9,250㎡ 15,750㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井森戸遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 古墳時代	住居跡 陥穴 住居跡 掘建柱遺構	石器 縄文土器・石器 土師器	
岩之台（井森戸）２遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代	住居跡 掘建柱遺構 方形周溝状遺構	石器 縄文土器・石器 土師器・須恵器	

千葉県教育振興財団調査報告第534集

芝山町井森戸遺跡・成田市東三里塚岩之台(井森戸)2遺跡

空港整備地区南側貨物取扱施設埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成18年3月24日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団

発　行　成田国際空港株式会社
千葉県成田市木の根字神台24番地

財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県因街道市鹿渡809番地2

印　刷　株式会社　正　文　社
千葉市中央区都町1丁目10番6号